福島県西白河郡
矢吹町文化財調査報告第6集

七　軒　横　穴　群

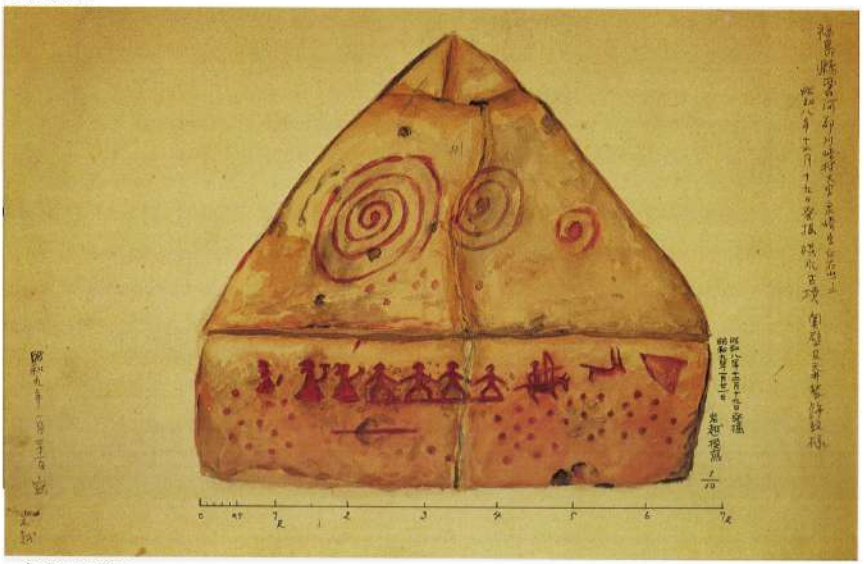
昭和58年3月

矢吹町教育委員会

福島県西白河郡
矢吹町文化財調査報告第6集

七　軒　横　穴　群

Farbtafel



泉崎4号横穴

奥壁及び天井部模写図
故 岩越二郎先生作成

序　　文

七軒横穴群の調査報告を，矢吹町文化財調査報告第６集として刊行することになりました。

この横穴群は，昭和55年７月に山林を畑に造成する工事中に発見されました。ちょうど泉崎村との町村境にあたり，国指定史跡泉崎壁画古墳の東方に位置しています。このふたつの横穴群は，地形的にはひとつの丘陵に立地し，周辺には大きな横穴群が存在していたと推定されます。

今回の調査により，約1300年前の祖先の具体的な営みを示す遺構や遺物が出土し，矢吹町の歴史の一端が明らかとなりました。わたしたちは，こうした文化財を記録にとどめ，町民の皆さまとともにかけがえのない文化財を守りそだてていきたいと思います。

この報告書が，郷土史の研究資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

なお調査にさいしましては，福島県教育委員会・福島県文化センターをはじめ，関係各位から数々のご協力をうけました。篤く感謝申し上げます。

昭和58年３月31日

矢吹町教育委員会

教育長職務代理者　大沼重一

例　　言

1　この報告書は，福島県西白河郡矢吹町大字松倉字七軒に所在する横穴群の発掘調査成果である。

2　付章1は，近接する泉崎村泉崎横穴群に関する資料を掲載した。泉崎横穴群に関する全般的な資料は，福島県文化センター歴史資料課に寄託された岩越二郎文書によった。また東京国立博物館と泉崎中央公民館が保管する遺物もあわせて掲載した。

3　付章2は，県南地方の横穴から出土した鉄刀を集成した。

4　七軒横穴群の発掘調査は，矢吹町教育委員会が主体となり，目黒吉明を調査担当者として実施した。調査には，高橋信一，福島雅儀が加わった。

5　報告書の作成は，福島が行い，伊藤登茂が補助をした。

6　独文抄訳は，福島の原稿をもとに，神崎一昌が作成した。

7　七軒横穴群から出土した遺物は，矢吹町教育委員会がすべて保管している。

8　報告書の作成にあたっては，各方面から教示と協力を受けた。ここにその芳名を明記し，深く感謝の意を表したい。ことに白石太一郎先生にお世話になった。

穴沢　咊光　　石野　博信　　石本　　弘　　岡田　文男　　加藤　　謙
神崎　一昌　　鈴鹿　良一　　関　　秀夫　　高橋美久二　　玉川　一郎
千賀　　久　　坪之内　徹　　寺島　文隆　　永山　倉造　　中井　　公
丹羽　　茂　　根本　信孝　　藤田　定興　　望月　幹夫　　山田　邦和

泉崎中央公民館・橿原考古学研究所・京都市埋蔵文化財研究所・国立歴史民族博物館
須賀川市教育委員会・白河市教育委員会・東京国立博物館・同志社大学考古学研究室
福島県教育委員会・福島県文化センター歴史資料館

七軒横穴群調査報告

目　　次

第1章　序　　説 …… 1

1節　七軒横穴群の位置と環境 …… 1

2節　七軒横穴群と歴史的環境 …… 3

第2章　七軒横穴群の調査経過 …… 10

1節　調査に至る経過と調査組織 …… 10

2節　発掘調査と報告書の作成 …… 11

第3章　七軒横穴群の遺構と遺物 …… 12

1節　横穴群の位置と地形 …… 12

2節　1　号　横　穴 …… 15

3節　2　号　横　穴 …… 21

4節　ま　と　め …… 25

付章1　泉崎横穴群とその出土遺物 …… 28

付章2　県南地方の横穴群から出土した鉄刀 …… 43

図 版 目 次

巻首図版	泉崎4号横穴奥壁及び天井部模写図(故 岩越二郎先生作成)	
図版第一	七軒・泉崎横穴群	七軒・泉崎横穴群の航空写真
図版第二	七軒横穴群	1 七軒・泉崎横穴群の遠景(南から) 2 七軒横穴群の近景(東から)
図版第三	七軒横穴群	1 2号横穴と1号横穴(南から) 2 2号横穴と1号横穴(東南から)
図版第四	七軒横穴群	1 1号横穴(東から) 2 1号横穴(北から)
図版第五	七軒横穴群	1 1号横穴の玄門部(東から) 2 玄室入口側の排水溝(東から) 3 1号横穴の屍床(南から)
図版第六	七軒横穴群	1 2号横穴の玄室(入口から) 2 2号横穴の玄門部(上から)
図版第七	七軒横穴群	1号横穴から出土した鉄刀
図版第八	七軒横穴群	1 1号A刀の把部 2 1号B刀の把部 3 1号C刀の把部 4 1号D刀の把部
図版第九	七軒横穴群	1 1号横穴から出土した刀子と刀装具 2 1号横穴から出土した須恵器
図版第一〇	七軒横穴群	2号横穴から出土した鉄製品
図版第一一	泉崎横穴群	1 白石山支群遠景(南から) 2 陣場支群(1・2号横穴)から白石山支群を望む
図版第一二	泉崎横穴群	1 3号横穴と4号横穴の玄門(右側4号に壁画) 2 4号横穴の入口を覆うドーム
図版第一三	泉崎横穴群	1 4号横穴玄室 奥壁および天井部の壁画 2 4号横穴玄室 奥壁の壁画
図版第一四	泉崎横穴群	1 4号横穴玄室 北壁の壁画

図版第一四　泉崎横穴群　2　4号横穴玄室　南壁の壁画
図版第一五　泉崎横穴群　1　泉崎横穴群から出土した遺物
2　昭和8年泉崎横穴群発掘関係者記念撮影
図版第一六　泉崎横穴群　泉崎壁画横穴(4号)の玄室
図版第一七　泉崎横穴群　1　泉崎横穴群から出土した鉄製品
2　2号横穴から出土した須恵器と土師器
図版第一八　白河観音山横穴群　白河観音山横穴群から出土した鉄刀

挿図目次

第1図　七軒・泉崎横穴群とその周辺の古墳・横穴 …… 5
第2図　田島銀蔵古墳石棺実測図 …… 7
第3図　下総塚古墳石室実測図 …… 8
第4図　七軒・泉崎横穴群の周辺地形図 …… 13
第5図　七軒横穴群と泉崎壁画横穴の位置図 …… 14
第6図　七軒1号横穴実測図 …… 16
第7図　七軒横穴群出土　鉄刀実測図 …… 18
第8図　七軒1号横穴出土　刀装具と刀子実測図 …… 19
第9図　七軒1号横穴出土　須恵器実測図 …… 20
第10図　七軒2号横穴実測図 …… 22
第11図　七軒2号横穴遺物出土状況実測図 …… 23
第12図　七軒2号横穴出土　鉄製品実測図 …… 24
第13図　泉崎1号横穴・2号横穴実測図 …… 30
第14図　泉崎3号横穴実測図 …… 31
第15図　泉崎4号横穴実測図 …… (折込)
第16図　泉崎横穴群横穴実測図 …… 37
第17図　泉崎横穴群出土　土器実測図 …… 38
第18図　泉崎横穴群出土　鉄製品実測図 …… 40
第19図　鉄刀各部の名称 …… 44
第20図　白河観音山横穴群出土　鉄刀実測図 …… 46
第21図　白河観音山横穴群出土　鉄刀実測図 …… 48

第 22 図　白河観音山横穴群出土　3号A刀の刀装具実測図 …… 49
第 23 図　白河観音山横穴群出土　鐔と鞘尻金具実測図 …… 51
第 24 図　郭内横穴群出土　鉄刀実測図 …… 52
第 25 図　郭内横穴群出土　鉄刀実測図 …… 53
第 26 図　郭内横穴群出土　刀装具実測図 …… 55
第 27 図　笊内古墳群出土　鉄刀実測図 …… 56
第 28 図　笊内古墳群出土　鉄刀実測図 …… 58
第 29 図　神成横穴群出土　鉄刀実測図 …… 60
第 30 図　泉崎観音山北横穴群出土　鉄刀実測図 …… 61
第 31 図　参考資料 1　中古墳・烏土塚古墳出土　鉄刀実測図 …… 62
第 32 図　参考資料 2　県南地方の横穴出土　須恵器実測図 …… 64
第 33 図　Ⅰ群刀概念図 …… 70
第 34 図　Ⅱ群刀概念図 …… 71
第 35 図　Ⅲ群刀概念図 …… 72
第 36 図　Ⅳ群刀概念図 …… 72
第 37 図　Ⅴ群刀概念図 …… 73

表　目　次

表 1　七軒・泉崎横穴群とその周辺の古墳・横穴一覧表 …… 6
表 2　県南地方の横穴から出土した鉄刀の一覧表 …… 82

七 軒 横 穴 群

第1章　序　　説

1節　七軒横穴群の位置と環境

位　　置　七軒横穴群は，福島県西白河郡矢吹町大字松倉字七軒に所在する。矢吹町の行政区では南端にあたり，泉崎村との町村境に位置している。国鉄東北本線矢吹駅から南へ約７㎞，泉崎駅から泉川に沿って東方へ２㎞の地点である。

福島県は東北地方の最南端に位置し，北海道・岩手県に次いで全国３位の面積を有している。それを南北に縦走する阿武隈山地，奥羽山脈によって三地域に区分し，一般に東から浜通り，中通り，会津と呼んでいる。さらに中通りを北から県北，県中，県南と分けている。矢吹町は県南地方の中央に位置する。

地　　形　県南地方の地形は，阿武隈山地・八溝山地・奥羽山脈の山間部と，それに囲まれた盆地状の低地に大別される。このうち矢吹町は，阿武隈川上流域の盆地部に位置し，福島県内でも台地と丘陵の発達した地域である。とくにかつて行方原（なめかたはら）と呼ばれた矢吹ケ原は，盆地の中央に立地し，河川による浸蝕も少なく須賀川市から白河市・中島村にかけて平坦な台地が続いている。台地の中央部では所々に島状に残る丘陵や小規模な湿地が散在するものの，大きな地形的変化はみられない。縁辺部では，東と南を阿武隈川，西を釈迦堂川とその支流により浸蝕され，河岸段丘と氾濫原を形成している。

阿武隈川の東岸から山地にかけては，丘陵を樹枝状に開析して西流する小河川が発達し，定高性の残丘と河谷平野がからみあった複雑な地形を呈している。矢吹ケ原の西側は，奥羽山脈から東流する釈迦堂川・広戸川・隈戸川などにより丘陵が開析されて，残丘が細長く帯状に平列して伸びている。またその間には小規模な河岸段丘と氾濫原がみられる。

地　　質　この地域の基盤は，盛岡・白河構造線にそった断裂運動による火山活動によって形成されたグリーンタフ層である。約2500万年前の新第三紀初頭の地層である。その上に約200万年前の鮮新世末期から，約110万年前の更新世初期にかけて，火山の噴火によって形成された火砕流堆積物が厚く覆っている。この地層は鈴木敬治（鈴木：1968）によって３層に区分され，上位からＤⅠ層・ＤⅡ層・ＤⅢ層と呼ばれている。ＤⅠ層は，角

閃石輝石と高温石英粒を多く含むやや熔結度の弱い凝灰岩である。この地層には横穴が数多く造られている。DⅡ層は，熔結度の高い石英安山岩質熔結凝灰岩である。パミス・黒色火山ガラスがレンズ状に含まれている特徴がある。この岩石は，須賀川石・三城目石として広く利用され，また古代においても横穴式石室の石材として用いられていた。しかしこの地層を掘り込んで，横穴はほとんど造られていない。DⅢ層は，熔結度の弱い砕物状の凝灰岩である。磁鉄鉱・赤鉄鉱を多量に含むが角閃石は含まれていない。この地層は，盆地部の地表ではほとんどみられない。またDI層・DⅡ層・DⅢ層の間には，不整合面をはさんでシルト・砂・礫層が間層として堆積し，これらの火砕流堆積物が長い時間をかけて形成されたことを示している。

矢吹ケ原の丘陵部は，この火砕流堆積物の上に白河ローム層(鈴木：1968)と呼ばれる降下火山灰によって直接覆われている。これに対して台地部では，DI層の上に郡山層と呼ばれる泥・砂・礫などが互層に堆積し，ラミナの発達した水成堆積物が覆い，その上に白河ローム層が堆積している。このことから台地部はある時期には，湖となっていたことを示している。白河ローム層は，上位からA層・B層・C_1層・C_2層・D層の5層に区分されている。A層は沖積世，B層はウルム氷期，C_1・C_2層はリス・ウルム間氷期に降灰したと推定されている。また阿武隈山地西縁丘陵地帯では古期花崗閃緑岩体を基盤とし，上部はその風化土や白河ローム層に覆われている。

気　　候　矢吹町は，東西を山地に囲まれているために日較差・年較差が大きく，降水量も少ない内陸性気候である。1年の平均気温は11.5度であるが，寒暖の日数をみると夏日は80日前後，真夏日は20日前後あり，冬日は130日である。しかし真冬日はほとんどない。つまり夏は比較的短く，冬はあまり寒くはないがかなり長い。

次に植生をみると，気候を反映して落葉広葉樹を主体とする温帯林に属している。矢吹ケ原の中央部に位置する諏訪山保安林では，コナラ・シデ・ミズケラなどが繁茂している。さらに，地質的影響を受けて酸性度の高い土地や人の手が加えられたところでは，アカマツ林がみられる。したがって，カシ・シイなどの常緑広葉樹が主体となる関東地方や西日本などと較べると，やや気候的には寒い地方ということができる。

以上述べた地形・地質・気候は，現代のわれわれの生活・風土を構成する重要な要素であるが，過去の人々とも同様に密接に結びついていたはずである。

2節　七軒横穴群と歴史的環境

県南地方の考古学的研究は，岩越二郎・藤田定一・首藤保之助などによって古くから積極的に進められた。その結果，県内でもかなり詳細に遺跡が把握されている地域である。また近年では，国営農地総合開発にともなう調査によって，遺跡の具体的内容が明らかにされつつある。ここではこれらの研究や調査の成果をふまえて，主として古墳時代後期を中心としたこの地方の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代　この時代の遺跡は，阿武隈川とその支流を臨む河岸段丘や丘陵の縁辺部に主として分布している。鏡石町成田遺跡・東村谷地前Ｃ遺跡・石川町上悪戸遺跡・同薬師堂遺跡などが代表的な遺跡である。このうち上悪戸遺跡では，脈石英を素材として，ナイフ形石器・ドリル・スクレイパー・石核・フレークなどが出土している。これらの石器の製作技法には，石刃剝離技法はみられず，石器は定形的なものは少ない。このなかでナイフ形石器は縦長の剝片を用い，打撃点側の側縁に刃潰しを加え基部調整を行った小さなナイフである。他の石器も剝片を用いたものや，軽い二次調整を加えたものである。したがって，ナイフ形石器文化のなかでも比較的古い時期であろう。

成田遺跡では，頁岩を用いて石刃技法により製作されたナイフ形石器が出土し，成田型刃器の標式遺跡となっている。こののちナイフ形石器の文化は，谷地前Ｃ遺跡を経て薬師堂遺跡へと続いている。薬師堂遺跡では新たに細石刃が出現する。しかしこの時代の遺構はいまだに検出されていない。

縄文時代　最後の氷河期が終った１万年前ころになると気候は温暖になり，それとともに新しい文化が生みだされた。つまり縄文時代を特徴づける土器の出現である。また石器も磨製石器や石鏃などが作られ多様化する。その結果人々の生活空間は拡大し，遺跡は阿武隈川流域から山間部まで分布するようになり，さらに規模も大きくなる。

この時代の代表的な遺跡として，天栄村二木松遺跡・同桑名邸遺跡，矢吹町下荒具遺跡，石川町上森屋段遺跡・同七郎内Ｃ遺跡などがある。しかし県南地方の縄文時代の遺跡は，発掘調査の行われた例は少ないために十分な資料の蓄積は得られていない。

縄文早期の遺跡では，上森屋段遺跡から大畑Ｇ式にともなう竪穴住居跡が検出され，石

川町上悪戸遺跡では茅山下層式の土器をともなう円筒形の土坑が検出されている。中期の例では，七郎内C遺跡から竪穴式住居跡や土坑が検出され，それとともに多量の土器と石器などが出土している。後晩期の遺跡は，それまでの丘陵部から河川に近い低位の段丘面に進出する遺跡が多くなる。須賀川市洞川岸A遺跡や同一斗内遺跡などがその代表的な遺跡である。いずれの遺跡からも埋設土器が検出され，再葬墓と推定される遺構である。

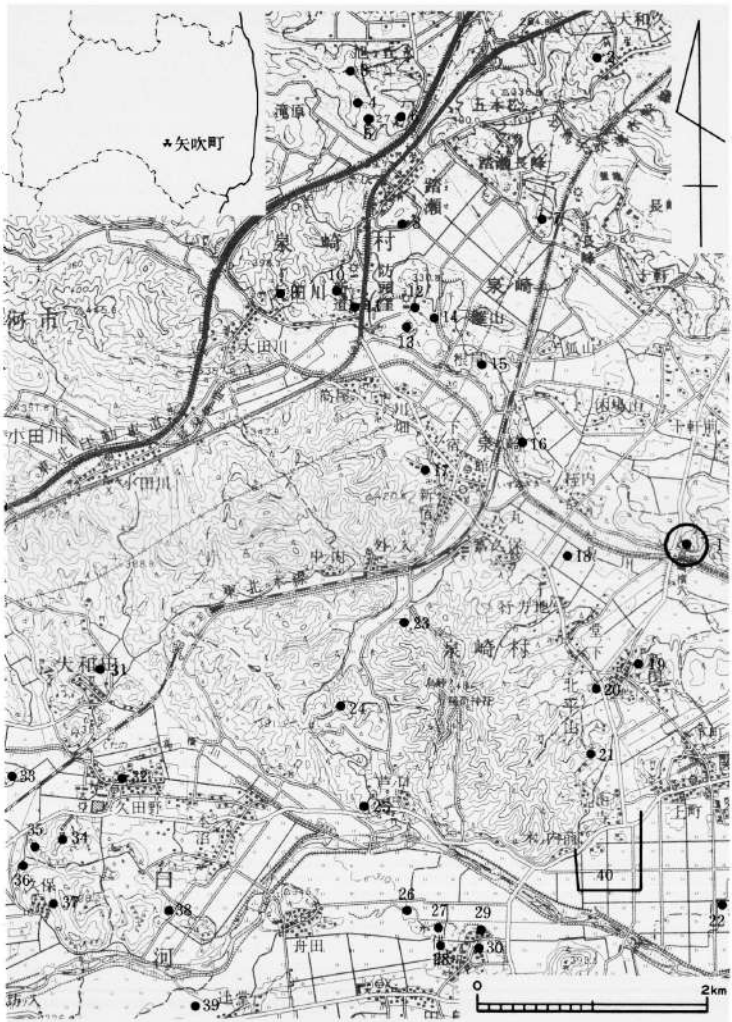
弥生時代　この時代は，稲作を中心とした農耕と金属器を用いた文化が日本列島に出現した時代である。まず西日本に波及し，縄文文化の伝統の強い東日本ではやや遅れて伝えられた。県南地方では，白河市天王山遺跡，須賀川市弥六内遺跡，石川町鳥内遺跡，泉崎村踏瀬大山遺跡などがある。

天王山遺跡は，丘陵の頂部に位置し，周囲の水田面とは比高差80mを測る特異な立地条件にある。遺跡からは正置された土器がまとまって出土したが，住居跡などは検出されなかった。土器のなかには，クリ・クルミなどとともにコメが納められていた。また碧玉製管玉なども出土し，新しい文化がこの地方に定着しつつあることを示している。また葬制をみると，鳥内遺跡では縄文時代から続く再葬墓が造られていたが，後期の弥六内遺跡では近畿地方に起源をもつ方形周溝墓が出現している。

しかし土器は縄文や工字文などで装飾され，縄文文化の伝統を強く残している。さらに金属器は県南地方の遺跡からはまったく出土せず，西日本の弥生文化とは内容的に大きく異なっている。

古墳時代　この時代の遺跡は，一般の集落跡のほかに墳丘を有する古墳や凝灰岩を掘り込んで造った横穴が出現する。遺跡は主として阿武隈川とその支流を臨む河岸段丘上に集中している。古墳時代前期の遺跡は，白河市中島遺跡，同道南遺跡などの集落跡や，須賀川市雷古墳群などの古墳がわずかばかり確認されているにすぎない。中期も同様であるが，祭祀遺跡として表郷村建鉾山遺跡が知られる。

後期になると集落跡は比較的多くなり，古墳もその数を増す。東村佐平林遺跡，天栄村舞台遺跡などがこの時期の代表的な集落跡である。いずれも河川を臨む河岸段丘の突端に立地している。住居跡は竪穴住居のみで構成され，平面形は方形を呈し主柱穴や貯蔵穴・カマドなどの内部施設が整然と配置されている。古墳は河川に沿った丘陵や台地の上に築かれるとともに，須賀川市早稲田古墳群のように自然堤防まで進出する。



第１図　七軒・泉崎横穴群とその周辺の古墳・横穴

表 1　七軒・泉崎横穴群とその周辺の古墳・横穴一覧表

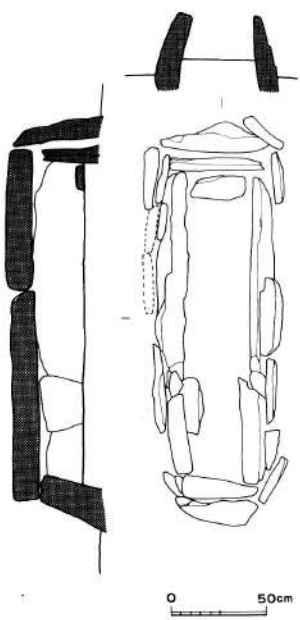
番号	遺跡名	所在地	登録番号
1	七軒・泉崎横穴群	西白河郡矢吹町松倉字七軒 西白河郡泉崎村泉崎字上陣場・白石山	
2	西後古墳	西白河郡矢吹町字西後	30 － 496
3	滝原山古墳	西白河郡泉崎村踏瀬字滝原山	30 － 390
4	観音山古墳群	西白河郡泉崎村踏瀬字観音山	30 － 392
5	行人山横穴	西白河郡泉崎村踏瀬字下滝山	30 － 396
6	観音山横穴群	西白河郡泉崎村踏瀬字観音山	30 － 397
7	踏瀬長峯古墳	西白河郡泉崎村踏瀬字長峯	30 － 407
8	踏瀬大山東古墳	西白河郡泉崎村踏瀬字大山	30 － 406
9	二ツ坂山古墳群	西白河郡泉崎村太田川字池ノ入	30 － 408
10	原山古墳	西白河郡泉崎村太田川字原山	30 － 411
11	蝦夷塚古墳群	西白河郡泉崎村原山字蝦夷塚	30 － 412
12	山ノ神山古墳群	西白河郡泉崎村泉崎字山ノ神山	30 － 413
13	山崎山古墳群	西白河郡泉崎村泉崎字山崎山	30 － 415
14	念仏塚古墳群	西白河郡泉崎村泉崎字坊主山・山ノ神山	30 － 414
15	鳥子山古墳	西白河郡泉崎村泉崎字鳥子山	38 － 12
16	日渡山古墳	西白河郡泉崎村泉崎字日渡山	38 － 19
17	小林山古墳群	西白河郡泉崎村泉崎字小林山	38 － 17
18	都橋四ツ塚古墳	西白河郡泉崎村泉崎字四ツ塚	38 － 24
19	東山古墳	西白河郡泉崎村北平山字新田東山	38 － 77
20	寺後古墳群	西白河郡泉崎村北平山字寺後	38 － 78
21	庚申山古墳	西白河郡泉崎村北平山字庚申山	38 － 82
22	石塚古墳	西白河郡泉崎村大字関和久字石塚	38 － 99
23	泉崎谷地久保古墳	西白河郡泉崎村泉崎字谷地久保	38 － 23
24	芦ノ口谷地久保古墳	白河市芦ノ口字谷地久保	38 － 44
25	的石山横穴群	白河市芦ノ口字的石山	38 － 45
26	下総塚古墳群	白河市舟田字中道	38 － 66
27	田島銀蔵古墳群	白河市田島字銀蔵	38 － 67
28	愛宕塚古墳	白河市借宿	38 － 68
29	舟田恋田横穴	白河市舟田字恋田	38 － 73
30	白旗古墳	白河市借宿字白旗	38 － 71
31	大和田石山古墳	白河市久田野字大和田	38 － 35
32	久田野古墳群	白河市久田野字久田野	38 － 42
33	狐っ子横穴群	白河市桜岡字狐っ子山	38 － 39
34	細入山横穴群	白河市久田野字細入山	38 － 48
35	阿弥陀前横穴	白河市大字久保字久保・阿弥陀前	38 － 46
36	久保横穴群	白河市大字久保字久保	38 － 47
37	久保前古墳	白河市大字久保字久保前	38 － 51
38	三年立横穴群	白河市久田野字三年立東	38 － 55
39	六本木古墳	白河市大字双石字六本木	38 － 61
40	関和久遺跡	西白河郡泉崎村大字関和久	

泉崎村原山１号墳からは，多様な器材埴輪や，さまざまの動作をした人物・動物埴輪が出土している。これらは６世紀の風俗や生活を知るうえで貴重な資料となっている。天栄村竜ケ塚古墳は，釈迦堂川の低位段丘面に立地する全長 35ｍの前方後円墳である。県南地方では大型の古墳である。この二つの古墳の内部主体は不明であるが，同時期の古墳では板石を用いた箱式石棺が本棺直葬とともに主流となる。須賀川市仏坊古墳群や２図に示した田島銀蔵古墳はその例である。

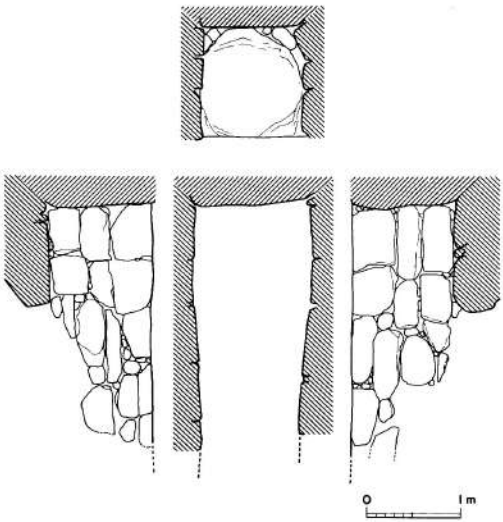
横穴式石室がこの地域に導入される時期は，６世紀末から７世期初頭と推定され，須賀川市大塚古墳や白河市下総塚古墳（３図）などがあげられる。石材は石英安山岩質熔結凝灰岩の割石である。これに続く横穴式石室を有する古墳は，矢吹町では鬼穴古墳や谷中古墳がある。また石川町悪戸古墳群もこれと前後する時期が想定される。悪戸古墳群では，石材に花崗岩の自然石が用いられていた。

他方，凝灰岩に掘られた横穴もこれとほぼ併行して出現し，白河市観音山横穴群や同郭内横穴群などの造営が開始される。横穴は横穴式石室を内部主体とする古墳と競合して，中通りの各地にいわゆる群集墳を成立させる。しかし横穴式石室を内部主体とする古墳が中通り全域に分布するのに対して，横穴は主に石英安山岩質熔結凝灰岩地帯と重なり，須賀川市より南の地域に大きく偏って分布している。

県南地方では７世紀後半になると横穴が盛行し，横穴式石室を内部主体とする古墳は少なくなる。たとえば，東村笊内古墳群では造営が開始される初期には横穴式石室を内部主体とする古墳と横穴が併行して造られていたが，やがて横穴だけが造られるようになる。しかしこの時期でも有力な首長の古墳には横穴式石室が造られたと考えられ，須賀川市蝦夷穴古墳や玉川



第２図　田島銀蔵古墳石棺実測図



第 3 図　下総塚古墳石室実測図

村宮の前古墳が単独で造られている。蝦夷穴古墳の横穴式石室は，全長 11m，高さ3mを測り，東北地方で最大の規模を誇る。石材には，石英安山岩質熔結凝灰岩の切石が用いられていた。

宮の前古墳の墳丘はそれほど大きくはないが，内部主体は石英安山岩質熔結凝灰岩をブロック状の切石とした石材を用いて組み合わせた整美な横穴式石室である。側壁は垂直に積み上げられ，玄室と羨道を区画する玄門が設けられている。形態的には栃木県壬生町車塚古墳と類似している。

律令時代　8世紀になると，県南地方でも白河市借宿廃寺，須賀川市上人壇廃寺などの寺院や，泉崎村関和久遺跡といった官衙が出現し，考古学的な時代のメルクマールは，古墳から寺院・官衙へ転換する。それと前後して集落の数も急激に増加し，古墳時代には分布しなかった台地の中央部や山間部の奥地までも，遺跡が確認されている。

関和久遺跡では，礎石を有する建物跡や掘立柱建物跡が整然と配置され，さらにそれを囲む大溝が検出されている。また焼籾や瓦なども出土していることから，古代白河郡の郡衙跡として考えられている。この遺跡の東方には白河軍団跡と推定されている上町遺跡があり，阿武隈川を隔てた南側には借宿廃寺が位置している。これらをあわせた官衙群は，地理的には東山道方面における陸奥国の入口にあたり，白河関とともに律令政府の重要な拠点のひとつと考えられる。

一方この時代の集落の内部では，新たに掘立柱建物が出現する。それにともなって従来の竪穴住居跡は規模が小さくなり各施設も退化・消失し，最終的にはカマドのみが取り付けられた構造となる。また出土した遺物をみると，鉄を中心とする金属器が増加し，土器でも須恵器の割合が増えるとともに，土師器にもロクロが用いられるようになる。その結果，古墳時代の集落とは大きく異なった様相を呈してくる。この現象は単に官衙が造られたのみではなく，律令体制が一般集落の次元にまで浸透したことを示していよう。

また古墳はこのような変化とは逆に急速に造られなくなる。横穴式石室を内部主体とする古墳では，関和久遺跡の西北に位置する芦ノ口谷地久保古墳がその最終末の古墳であろう。この古墳は急峻な谷の中程に立地し，従来の古墳とは立地条件が大きく異なっている。主体部は石英安山岩質熔結凝灰岩を用いたブロック状の切石を組み合わせた構造である。規模は宮の前古墳と較べると著しく小さくなり，もはや屍体を伸展させた状態で葬ることはできない大きさである。同様な現象は横穴にもみられ，それまでの整った形態から単なる屍体を納めるだけの穴となり，やがて消滅する。副葬品も７世紀代の横穴では刀や馬具などが比較的多量に埋納されていたが，８世紀代の横穴ではほとんどみられなくなる。この複次葬から単次葬へ移行しそれとともに副葬品が乏しくなるという現象は，近畿地方では律令体制が成立する直前の７世紀前半から中頃にかけて認められる過程であり，律令体制と古墳の終末には密接な関係があることを示している。

律令体制を象徴する関和久遺跡は，発掘調査によって11世紀まで存在していたことが明らかにされているが，それ以降の状況は不明である。また県南地方の各地に見られた集落も，ほぼこの頃を前後する時期に廃絶している。この後は，中世に造られた館跡や墓地跡などが主な遺跡として確認されているが，集落跡などについては考古学的な調査は全く及んでいない。

以上，発掘調査の行われた遺跡を中心として，県南地方の歴史的環境について述べた。この結果，各時代を通して遺跡はおもに阿武隈川とその支流にそって分布し，特別な場合を除いてこの立地条件を離れることはなかった。その中でも古墳時代後期から律令時代にかけての主要な遺跡は，釈迦堂川と阿武隈川が合流する須賀川市付近と，釈迦堂川の支流隈戸川と阿武隈川が最も接近した関和久遺跡の周辺に集中している。この地区は，県南地方のなかでも比較的大きな沖積平野が発達した豊かな地域である。

第2章　七軒横穴群の調査経過

1節　調査に至る経過と調査組織

調査に至る経過

1980年8月，矢吹町七軒の土取り場から，横穴らしい遺構が出土したという連絡が矢吹町教育委員会にもたらされた。そこで町当局は，文化財担当の星圭之助を現地に派遣してその状況を把握し，横穴であることを確認した。また福島県教育委員会にその旨を報告し，指導と指示を仰ぐとともに，とりあえず横穴の位置を明示して埋め戻し，後の調査に備える緊急処置を行った。

今回発見された横穴は，壁画横穴として名高い泉崎横穴から東方へ80 mの地点に位置することから，関係各機関で検討を重ねた。その結果，考古学的な調査を実施するという結論に達した。またこの横穴群を小字名から七軒横穴群と名付けた。

調査組織

七軒横穴群の調査にさいしては，以下の調査組織を編成した。

調査主体　矢吹町教育委員会

調査担当者　目黒　吉明（福島県文化センター遺跡調査課　課長）

調　査　員　高橋　信一（福島県文化センター遺跡調査課　文化財主事）

福島　雅儀（福島県文化センター遺跡調査課　文化財主事）

事　務　局　矢吹町教育委員会

教育長　酒井　正敏（昭和57年9月30日退職）

教育次長　大沼　重一（昭和57年10月1日より教育長職務代理者）

社会教育係係長　星　圭之助（昭和57年3月31日まで）

社会教育係係長　小板橋孝助（昭和57年4月1日から）

主査兼社教主事　長岐　敬一（七軒横穴発掘事務担当）

主査　須藤　栄美

2節　発掘調査と報告書の作成

発掘調査

七軒横穴群の発掘調査は，昭和56年3月13日から同年3月27日にかけて行った。しかし各調査員は公務のため平日に作業は行えず，調査は土曜日と休日にかぎられた。

3月13日　発掘調査を開始する。横穴の位置を示す杭を中心に発掘区を設定し，重機を導入して盛土を取り除く。現地表下を約1m掘り下げ，以下は人力で作業を進める。午後になり横穴の遺構を確認する。前庭部と天井部は完全に失われ，玄室の床面も大きく損なわれていた。1号横穴と名付ける。この横穴の西方2mの地点に新たな横穴を確認した。2号横穴と名付ける。

また土取り工事を行った中島村近藤工務店へ行き，横穴から出土した遺物をもらいうけた。鉄刀4振，刀子2口，須恵器1個，その他若干である。

3月14日　1号・2号横穴の前庭部にあたる部分の盛土を取り除く。1号横穴の玄室を掘り下げる。2号横穴の玄室内部は，乱掘をうけていなかった。付近のベンチマークから海抜高を移動する。

3月21日　1号横穴を完掘する。遺物は出土しなかった。2号横穴を完掘する。鉄鏃・刀子などが出土した。1号横穴の実測と写真撮影を行う。

3月22日　2号横穴の実測と写真撮影を行う。横穴の位置を平板上に記録する。遺物と図面を文化センターに搬入する。

3月27日　1号横穴と2号横穴を埋め戻す。

昭和57年11月14日，21日七軒横穴から泉崎4号横穴にかけての地形測量を行う。

報告書の作成

報告書の作成作業は，福島県文化センターにおいて調査員福島が中心となって進め，伊藤登茂がこれを補助した。また一部に児玉真知子，志賀恵，菅野美津枝，菊地秀子，加藤謙の助力をえた。金属器の処理にさいしては，財団法人京都市埋蔵文化財研究所と同研究所研究員岡田文男氏のお世話になった。

出土した遺物は，すべて矢吹町教育委員会が保管している。

第3章　七軒横穴群の遺構と遺物

1節　横穴群の位置と地形

七軒横穴群は，矢吹ケ原の西南端に位置している。背後には台地と丘陵が広がっているが，前面には泉川とその河谷平野が横たわっている。この付近の河谷平野は，右岸では丘陵から続くなだらかな斜面を形成している。左岸では丘陵部との間に明確な河岸段丘が発達し，また氾濫原も狭い。七軒横穴群は左岸の段丘崖に造られている。

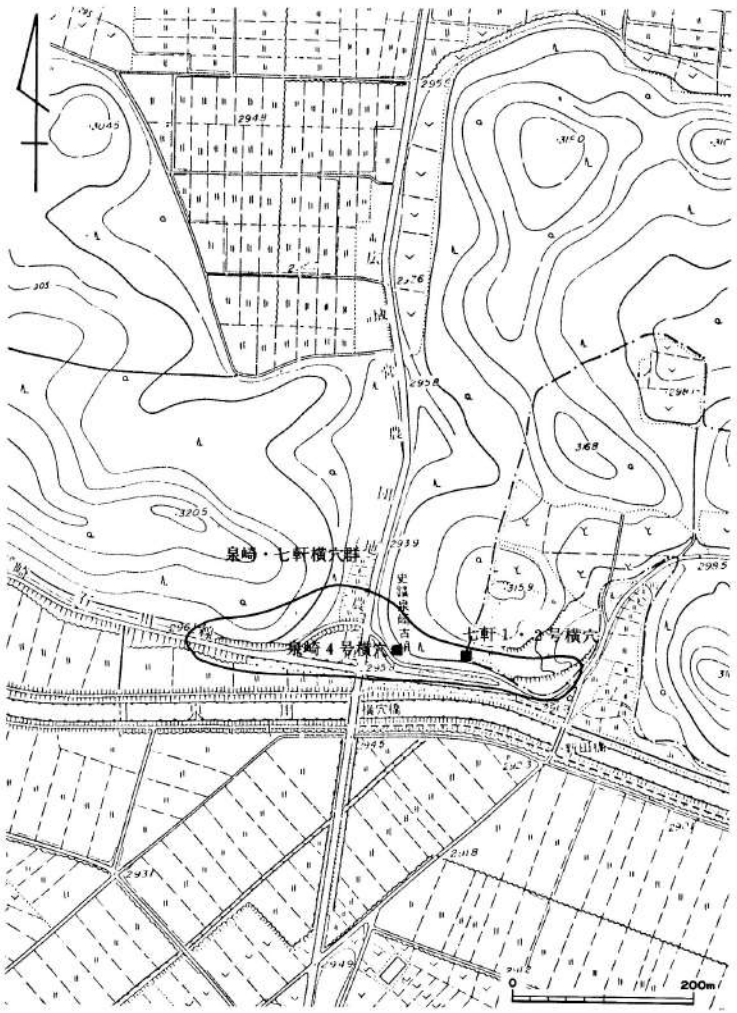
今回の調査では2基の横穴が確認されたが，その西方約80mの地点に，泉崎壁画横穴（4号横穴）が位置している。さらにその間にも少なくとも3基の横穴の存在が明らかにされており，また七軒横穴の東方にも横穴があったらしい。これらの横穴は，地形的に石英安山岩質熔結凝灰岩（DI層）を基盤とする同一丘陵に造られている。したがって考古学的にはひとつの横穴群を構成すると考えられる。

七軒横穴群と泉崎横穴群をあわせた横穴群は，泉崎壁画横穴西側の小規模な開析谷によって，東西2つの小支群に分割される。小字名から，西側を上陣場支群，東側を白石山支群と呼ぶ。白石山・七軒支群では，海抜308m前後までDI層が堆積し，さらにその上を約10mにわたって白河ローム層が覆っている。地形的には，泉崎壁画横穴が立地する地点を西端として，東方へ伸びるなだらかな尾根状の丘陵である。しかし矢吹町側では土取りと畑地造成工事により大きく損なわれ，丘陵の東半部は削り取られている。

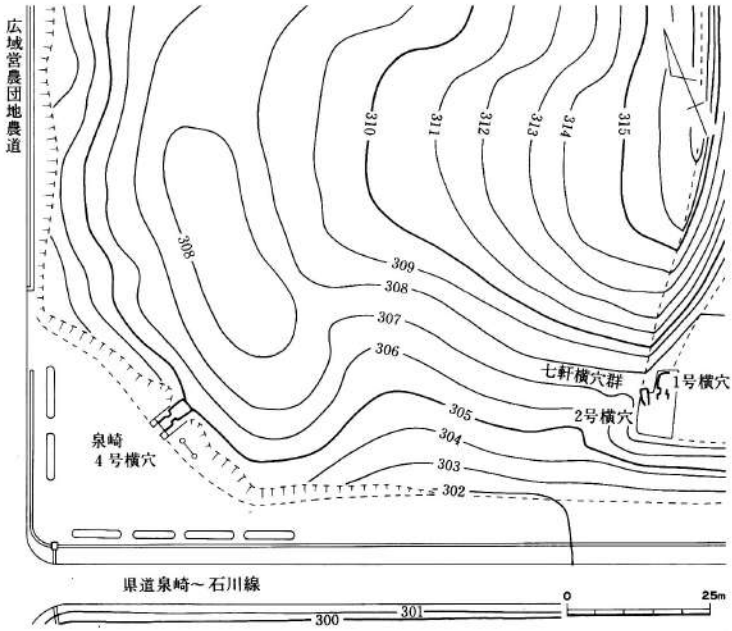
中央の開析谷は，泉川に開く地点で最大幅100mを測る。南から北へ向かって丘陵を分断し，矢吹ケ原へ続いている。現状では小さな水田を重ねた谷地水田となっている。谷の斜面は東側がやや急傾斜であるが，西側は比較的緩い傾斜である。

上陣場側の丘陵では，横穴が立地する部分のすぐ上が海抜305m前後の平坦面を形成している。この部分はそのまま矢吹ケ原の台地へ続いている。したがってDI層を覆う白河ローム層は5m前後である。この地区では昭和8年に2基の横穴が発見された。

今回の調査を含めて，泉崎・七軒横穴群からは9基の横穴が確認されている。このうち位置の明らかな横穴は，泉崎壁画横穴とその北側にある泉崎3号横穴，七軒1号・2号横



第４図　七軒・泉崎横穴群の周辺地形図



第 5 図　七軒横穴群と泉崎壁画横穴の位置図

穴のみである。上陣場支群に属する泉崎1号・2号横穴の位置は不明であるが，図版11の写真から判断すると，泉崎壁画横穴とは200m以上離れていたと推定される。したがって泉崎・七軒横穴群の範囲は，泉川の段丘崖にそって東西400m以上に及ぶと推定される。

昭和8年，泉崎壁画横穴を発見する契機となった県道泉崎～石川線は，その後数回の拡張工事を経て，現在では幅6mのアスファルト道路となっている。さらに位置も旧道よりは南へ移動している。また中央の開析谷には広域営農団地農道が敷設され，泉崎壁画横穴の前方で県道と交差している。これらの工事によって遺跡の周辺は，盛土や削平が行われ，横穴が発見された当時とは様子が大きく変わってしまった。しかしその後遺跡の発掘調査は行われなかった。

2節　1　号　横　穴

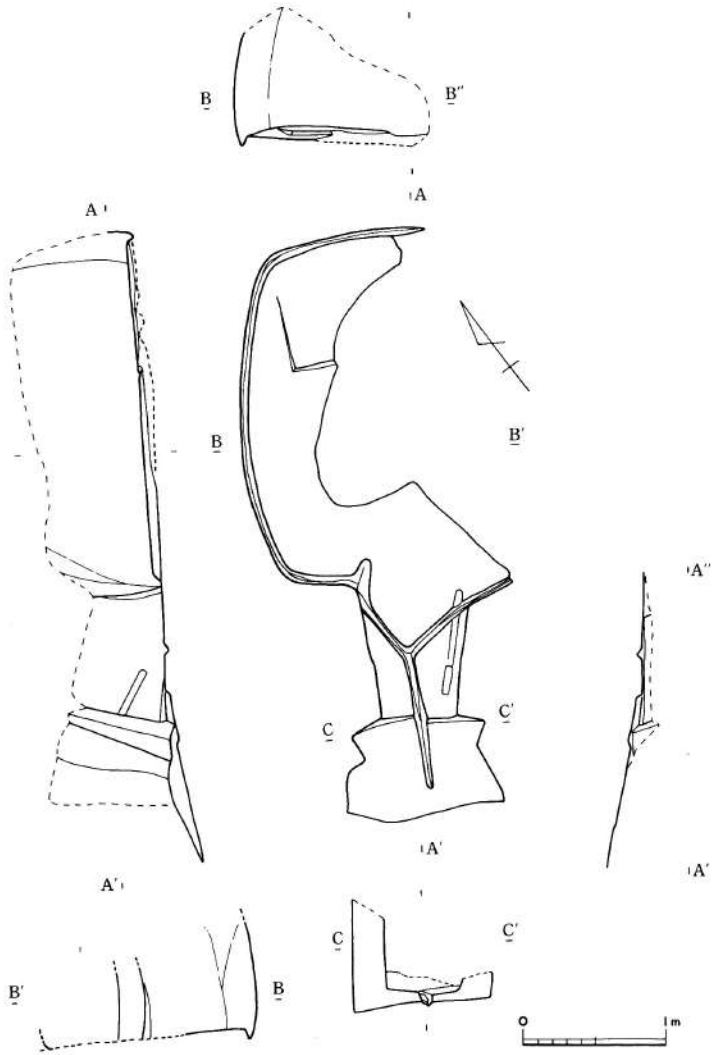
遺構について（挿図６，図版３・４・５）

昭和55年７月，土取り工事中に発見され，矢吹町教育委員会の星圭之助により確認された横穴である。発掘調査はまずこの横穴を検出する作業から始めた。発見当時は玄室が完存していたが，工事の進行にともなって破壊され，遺構を検出した時点では大きく損なわれていた。

現地表下1mにおいて，玄室床面の一部を確認した。覆土は，石英安山岩質熔結凝灰岩（DI層）の砕石と白河ローム層がまざりあった盛土である。横穴は西半部を中心とした玄室と玄門が部分的に残るのみで，天井部と東半部は完全に失われていた。形態は玄室の中央に玄門を設け前庭部に続いていたと推定される。前庭部はすでに大半が失われ，重機による爪痕が残っていた。横穴の主軸線は玄門の中点と奥壁の最深部を結ぶ線とした。このライン上で奥壁から前庭部排水溝の最先端までの計測値は3.94mである。横穴はN－35°－Eに向けて西南方向に開口していた。

玄室の規模を主軸線上で測ると，長さ2.55mとなる。また主軸線を基軸として折り返すと，最大幅は2.40mとなる。玄室の平面形は隅丸方形と推定される。床面は奥壁から入口に向かってやや傾き，18cmの比高差を測った。また床面に接して屍床が設けられ，その西半部は残っていた。床面の一部を削り残して台状に加工し，横穴の主軸と直交していた。屍床の西端部で床面との比高差は5cmであるが，奥壁側はそのまま床面へ続いている。床と壁の境には，排水溝が設けられていた。断面形は「V」字状を呈し幅５～８cmを測る。床面からの深さは４～８cmであった。壁面は玄室の北西隅が最もよく残り，残存高は85cmを測った。各壁はやや内弯して立ち上がっていた。奥壁と側壁は明確に区分されず，変換線は認められなかった。玄室の床面と壁面は丁寧に整形され，工具痕はほとんど残っていなかった。

玄門は，入口幅52cm，奥壁側の幅77cmを測り，奥行は西側で1.05m，東側で78cmである。平面形は，入口側がやや狭い台形状を呈している。床面は平らに整形されていたが，東よりに幅７cm前後の工具痕が一条残っていた。また玄室から続く排水溝が，中央部の西



第 6 図　七軒 1 号横穴実測図

寄りで「Y」字状に合流し，前庭部に伸びていた。排水溝の上幅は８㎝前後，下幅は2～４㎝，深さは４㎝を測る。断面形は「Ｖ」字状を呈していた。

側壁は西側がもっともよく残る。残存高は61㎝を測り，垂直に立ち上がっていた。入口側の中程に幅６㎝の工具痕が一条残っていた。東壁はほぼ完全に破壊され，痕跡が残っているにすぎなかった。玄門の入口には，高さ６㎝程度の小さな段が造られ，前庭部へ続いていた。また側面には幅20㎝の縁取りが施され，正面からみると額縁状を呈していた。

遺物について（挿図７・８・９，図版７・８・９）

１号横穴からは，今回の発掘調査では遺物は出土しなかった。しかし発見時に中島村近藤工務店によって以下の遺物が採取された。

鉄刀　４振　　刀子　２口　　須恵器　１個　　土器片　１個

１号Ａ刀　刀身の中央部が大きく損なわれ，棟方へ曲げられている。刀身は平棟平造りの直刀である。切先の刃は，やや内弯している。区は小さく直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方は尻に向かってやや内側に幅を狭めて延びている。茎尻は刃方から棟方へ直線的にはね上がり，先を丸く納めて終る。茎尻の近くには目釘孔があり，佩表から長さ1.８㎝の目釘が打ち込まれている。茎の平には有機質の繊維が薄く巻き付けられ，その上に把木の残痕が付着している。

鍔は金銅製のｂ型(付章２参照)である。表面のメッキは擦り減って縦方向に地金が部分的にみえる。断面形はやや偏平な楕円形を呈している。鐔は金銅製の喰み出し鐔である。平面形は佩表へやや偏った楕円形を呈し，中心孔は鍔と同じく楕円形を呈している。

鞘口金具は，鍔の一部を呑み込んで残片が付着している。形状は不明であるが，材質は金銅製である。鍔に接して鞘木が付着していることから，鞘口金具の部分は，鍔室を形成していたと推定される。８図の金具はこの刀の把頭飾りの一部と推定される。金銅製であるが，厚さは１㎜弱と極めて薄く，銅板を打ち延ばして成形したものであろう。部分的に残る形状から，覆輪状の圭頭飾りの一種と考えられる。

１号Ｂ刀　刀身の中央部で二本に折れている。佩表に凝灰岩が付着していることから，佩表を下にして出土したと推定される。刀身は平棟切刃造りの直刀である。明確な鎬線はみられないが，平に厚い肉が付いている。切先は，刃先のフクラ枯れて，カマス切先に近い形状である。区は直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方はか

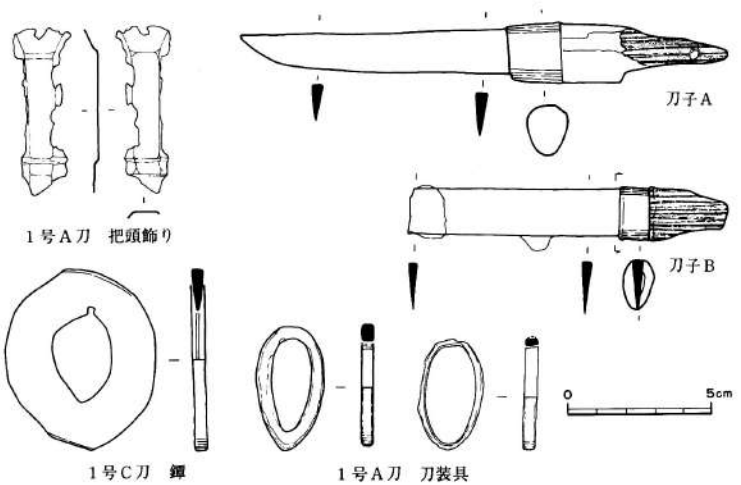
第7図　七軒横穴群出土　鉄刀実測図

すかに絞られている。茎の断面形は長方形を呈し，茎尻は角尻である。茎尻から2.4㎝と11.3㎝のところで，平の中央に目釘孔が穿たれている。尻に近い方の目釘は折れているが，区に近い方は目釘が佩裏から打ち込まれている。

鍔は鉄製鍛造のａ型である。断面形は楕円形を呈し，長径3.4㎝，短径2.8㎝を測る。長さは1.9㎝，厚さは３㎜である。鐔は鉄製鍛造の板鐔である。刃方が小さく突き出した楕円形を呈し，長径5.8㎝，短径5.1㎝である。断面形は長方形を呈し，最も厚い部分で５㎜を測る。中心孔は鍔と相似形に造られ，それよりやや小さい。

１号Ｃ刀　刀身の切先側と茎尻が失われている。刀身は平棟平造りの直刀である。区は直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方は区近くでやや内傾したのち，棟方と平行して延びている。断面形は，棟方がやや広い長台形を呈している。目釘孔は，区から7.1㎝と10㎝のところで，平の中心に穿たれている。区に近い方は，目釘が佩裏から打ち込まれている。

鍔は鉄製鍛造のｂ型である。錆びて表面は欠損しているが，内側の形状は楕円形を呈し



第８図　七軒１号横穴出土　刀装具と刀子実測図

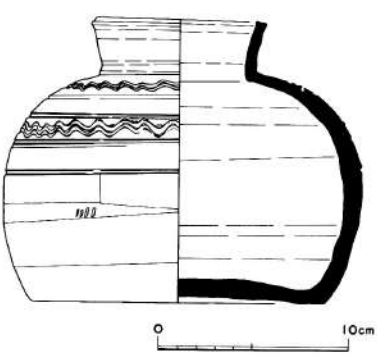
ている。長径3.1㎝，短径2.1㎝，厚さ4㎜である。鐔は鉄製鍛造の楕円形板鐔であるが，鎺と同様に形状は著しく損なわれている。計測値は長径 6.2㎝，短径5.2㎝である。断面形は，中心孔を頂点とする二等辺三角形を呈している。中心孔は縁が全体に欠けているがほぼ楕円形である。

1号D刀　切先部分が損なわれている以外は，ほぼ完存している。刀身は平棟平造りの直刀である。棟区は小さく直に落されているが，刃区は不明確である。棟方は，鎺受けの部分ではまっすぐに延びているが，それより尻側ではやや内弯している。刃方は，刃から鎺受けにかけて弯曲して続き，これより尻側にかけてはまっすぐに延びている。茎尻は尻上がりに丸く終る。この部分に目釘孔が穿たれている。鎺は鉄製鍛造のb型である。

刀子A　全長17.2㎝を測り完存する。刀身は平棟平造り，切先はフクラ枯れである。茎には把木の約半分が原形を保って残っているが，把木の構造は不明である。把縁には，円筒状の把鎺が装されている。把鎺の断面形は棟方がやや平らな倒卵形を呈している。茎尻近くには目釘孔が認められるが，目釘の有無は不明である。

刀子B　切先は失われ，現存長11.2㎝を測る。刀身は平棟平造りである。茎の長さは3.2㎝と刀身に較べてやや短い。把鎺は断面形が楕円形を呈する円筒状である。把鎺の縁は丸く仕上げられている。把木は二枚合わせと推定される。

須恵器　器高15㎝，口径9.4㎝，底径15.4㎝を測る完形の短頸壺である。底部は中央部がやや上がっているが，ほぼ平らである。体部はやや内弯して立ち上がり，上半部は内弯してそのまま頸部に続く。最大径は体部の中程で19.2㎝を測る。頸部から口縁部へは少し外傾して開き，口縁は中央が心持ち丸く凹んだ平縁である。体部上半から頸部にかけて，4筋の凹線が巡り，頸部直下と肩部に波状文が施されている。



第9図　七軒1号横穴出土　須恵器実測図

成形はタタキ技法によると推定さ

れ，体部外面に叩き板の痕跡をわずかに留めている。底部外面から体部下半にかけては回転ヘラケズリが施され，とくに底部外面は著しい。体部上半から口縁部にかけてと内面には，回転ナデが施されている。

胎土は砂粒を多く含んでいる。色調は黒灰色を呈している。焼成は良好であり，部分的には釉の吹き出しが認められる。また肩部には自然釉が厚くかかっている。

3節　2　号　横　穴

遺構について（挿図10，図版3・6）

1号横穴の前庭部を確認するために，調査区を拡張した結果新たに検出した。1号横穴の西方約2mの地点に位置している。

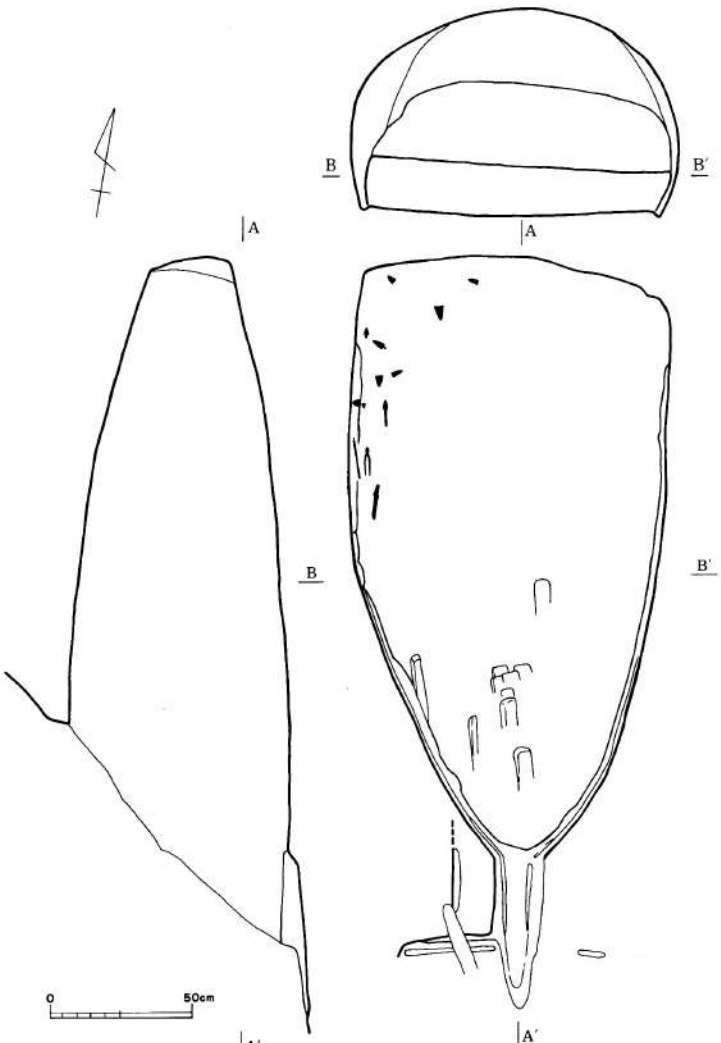
横穴の入口部分は重機により破壊されその形状は不明であった。しかし玄室には黒褐色シルトが天井部近くまで堆積し，内部に撹乱は認められなかった。現状では残存長2.63m，残存高76cmを測る。最大幅は玄室の最深部で1mである。横穴の主軸方位は，N－10°－Eに向けてほぼ南に開口していた。

玄室の平面形は，奥壁側を底部として入口側に内弯してすぼむビール瓶状を呈している。床面は奥壁から入口に向かって傾斜しており，その比高差は20cmを測る。また部分的に幅6cm前後の工具痕が残り，奥壁側から入口に向かって押し引いた状況を示している。床面と東西の側壁の境には，幅4cm前後，深さ2～3cmの排水溝が設けられ，玄門近くで「Y」字状に合流したのち前庭部に伸びていた。この排水溝はかなり雑に仕上げられ，とくに西側では部分的に途切れたところもみられた。

玄室の断面形はカマボコ形を呈し，天井部と側壁の明確な区分はできなかった。奥壁は高さ30cm程度とかなり低く，形もあまり整ったものとは言い難い。側壁・床面・天井部の境には，工具痕が集中して凹凸が著しく，雑な造りであった。

前庭部床面の形状は不明であるが，主軸と直交する溝が部分的に残っていた。したがって入口には縁取り加工のような造作が施されていたと推定される。

この横穴からは，鉄鏃14本，刀子1口，鑷子状鉄製品1本が出土している。玄室の北西部隅を中心にして，床面やその直上から散乱した状況で出土した。この部分からは主とし



第 10 図　七軒 2 号横穴実測図

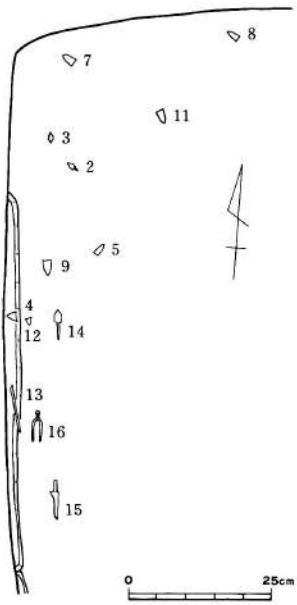
て鉄鏃が出土したが，先端方向は一定しなかった。奥壁より65～75㎝の地点で，刀子と鏨子状鉄製品が床面から出土した。先端方向は両方とも入口方向を向いていた。またこの近くからノカズキ付き鉄鏃が２本出土した。先端方向は２本とも奥壁方向を向いていた。

遺物について（挿図11・12，図版10）

２号横穴から出土した遺物は，すべて鍛造の鉄製品である。

刀　　子　全長13.6㎝，刀身の長さ8.3㎝，茎の長さ5.3㎝を測る。刀身は平棟平造り，切先はフクラ枯れである。棟区は直に落とされていたが，刃区は刃部から鋭く内弯して突出する。茎の棟方はまっすぐ伸び，刃方は内弯し尻に向かって平の幅を減じる。断面形は長方形を呈している。また茎の平には部分的に木質が付着している。

鏨子状鉄製品　全長10.9㎝，先幅５㎜，厚さ２㎜を測る。棒状の素材を用い，中央部を除いた両側を平らに打ち延ばし，中央部は折り曲げてリング状の小さなつまみとしている。

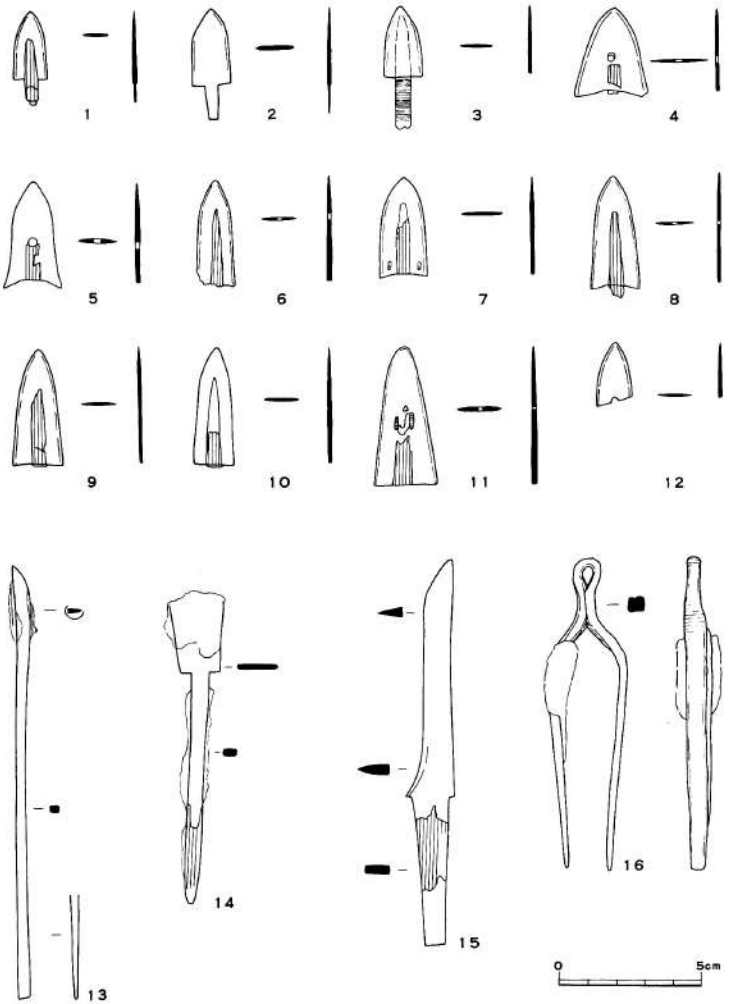


第 11 図　七軒２号横穴遺物出土状況実測図

この鉄製品は，北海道から九州まで全国各地の古墳や集落跡から出土しているが，明確な用途は不明である。これとともなって出土した遺物は，他の例でも鉄鏃が多い。ここでは全体の形状と先端部の特徴から，一応ピンセットと報告しておく。

鉄　　鏃　鏃を構成する各部分のうち，先端部分を根，矢竹の中に刺し入れる部分を茎，ノグチから根までの露出部分をノカズキと呼ぶ。ノカズキと茎の有無により，無茎式，有茎式，ノカズキ付き式に分類(後藤：1939)される。それに従うと，無茎鏃８本，有茎鏃３本，ノカズキ付き鏃２本，不明１本である。

無茎鏃は，すべて横断面が凸レンズ状を呈するいわゆる平根である。平面形態は平らな基部から先端に向かう斜辺がややふくらみ二等辺三角形を呈するものと，基部の中央部が



第 12 図　七軒 2 号横穴出土　鉄製品実測図

やや内側に凹み，両端が鋭く突出するものがある。また平の中央に小さな円形の孔が穿たれ，この孔に向かって基部から伸びる竹様の有機物が付着している。この状況から２号横穴から出土した無茎鏃も，矢竹のノグチを鋭く尖らせて根を挟み，さらに平の孔に糸を通して鏃を結びつけ，基部を固定して着装したと推定される。また12図の７・11には，蝿の蛹と思われる有機物が付着している。

有茎鏃も横断面の形は，凸レンズ状を呈する平根である。根の形状は，平らな基部から先端に向かう斜辺が中程まで平行して伸び，五角形を呈している。ノグチは，無茎鏃と同じく尖らせて根を挟んでいた。基部近くの矢竹には細かな糸を巻いて固定している。

ノカズキ付き鏃には，棘状の突起は認められない。12図13の根は，切刃造りである。根，茎，ノカズキに明確な変換点はない。根の部分に木質が付着している。12図14の根は，錆のため大きく損なわれているが，先端が尖っていたらしく地金が中央部に残っている。茎の先端から3.4㎝にわたって，タケ様の木質が付着している。

4節　ま　と　め

遺構について

今回までの調査によって，泉崎・七軒横穴群からは９基の横穴を確認した。このうち形状の不明な２基を除いた７基は，その構造と形態からＡ型とＢ型に分けることができた。Ａ型は，玄室＋玄門＋前庭部から構成される。3基を数える。Ｂ型は，玄室＋前庭部から構成される横穴である。４基確認されている。

Ａ型横穴の玄室は，平面形が主軸方向にやや長い隅丸方形を呈し，立面形はカマボコ形や家形を呈している。規模は長さ２～３ｍ，幅1.5～２ｍ，高さ１ｍ強である。内部施設には，排水用の溝が設けられ，また奥壁に平行して屍床が設けられたものがある。

玄門は，左右の側壁から突出して柱状を呈し，天井部は丸く弯曲している。全体的な形状はアーチ状である。また入口側には縁取りを施して整えている。前庭部はほとんどが破壊されて不明であるが，写真からみると平面形は「コ」字状を呈し，玄門に向かってしだいに高くなる側壁を有したらしい。閉塞方法は，泉崎４号横穴が石英安山岩質熔結凝灰岩の板石を用いて玄門を閉じていた以外は不明である。

B型横穴の玄室は，長さ２ｍ，幅・高さともに１ｍ内外とＡ型に較べて小さくなる。ほぼ大人一人分を伸展させた状態で納める規模である。形状も床面と側壁・奥壁の区別がそれほど明確ではなくなる。内部施設も泉崎３号横穴・七軒２号横穴では，Ａ型と同じく排水溝が壁にそって巡っていたが，他の２基では省略されていた。しかし玄室の入口には，縁取りを施して玄門様に似せていた。前庭部は壊されていたが，立地条件からＡ型とほぼ同じ形態であったと推定される。

泉崎・七軒横穴群からは検出されていないが，県南地方では長い羨道を有する横穴も確認されている。実測図の発表されたものでは，泉崎観音山５号横穴・東村笊内古墳群16号横穴などがそれである。しかし宮城県に多く分布する長大な羨道を有し，造り付け石棺の設けられた横穴はほとんどみられない。

横穴の構造と形態については，地域により，各横穴群により，さらに立地条件によりかなりの相異がみられる。県南地方の横穴では，横穴の盛行期を通して羨道の設けられない横穴が主流となる。この中で初期の横穴と考えられるもの(郭内７号横穴など)は，構造的，形態的に整ったＡ型が多い。規模も複数の屍体を葬るに十分な空間を有している。しかし新しくなるにつれて構造・形態ともに退化し，ついには一体分の屍体を納める空間しかないＢ型となる。泉崎・七軒横穴群からは各横穴の時期を比定する十分な資料は得られなかったが，笊内古墳群(玉川：1979)などの例から，Ａ型が古くＢ型が新しいと推定される。

遺物について

泉崎・七軒横穴群から出土した遺物は，武器・装身具・土器である。この中で武器が主流を占め，装身具・土器は比較的少ない。出土状況の明らかな横穴は，泉崎４号横穴と七軒２号横穴である。おもに鉄鏃・刀子・鉄刀などの武器とその付属品である。

武器類のうち鉄刀は，６号横穴から出土したと伝えられる刀がⅠ群刀(付章２)と推定される以外は，すべてⅢ群刀である。

鉄鏃は，七軒２号横穴から出土している。14本のうち無茎鏃が８本と多数を占め，ノカズキ付き鏃は２本と少数である。出土状況は，散乱していたが玄室の北西隅に集中していたことから，一組のセットを示していると考えられる。県南地方の他の横穴では，白河市郭内６号横穴・泉崎村梅田９号横穴・長沼町才含地横穴などからノカズキ付き鏃が多数を占めて出土するのとは，異なった組み合わせである。

他方古墳時代から律令時代の集落跡からは多くの鉄鏃が出土しているが，ノカズキ付き鏃の占める割合は少ない。

出土した土器類のうち，土師器の甕は県南地方の他の横穴群ではほとんど出土しない器種である。時期は，泉崎１号横穴から出土した17図１が上悪戸遺跡甕Ｃ，泉崎２号横穴から出土した17図２が同じく甕Ａ－４に相当する。

泉崎２号横穴から出土した須恵器の高杯は，形態的，技法的にも極めて整った土器である。田辺編年(田辺：1966)でいうTK 43型式を中心とする年代が想定される。現在県南地方の横穴から出土した土器の中では，もっとも古い須恵器のひとつである。

結　　語

泉崎・七軒横穴群は，泉川に沿った丘陵の南斜面に東西400ｍにわたって造られている。その造営開始時期は，出土した遺物から６世紀末葉にさかのぼり，県南地方の横穴群のなかでは古い時期に属している。終末については，Ｂ型横穴のなかでも退化した横穴が含まれることから，他の横穴群と同じく８世紀の中葉までは造営が続いていたと推定される。

付章1　泉崎横穴群とその出土遺物

1節　泉崎横穴群の発見と発掘経過
2節　泉崎横穴群の遺構について
3節　泉崎横穴群から出土した遺物について
4節　ま　と　め

泉崎横穴群に関する資料は，昭和9年に上田三平により，考古学雑誌24巻6号に発表された。この中で上田は壁画のある4号横穴を中心に相当詳しく報告を行い，奥壁の実測図も発表している。そののち昭和11年に岩越二郎により，岩磐史談1巻7号に付近の遺跡とともに報告がなされ，奥壁の他に側壁や天井部の壁画の図が発表された。また戦後になって，福島県史6巻にも同様な図面と写真が掲載されている。

しかしこれらの報告には，同時に発見された他の横穴についてはほとんど発表されておらず，泉崎横穴群を群として捉える場合に不都合を生じている。そこで今回の報告とあわせて，現在確認できる資料から他の横穴や実測図も含めて，付章1として報告する。

泉崎横穴群に関する資料は，主に福島県文化センター歴史資料館に保管されている岩越二郎文書に拠った。また遺物は，東京国立博物館と泉崎村中央公民館に保管されているものを実測した。

1節　泉崎横穴群の発見と発掘経過

大正3年

西白河郡川崎村大字泉崎字白石山にて，横穴が2基(5号・6号)が発見された。このうちの1基から鉄刀が出土した。

昭和8年

12月14日　川崎村大字泉崎字上陣場から，1号横穴・2号横穴が発見され，同村三

村文吾が発掘を行う。鉄刀・土師器・須恵器が出土する。

12月19日　字白石山から，3号横穴・4号横穴が発見される。三村文吾により発掘される。4号横穴より，鉄刀・刀子・鉄環出土。また4号横穴には壁画が描かれていた。

12月21日　元白河高等女学校教諭佐久間留男と時事新報記者が取材に行く。その後まもなく全国版に発表される。

12月22日　白河中学校教諭岩越二郎が見学に行く。

12月24日　字白石山で7号横穴が発見され，発掘される。

12月25日　道路下にあるために7号横穴を埋め戻す。実測図は作成されない。

12月26日　福島県史跡天然物委員堀江繁太郎と白河高等女学校教諭高橋五郎と佐久間留男・岩越二郎が調査を行う。

このころまでに川崎小学校校長根本儀一・川崎村村長赤沼龍二により工事中止と変更申請が土木監督所に提出される。また福島県会議員中目武功は，横穴保存のために上京し文部省に調査を依頼する。

12月27・28日　文部省嘱託上田三平が調査を行う。須釜善勝・佐久間忠助・岩越二郎・堀江繁太郎が，壁画の模写と横穴の実測を行う。

12月30日　東北大学文学部嘱託伊東信雄が調査に加わる。1号横穴・2号横穴の実測を行う。

昭和9年

1月5・6日　堀江繁太郎・岩越二郎・福島中学校教諭塚越弘平が，4号横穴の実測を行う。

1月8日　6号横穴の南へ20尺の地点で須恵器窯跡を発見し調査を行う。この須恵器窯跡はTK23型式に前後する時期が想定される。福島県内では現在確認されている須恵器窯跡の中でもっとも古い遺跡である。

1月21日　岩越二郎が4号横穴の壁画の模写を行う。

1月24日　岩越二郎・須釜善勝が道路下の横穴を発掘し，実測を行う。

2月15日　3号横穴の北方から横穴を利用したような須恵器窯跡らしき遺構を，穂積喜惣衛門が発見する。岩越二郎が調査を行う。

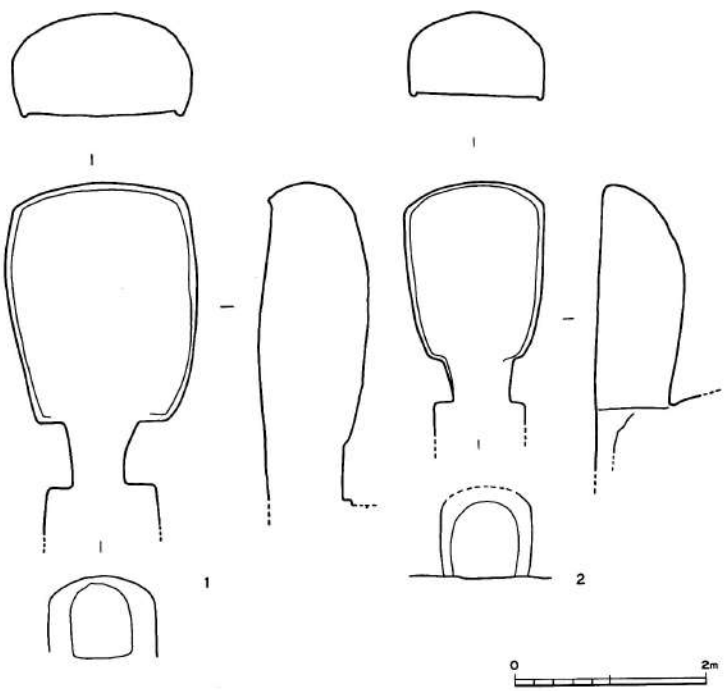
2月28日　国の史跡に指定される。この時期は同年5月という記録もある。

2節　泉崎横穴群の遺構について

ここに掲載した実測図は，4号横穴の実測図を除いて，岩越二郎文書と福島県文化課の資料から作成した。現在では埋没して，4号横穴を除いて位置は確認できない。

泉崎1号横穴（挿図13）

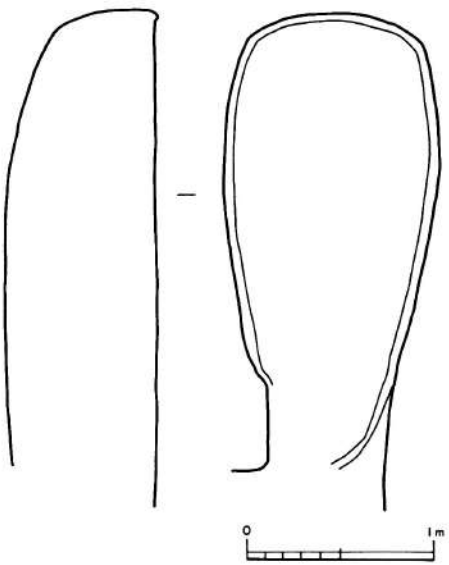
昭和8年12月14日，上陣場地区から発見された横穴である。泉崎横穴群の最西端に位置



第13図　泉崎1号横穴・2号横穴実測図

する。横穴の構造は，玄室＋玄門＋前庭部で構成されている。しかし前庭部の先端の状況は不明である。玄室の奥壁から玄門の入口側までの長さは3.2m，玄室最大幅2.05m，同高さ1.2mを測る。玄室の平面形は，主軸方向に長い隅丸方形を呈している。断面形は，カマボコ形を呈している。排水溝は各壁にそって設けられているが，玄門部までは及んでいない。

玄門の立面形はアーチ状を呈し，入口幅55cm，高さ80cm，奥行70cmを測る。入口側には縁取りが施されている。



第14図　泉崎3号横穴実測図

泉崎2号横穴（挿図13）

1号横穴と同時にその東側から発見された。構造・形態ともほぼ同じである。玄室から玄門の入口側までは2.3m，玄室最大幅1.6m，高さ80cmである。玄室の最大幅は，奥壁近くにある。また奥壁と天井の間には明確な変換線はみられない。玄門は，高さ70cm，幅60～80cm，奥行40cmを測る。

泉崎3号横穴（挿図14，図版12）

昭和8年12月19日，白石山地区から発見された横穴である。壁画のある横穴の北側に位置する。玄室＋前庭部で構成されている。奥壁から入口までは2.4m，玄室最大幅1.1m，高さ80cmを測る。排水溝は，玄室の各壁にそって巡り，右壁側は前庭部へ続いていた。玄室の規模は小さいが，玄室と玄門の区別もそれほど明確ではない。しかし前庭部から入口をみると，丁寧な縁取りがなされていた。

泉崎4号横穴（挿図15，図版12・13・14・16）

玄室に壁画の描かれた横穴として，国の史跡に指定された横穴である。県道と広域営農用地農道の交点の東に位置している。現状では前庭部を覆ってコンクリート製の保護施設が設けられている。しかし内部の壁画は発見後の損傷や風化などから，現在では確認できない部分が多い。

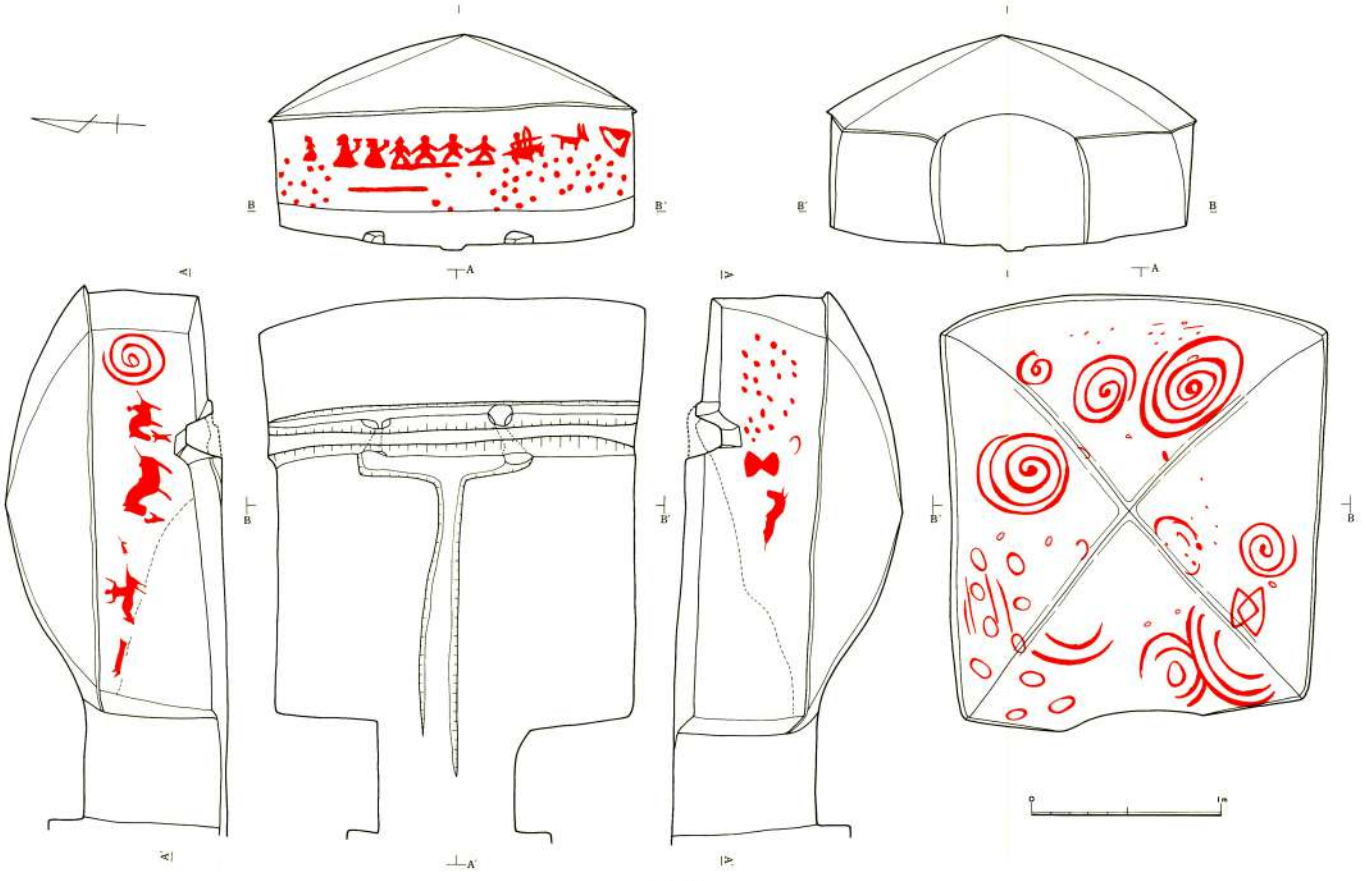
玄　　室　4号横穴は，玄室＋玄門＋前庭部で構成されていた。主軸方位はN－90°－Eに向けて，ほぼ真西に開口している。奥壁から玄門の入口までは，2.85 mを測る。玄室の平面形は，南北2.05 m，東西2.3 mを測り，主軸方向に長い長方形を呈している。立面形は家形を呈し，最高所で床面から1.16 mを測る。

玄室の最深部には，奥壁と平行して断面形が台形を呈する堤が用けられ，屍床を形成していた。堤は，上幅8～10㎝，下幅20㎝，高さ20～25㎝を測る。堤の上面は中央部がやや低く，南北の側壁に向かってしだいに高くなる。屍床の床面も堤と同様に側壁近くが高くなっていた。また玄室の床面より全体に約10㎝程高く造られていた。屍床の堤側には，深さ3～5㎝，幅8㎝前後の「U」字形を呈する排水溝が設けられていた。この排水溝は，北壁から50㎝，南壁から70㎝の地点に堤を貫くトンネルが設けられ，玄室床面へ続いていた。

玄室の床面も屍床と同じく，中央部が低く南北の側壁近くが高く造られていた。屍床から続く排水溝は，トンネルを出ると堤にそって中央部に向かい「T」字形に合流して，玄室床面を玄門の方へ向かって伸びていた。排水溝の幅は10～20㎝，深さ3㎝前後の浅い「U」字形を呈している。

玄室の四壁は，50～60㎝の高さを保ってほぼ垂直に立ち上がり，四隅には明瞭な変換線が認められた。天井との境には，外側へ小さく突出した庇状の切り込みが造られていた。天井は四辺の庇から中点に向かって軽く内弯して集中し，屋根と屋根の交線は広い「V」字状を呈していた。床面に寝ころがって天井をみると，ちょうど方桁造りの天井裏と同じようにみえる。

玄　　門　西壁のほぼ中央に設けられ，幅70㎝，高さ74㎝，奥行60㎝のアーチ状を呈している。この部分の床面は，玄室からゆるやかに傾斜しそのまま前庭部へ続いていた。天井部は玄室からなめらかに移行し，庇状の切り込みは設けられていない。入口側では側面と天井部に幅4㎝程度の縁取りが施されていた。横穴の発見時には，この部分で石



第 15 図　泉崎 4 号横穴実測図

英安山岩質熔結凝灰岩(DI層)を加工した板石を用いて閉されていたらしい。

前　庭　部　現状では不明確であるが，発見当時の写真をみても天井部はなく，またそれほど広い面積を有していたとは考えられない。自然丘陵の斜面を「L」字状に掘り込んで造られたものであろう。

横穴の各面には，掘削や整形時の工具痕が残っていた。とくに玄室の庇や側壁の隅に多くみられた。

遺物出土状況　4号横穴から出土した遺物は，刀子・鉄刀が各1本と鉄環である。鉄刀は屍床の南部に切先を奥壁に向けて，屍床の主軸と直交する状態で出土した。またこの部分から鉄環も出土したらしい。刀子は玄門近くの排水溝付近から出土した。

壁　　画　この横穴には，発見時に天井部と東・北・南の三壁に壁画が描かれていた。絵画は，石英安山岩質熔結凝灰岩(DI層)を直接キャンバスとして，赤色顔料をもって描かれていた。図象の表現方法は，線刻や縁取りなどは行わず，赤一色をベタ塗りとして描かれており，部分的に顔料が厚く盛り上がっていた。しかし現在では不明瞭な部分も多く，以下では岩越二郎文書に残された実測図と写真から説明を加える。

奥壁の壁画は，4個の構成要素からなっている。中央の上部には，水平に描かれた一本の横線の上に，手をつなぎ脚をガニ股に開く4人の人物が正面を向いている。身長は20㎝内外であろう。服装の細部は不明であるが，身体の部分ではやや斜めに下がった腕と，大きく開いた脚がとくに目立っている。頭部は，最北端の人物が三角形に表わされている以外は，ほぼ円形である。中央人物群の北側近くには，二体の人物を側面から描いている。手を前に捧げ，何かを顔の高さまで持ち上げ中央人物群の方向を向いている。北側の人物像の持ち物は，下方が小さく上方が開いている。人物像の頭部は，髪を束ね上げたように大きなふくらみを有し，下半身は長いスカートのような三角形で表わされている。体部は他の部分に較べてやや小さい。身長は20㎝内外であろう。この二体の人物像とやや離れてさらに一体の人物像がある。上半身が小さく，下半身がスカート様に大きく表わされているが，確かなことは不明である。

中央人物群の南側には，馬に乗り矢をつがえて弓を引こうとする騎馬像と，その前方に一頭の動物がいずれも側面から描かれている。騎馬像では，弓を引く人物が比較的大きく表わされ，馬はやや小さい。馬の脚は，前脚後脚とも1本の線で表わされている。尾はほ

ぼ水平に伸びている。また馬の耳と頭部は明確に表わされている。前方を走る動物については，岩越文書に残された資料ではやや不明瞭であるが，小林行雄編装飾古墳（1964）によると，長く大きな角もしくは耳，長い頭，細い胴，長い前脚と後脚が明瞭に描かれている。また尾は水平に伸びている。動物の前方には大きな三角形が描かれている。騎馬像・動物像・三角形ともに20㎝内外である。

これらの絵画の下方には，小さな赤点が群集して描かれていた。しかし中央部はその密度が少なく，代って一条の横線が描かれていた。

側壁の壁画は，入口側の天井部から屍床の堤にかけては，内部に進入した土のために失われていた。渦巻・4頭の馬・人物が描かれている。渦巻は最深部に位置し，屍床の上に描かれている。直径は40㎝前後を測り，起点から中心に向かって左回りに巻いている。

屍床の堤の上には，騎馬像と轡をとる馬丁が描かれている。全長は30㎝程度である。馬上の人物は小さく馬の割合がやや大きい。馬の前脚と後脚は1本の線で表わされ，尾をはね上げているが，轡をしっかり馬丁にとられている。馬丁の像は，右手で轡をとり，左手をまっすぐ上にあげ，両脚はやや開いている。二番目の馬も前脚と後脚をそろえ尾をはね上げているが馬上に人物はない。馬の各部分では，頭部が大きく描かれ，左右の耳も明確に表わされている。馬の背中には前後に小さな突起がみられ，鞍を表わしたと推定される。馬の前方に馬丁らしき表現があるが明瞭ではない。この馬は全長40㎝前後と推定され，馬の図象の中ではもっとも大きい。二番目と三番目の馬の間には30㎝程度の開きがあり，小さな動物と半円が描いてある。小動物は入口を向き，長い尾と脚がみられる。半円は下方が消失し不明確となっている。

三番目と四番目の馬は下半部を失っている。三番目の馬は，頭をやや下げて尾を水平に伸ばし，後脚2本が認められる。また馬上には左右に大きく腕を伸ばし手を広げた人物像が描かれていた。全長30㎝程度である。四番目の馬は，頭部の左右の耳と背中が残っているにすぎない。全長20㎝である。

南壁も北壁と同じく西半部を失っていた。発見時に確認された絵画は，点群と馬それに不明確な器材である。点群は屍床と堤の上部に描かれていた。馬は頭部から胴部にかけて残っているにすぎない。頭部と頸部が大きく描かれ，左右の耳も明瞭に表わされている。器材は，馬と点群の間に位置するが，何を表わしているか不明である。中央がくびれ

て鼓をたてたような図である。

天井部には渦巻を中心とした図象が描かれていたが，馬や人物像はみられない。奥壁側の天井には，3個の渦巻と点文が描かれている。すべての渦巻が起点から中心に向かって左回りに巻いている。北側が大きく，南側になると小さくなる。巻き数は，北側から四重・三重・二重となり，大きさも長径60㎝・30㎝・20㎝となっている。点文は，渦巻と庇の間に散在して描かれている。

北壁の天井には，渦巻と組み合わせ三角文が描かれている。この天井の図象は，西側に偏って位置していた。組み合わせ三角文は，天井の区画線に接して，線で表わした正位と逆位の三角形を組み合わせていた。この三角形は互いに頂点が底辺には到らずに終っている。大きさは30㎝前後である。その東には，起点から右回りに巻いた三重の渦巻がある。直径は30㎝強である。天井の中心部近くにも不明確ながら渦巻状の図象がある。

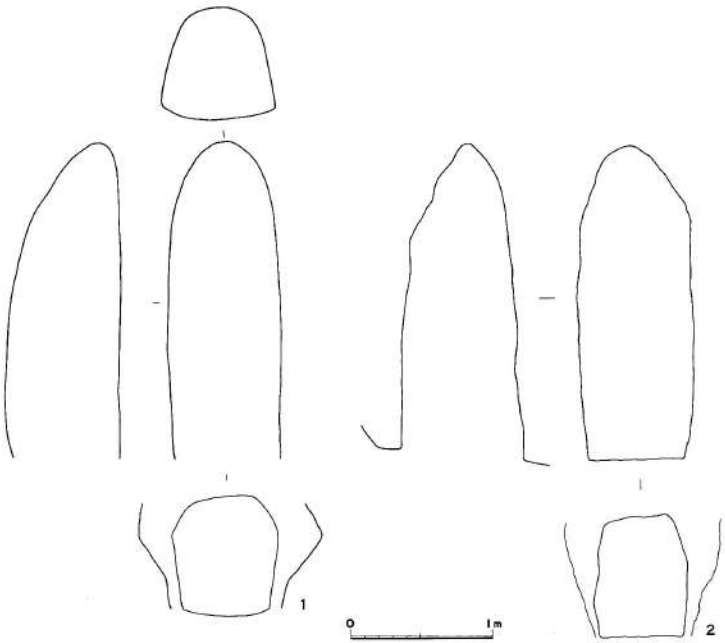
南壁の天井には，1個の渦巻と7個の円文が描かれている。渦巻は屍床の堤の上に位置し，起点から中心に向かって左回りに三重に巻いている。直径は40㎝前後である。その西側には10個のリング状の円文が配されていた。円文は直径15～20㎝程度の大きさで，線をもって表わしている。

西壁の天井には，3個の円文と3個の渦巻が描かれている。円文は南壁近くに偏り，奥壁から入口に向かって左側に位置する。線を結んで表わされ，直径は15～20㎝程度である。その東側には二条の弧が描かれ，渦巻の未完成と推定される。中心寄りにも2個の渦巻が描かれているが，いずれも未完成である。天井の区画線で途切れたものは，三重の半円が描かれ，直径は60㎝程度であろう。それに接して，楕円を中心にしそれを取り巻く二条の半円を描く渦巻がある。直径は40㎝程度である。

その他の横穴（挿図16）

実測図に横穴を明示する注記がなされておらず，番号は不明である。2基とも玄室に前庭部が直接とりつけられ，玄門は設けられていない。しかし玄室の入口には縁取り状の造作がなされている。玄室は，全長2m前後，幅1m弱，高さ80㎝前後である。玄門をもつ横穴に較べて小型である。玄室の形態も細長い割に天井部が高い。また奥壁と側壁・天井の区別は不明確である。とくに奥壁が貧弱である。

泉崎横穴群で確認された7基の横穴のうち，白石山地区から出土した7号横穴は，道路



第 16 図　泉崎横穴群横穴実測図

下に位置していたので実測図を作成せずに埋め戻したとされているが，16 図 2 には昭和 9 年 1 月 24 日，道路下を発掘し実測したと記載があり 7 号横穴の可能性もある。

3 節　泉崎横穴群から出土した遺物について

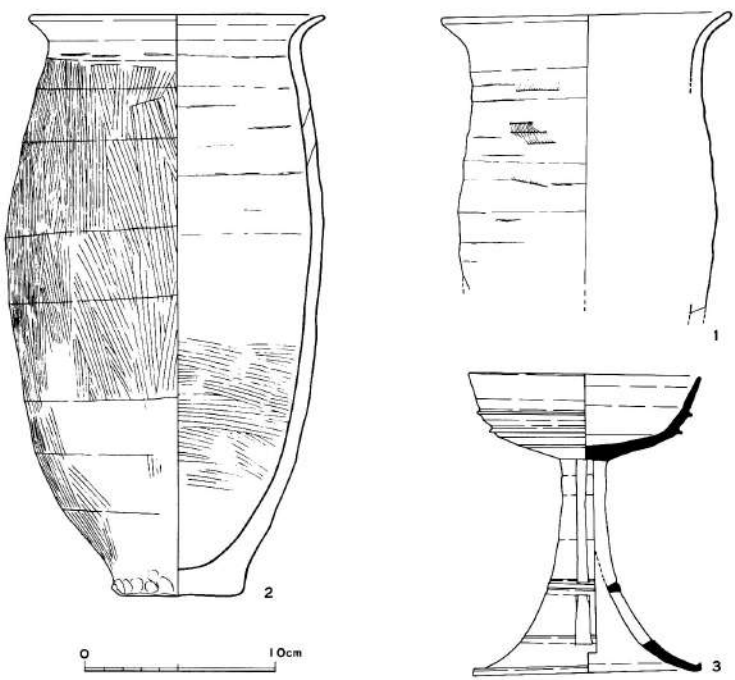
泉崎横穴群から出土した遺物のうち現在確認できる遺物は，3 点の土器類と鉄製品の残片のみである。須恵器の高坏と土師器甕 1 は，東京国立博物館に保管されている。その他の遺物は，泉崎村中央公民館に保管されている。このうち土器類については，図版15－1によって同定したが，鉄製品については形状が著しく異なっていることと，注記がなさ

れていないために完全な同定はできなかった。

土器類について（挿図17，図版15・17）

土師器甕1　1号横穴から出土した長胴甕である。体部下半を失い，内部にはコンクリートが詰められている。口径15.3㎝，現存高16㎝を測る。体部はやや外側にふくれて立ち上がり，口縁部は外反して端部は丸く納めている。

成形は粘土紐積み上げである。体部外面はかなり損なわれているが，かすかにヘラナデやナデの痕がみられる。また器面には凹凸がみられ，粘土紐の積み上げ痕も部分的に残る。口縁部は強いヨコナデが残されている。胎土には砂粒を含む。



第17図　泉崎横穴群出土　土器実測図

土師器甕2　2号横穴から高坏とともに出土した長胴甕である。体部上半の一部を欠いているが，ほぼ完形である。口径 15.6 ㎝，器高 30.8 ㎝を測る。平らな底部から軽く内弯して立ち上がり，口縁部は強く弯曲して外反し端部を丸く納めている。

成形は，粘土紐巻き上げ法により2分割ないし3分割によって行われていた。底部外面には木葉痕が残り，体部外面の下端にはオサエ痕がみられる。またこの部分に黒斑がある。体部外面には縦方向のハケメにより全面が整形されているが，部分的に軽いナデ・オサエがみられる。内面の下半は横方向の軽いハケメが施されているが，上半部は横方向のナデが施されている。口縁部の内外面はヨコナデが施されている。胎土には砂が多く含まれている。色調は黄褐色を呈し，器壁はやや軟質である。

須恵器高坏　2号横穴から出土した無蓋高坏である。口径 12.1 ㎝，脚部最大径 11.9 ㎝，器高 16 ㎝を測る。

坏の底部はやや丸みを有し，体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。体部外面には，鋭く突出した二条の凸線が巡っている。体部下半の外面には，ヘラケズリ痕がかすかに残り，底部の内面には軽い不定方向のナデが施されている。その他は全面に回転ナデが施されている。

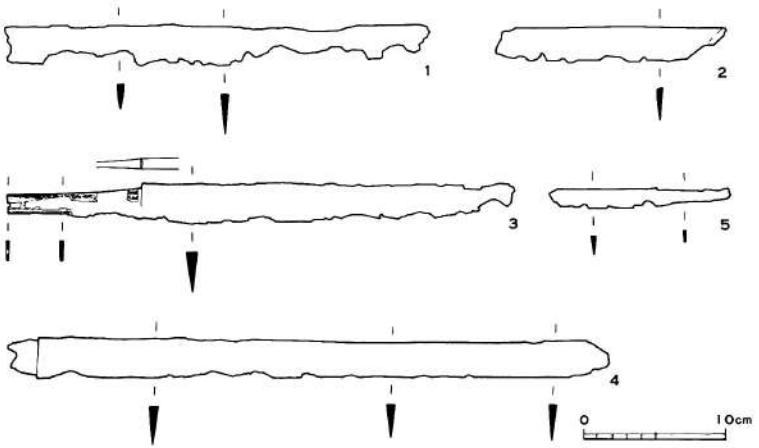
脚部は，二対の二段透かしが設けられ，透かしの切れ間と裾に二条の凹線で飾られている。また最下端は鋭くはね上げている。脚部の内外面は回転ナデで調整されていたが，上半部にはいわゆる絞り目の痕がかすかに残っている。脚と坏の接合部には，軽いナデが施されている。胎土には細砂粒が多く含まれている。色調は灰白色を呈し，器壁はやや軟質である。全体的な造りは丁寧でしかもよく整っている。

鉄製品について（挿図18，図版15・17）

18図1は，平棟平造りの刀身である。2は，平棟平造りの刀身である。切先の一部が残り，カマス切先と推定される。

3は，平棟平造りの直刀である。棟区は小さく直に落しているが，刃区は失われている。茎はまっすぐに延び，刃方と棟方から平の幅をやや狭めている。茎の断面形は棟方がやや広い長台形を呈している。茎の折損した部分には目釘孔があり，区から 9.2 ㎝を測る。茎の平には把木の一部が部分的に付着している。

4は，平棟平造りの直刀である。重ね 6 ㎜，平幅 2.9 ㎝を測る。区は小さく直に落



第18図　泉崎横穴群出土　鉄製品実測図

した両区である。5は，平棟平造りの刀子である。区は棟区のみが確認できる。茎は棟方がまっすぐに延び，刃方はやや絞っている。茎の断面形は長方形を呈している。

これ以外の鉄製品については確認できなかった。

4節　ま　と　め

横穴の構造と遺物については，すでに3章4節において七軒横穴群と合わせてまとめておいた。したがってここでは，4号横穴の壁画について少し述べてみたい。

玄室の奥壁は，原町市羽山横穴(渡辺：1974)や双葉町清戸迫横穴においても，壁画の中心となる部分である。4号横穴では，4つの構成要素に分かれたが，主題は中心に位置し手をつなぎ脚を踏ん張って踊る4人の人物像である。その北側の2人ないし3人の女性像は，明らかに捧げ物をもって中央の人物群の方へ向かっている。この二つの人物群がいっしょになって何らかの祭祀を表わしていると考えられる。南側の鹿を追い，馬上からまさに射とめんとする図もその祭祀に関係する儀式を表わした図ではなかろうか。清戸迫横穴

でも，奥壁の中央部に鹿を射る図が描かれ，羽山横穴では同じく奥壁の中央部に白地に赤の斑点を加えた鹿が描かれている。この例などから，福島県内の横穴壁画のモチーフのなかで，鹿にともなう図はかなり重要な構成要素のひとつと考えられる。点文は，羽山横穴ではその位置から星を表わすものと考えられているが，泉崎４号横穴では描かれた位置が異なることから別な意味をもつものと推定される。

側壁に馬や人物などの図象が描かれた例は，東北地方では泉崎４号横穴のみである。北壁の主題は，渦巻と馬である。渦巻は，清戸迫横穴では奥壁の正面にもっとも大きく描かれ，羽山横穴でも奥壁の右側に２個の大きな渦巻が描かれている。横穴壁画のモチーフとしては重要な構成要素である。しかし泉崎４号横穴では天井部に配され，奥壁にはみられず，壁面では北壁に１個の渦巻が描かれたのみである。清戸迫横穴や羽山横穴に較べると，壁画の中でその占める地位は異なる。

北壁の馬は2頭が一組になっていると推定され，奥壁から二番目と三番目にはやや広い空間がある。馬にともなって馬丁や騎馬人物も描かれているが，馬に較べて小さく影も薄い。入口側が消失しているために全体的な構成は不明であるが，奥壁側から入口に向かってみると，人物を乗せ轡を馬丁にとられている馬→鞍をつけられ轡を馬丁にとられているか，あるいは何かに繋がれている馬→走りながら背上に両手を大きく広げた人物を乗せる馬→はだか馬（？）という場面の移行が推定される。この壁面のなかで馬の占める位置は高い。

南壁のなかで，屍床近くの点群は，北壁の渦巻と対置される位置にある。器材については，臼・餌料容器・壺とされているが，それを明確に決定させるだけの根拠は乏しい。中央部に位置し奥壁に向かう馬は，後半部分が不明ながら馬丁はみられず，背上に人物を乗せたとも思えない。はだか馬の可能性が高い。

天井には，渦巻を主体として円文・組み合わせ三角文が描かれている。この部分は方桁造りの屋根裏のように四分され，各屋根裏が独立した１個のキャンバスを構成している。西壁の天井をみると，渦巻は屋根の稜線に接する部分で途切れている。つまり，二つ以上の屋根裏にまたがって図象は描かれていない。また屋根の中心部付近には，図象は少なくなる。壁画の描き手が複数であるのか，あるいは各屋根が何らかの意味を有しているのであろうか。羽山横穴の天井も同じく方桁造りに造られ，屋根裏の線は赤く塗って区画していた。またその全面に赤と白の点文が星状に配されていた。

屍体の葬られた位置は，屍床から出土した鉄環の位置から，頭部を南に向けて葬られたと推定される。そこでこの位置に目を置きこれらの壁画をみると，前面には天井いっぱいに渦巻が広がり，足下にも渦巻がみえる。しかし頭側の南壁は死者の側からはみえず，奥壁も十分にはみえない。これに対して入口から玄室をみると，奥壁が正面となる。泉崎4号横穴に施された壁画は，二つの立場からみるとその意味が大きく異なっている。つまり生者の側からみると，奥壁の壁画に表わされた儀式が意味をもつが，死者の側からみると赤く描かれた渦巻が象徴としての何らかの意味をもつと考えられよう。

横穴は屍体を納めるための施設であることから，その形状や壁画は当然死と係わる思想を表わしている。県内の各壁画横穴に共通してみられる渦巻・馬・鹿などのモチーフや，横穴の形状もまさしく家を形取り，死者の家つまり死後の世界を表わし，それらが組み合わされてひとつの死に係わる神話を表わしていると考えられる。また奥壁の主題は，他の横穴に類例はないが，神話学や民俗学の諸例から一種のゴーストダンスともみなされる。

しかしながら現代に生きるわれわれが，馬を馬として，渦巻を渦巻として認識することができても，その背後にある意義までは理解し難い断絶がある。

岩越二郎先生について

岩越二郎先生は，明治24年5月，熊本市春日町に生まれ，東京美術学校(現東京芸術大学)を卒業ののち，大正12年3月，旧制白河中学校の教師として赴任された。これより昭和44年2月，77歳でなくなられるまで，白河で教鞭をとり研究をなされた。

とくに仏教美術に造詣が深く，この分野にはすぐれた論文を遺された。また考古学でも福島県の先駆者として，めざましい活躍をなされた。

今回発表した泉崎横穴に関する資料は，先生が遺された厖大な調査記録の一部である。また，田島銀蔵古墳と下総塚古墳の主体部実測図も先生が作成されたものである。

付章2　県南地方の横穴群から出土した鉄刀について

はじめに
1．県南地方の横穴群から出土した鉄刀
2．鉄刀の各構成要素
3．鉄刀の分類と群設定
4．古墳時代鉄刀の概観
5．鉄刀の意義と年代
6．県南地方の横穴における鉄刀
7．結　　語

はじめに

従来の古墳時代鉄刀の研究では，飾り大刀が主な対象とされていた。したがって研究の視点も刀の装飾形態に注目した例が多く，特に把頭の形態や図象の変遷に重点が置かれていた。また研究基礎となる型式分類や編年もこの方向から進められ，相当の成果も上げられている。刀に施された装飾は，当時の社会と文化を背景として生み出されたと考えられ，その史的意義は決して小さくはない。しかし，刀の研究が飾り大刀の装飾的要素のみを対象として終始すれば，それは刀のなかでも特殊な外装についての研究でしかない。つまるところ武器としての刀に付加された一面を強調したにすぎず，もはや刀の本質から遊離して，刀の研究とはいえなくなる。

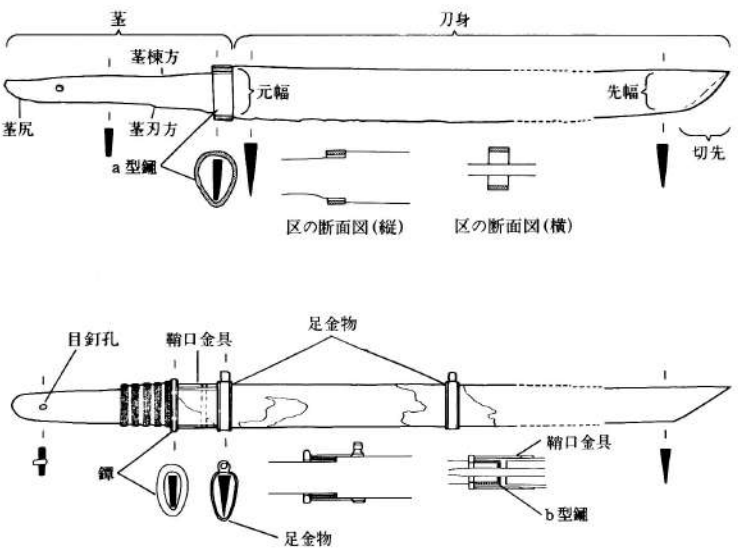
一振の刀は，刀身・把・鞘が組み合わされて構成されている。この組み合わせ方，つまり刀の基本構造についての整理は，刀の研究を行ううえでの基礎作業のひとつとなる。以下では資料紹介をかねて県南地方の横穴から出土した鉄刀を集成し，さらに鉄刀の構造的側面に視点を据えて整理と分析を行うことを目的とした。

1　県南地方の横穴群から出土した鉄刀

鉄刀各部の名称について

対象資料の説明に先立って，用語の統一を行いたい。この研究ノートで用いる用語は，主として「正倉院の刀剣」（日本経済新聞社：1974），「正倉院大刀外装」（小学館：1977）を参考にした。

主なものは下図に示すとおりである。



第19図　鉄刀各部の名称

白河市観音山横穴群から出土した鉄刀

白河市大字久田野字観音山５－１番地

1972年６月，果樹園の造成工事によって発見され，同年８月に発掘調査が行われた。合計４基の横穴を検出し，大刀の他に刀子・鉄鏃・馬具・装身具・土器などが出土している。1973年に発行された概報では大刀は７振となっているが，白河市歴史民族博物館には８振の大刀と，他に鉄刀の細片が保管されている。また保管されている遺物に注記が施されておらず，今回取り上げた遺物は概報で示された計測値と出土状況の写真から同定した。

１号横穴出土刀（挿図20）

最初に発見された横穴である。鉄刀は，他の遺物とともに奥壁にそって出土したという。

１号Ａ刀　区と切先の先端が欠損している。平棟平造りの直刀である。切先のフクラは強く張っている。茎は偏りなくまっすぐに延び，区から茎尻方向へ平の幅を減じている。茎尻は丸く終る。この部分に目釘孔があり，佩表から目釘が打たれている。刀身の平に木質が残っている。

この刀の他に鉄製鞘尻金具と鐔２個が出土しているが，この刀に装されたものかどうかは不明である。

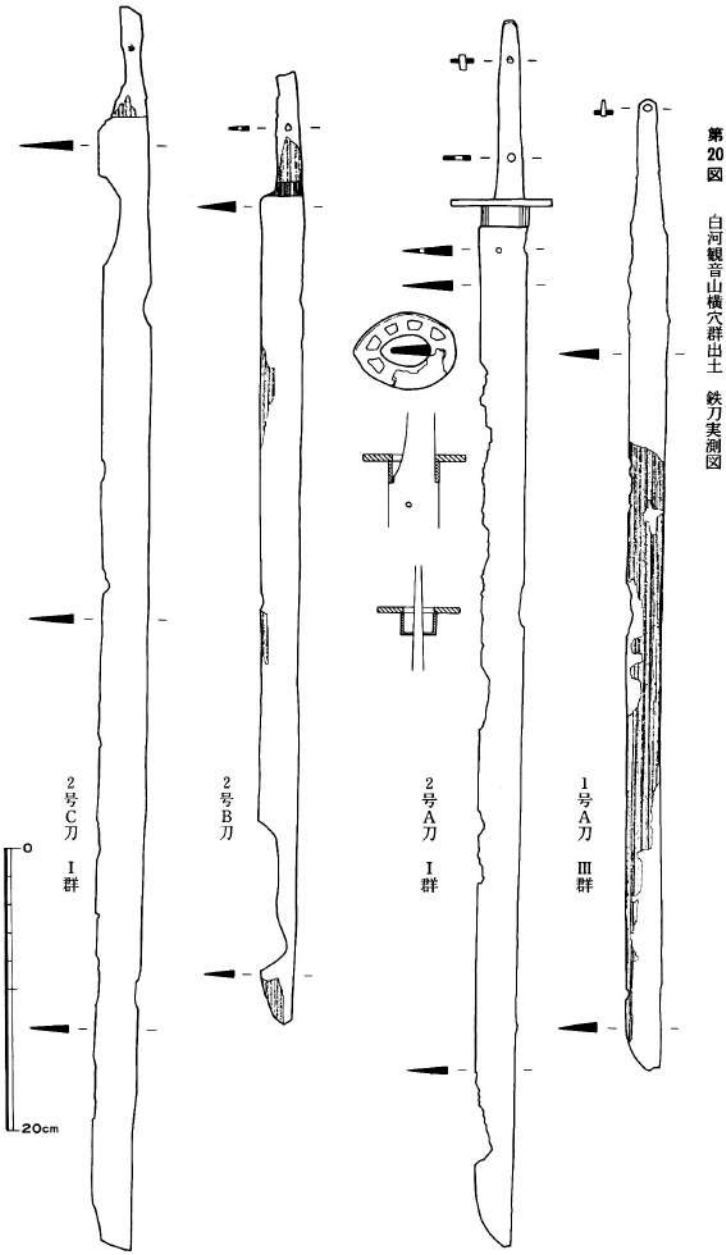
２号横穴出土刀（挿図20・23，図版18）

遺物は，玄室の床面から散乱した状況で出土した。

２号Ａ刀　刀身が部分的に欠損しているが，残存状況は良好である。平棟平造り，フクラ切先の直刀である。刃区から1.7㎝，刃から1.2㎝のところに，いわゆる刃区孔がある。区は両区である。棟区は２㎜ほど小さく直に落していたが，刃区は二段落しである。一段目は小さく直に落し，二段目は内弯してそのまま茎へ続いている。茎は全体に棟方に偏ってまっすぐに延び，茎尻は丸く終る。茎尻から2.7㎝と9.7㎝のところに目釘孔がある。茎尻近くの目釘孔には，佩表から目釘が打ち込まれている。

刀装具は鍔と鐔，目釘が残っている。いずれも鉄製鍛造である。鍔は楕円形を呈するｂ型である。区に接する部分を内側に打ち曲げて，把木端の堰としている。鐔は台形の窓を８個穿った板鐔である。平面形は棟方が丸く，刃方がやや突き出た倒卵形を呈している。長径7.2㎝，短径5.2㎝，厚さ４㎜である。中心孔は楕円形を呈し，棟方は茎と接してい

第20図　白河観音山横穴群出土　鉄刀実測図



るが，刃方は把木を挿入するための空間を有している。

2号B刀　切先近くの刃と茎の尻側が大きく欠損している。平棟平造りの直刀である。切先のフクラはやや枯れている。刀の平には木質が残っている。区は刃区のみの片区である。刃から大きく弯曲して茎へ続いている。区近くの茎の平には，幅1㎝前後で，茎の他の部分と異なる木目が付着している。茎は全体に棟方に偏り，やや内反り気味である。区から4.5㎝のところに目釘孔がある。

2号C刀　全体に欠損部分が多く，切先も失われている。平棟平造りの直刀である。棟区はなく，刃区も欠落しているが，茎の形状からみて，刃区の大きく発達した片区であろう。茎は全体が棟方に偏って延びている。この刀に用いられた鐔として，23図がある。鉄製鍛造の倒卵形板鐔である。長径7.7㎝，短径6.1㎝である。中心孔は楕円形を呈している。平の断面形は端部が厚く，中心孔側へ向かって厚さを減じている。厚さの最大値は4㎜である。平には，長方形もしくは台形の窓が6個穿たれている。

3号横穴出土刀（挿図21・22，図版18）

3号A刀　刃の一部が若干欠損しているが，その他の残り具合は良好である。平棟平造り，カマス切先の直刀である。切先にはかすかに小鎬がみられる。区は鎺と鞘口金具にかくれてみえないが，刃部と茎部の関係から両区と推定される。刀身には部分的に木質が付着している。茎は平の幅を減じて棟方と刃方がまっすぐに延び，茎尻は丸みをもって終る。茎尻から1.5㎝のところに，直径7㎜の眼貫孔がある。茎の平，背，腹には木質が付着している。

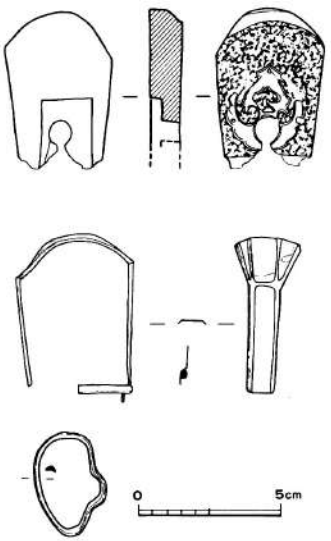
把頭は「へ」字状を呈する主頭である。把木の先端を丸く削り出し，金銅製の覆輪を取り付け，元を責金具で止めている。責金は刃方の一部が残るのみである。把木の把頭には，表側に金箔を貼り，その上に漆を厚さ1㎜ほど塗っている。さらにその上へ略宝朱形の薄い金製の飾り板を貼り鋲と眼貫金具で止めている。飾り板には，円形の眼貫の上にスペード状の透かしを彫り，その左右には巴状の透かしを配している。外縁は小さな円弧をつなげて輪郭にしている。透かしと外縁にそって，毛彫り技法を用いて縁取りを施している。

把は，内側に茎を納める溝を抉り把木を二枚合わせて，把頭と鎺で固定させている。鐔は金銅製，倒卵形の喰み出し鐔である。断面形は半円状を呈している。鎺も金銅製の筒鎺である。断面形は倒卵形を呈している。したがって把木は鐔を通ってこの部分まで挿入

第21図　白河観音山横穴群出土　鉄刀実測図

している。区に接する部分は鞘口金具に呑み込まれ，堰の有無は不明である。

鞘は，刀身に残る木質から二枚の板を貼り合わせ金具で固定されたものと推定される。鞘口金具は金銅製筒形である。断面形は倒卵形を呈している。この部分の鞘木には植物質の繊維を巻きつけて，鞘口金具に挿入されている。鞘口金具と接して佩用の懸垂金具が装されている。通常の責金具と異なり，佩裏に当る部分にふくらみをもたせて，紐を通す空間を設けている。しかし遊環やその他の付属品はみられず，また鞘口金具にも切り込みはない。



第22図　白河観音山横穴群出土
3号A刀の刀装具実測図

3号B刀　茎尻を欠き，刃もかなり欠損している。また切先近くに他の大刀片が付着している。平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区は刃区のみの片区である。刃側が小さく突き出して，そのまま内弯して茎に続いている。茎は全体に棟方へ偏っている。目釘孔は，区から4.8㎝のところにあり，長さ1.8㎝の目釘が刺さっている。鎺は鉄製鍛造のａ型である。

3号C刀　区近くの刃が大きく欠損している以外は，ほぼ完存している。ただし茎は元から折れている。平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区は小さく直に落した両区である。茎は，現状では棟方が絞られているが，通常の刀とは異なる。目釘孔は，茎尻から5.5㎝と11.5㎝の２カ所に穿たれている。尻に近い方の目釘は折れていたが，区側では長さ2.5㎝の目釘が佩表から打ち込まれている。また区近くには鉄製鍛造のａ型鎺の残欠が付着している。

3号D刀　出土当時はほぼ完形であったが，現状では茎尻と切先を欠いている。平棟平造りの直刀である。概報によると，切先はフクラ付きであったという。区は鎺にかくれ

てみえないが小さく直に落した両区であろう。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方は尻上がりに絞られている。目釘孔は，区から7㎝のところに設けられている。

鎺は鉄地に銀を貼り付けたb型である。断面形は楕円形を呈している。鐔は銅地銀貼りの喰み出し鐔である。平面形は楕円形の輪状を呈し，断面形は「U」字状を呈している。また把には銀線が葛巻きに巻かれている。銀線の断面形は三角形を呈し，上部の稜線を境にして横方向に刻み目が入れられている。

鞘は，二枚の鞘木を合わせて，2個の足金具で固定されている。足間の長さは10.5㎝を測り，この部分には黒漆が塗られている。足金物は，銅地に銀箔を貼ったものである。身は倒卵形を呈し，棟方に紐を通す円形の輪を付けている。身の断面形はカマボコ形を呈している。

刀装具（挿図23）

刀と遊離して，板鐔4枚，鞘尻金具1個が保管されている。すべて鉄製鍛造である。

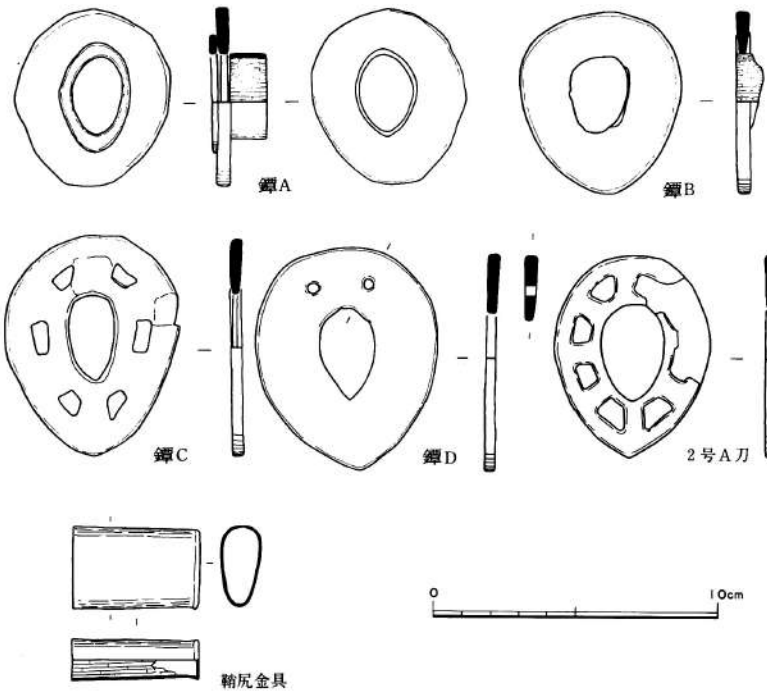
鐔　A　鎺と把縁金具が付着していることから，概報に記載された1号横穴から出土したものであろう。鐔の平面形は円形を呈し，長径6.3㎝，短径5.7㎝である。断面形は，中心孔側がやや狭い長台形を呈している。最大厚4㎜である。中心孔は，長径2.7㎝，短径2.1㎝の楕円形を呈している。把縁金具は輪状を呈している。鎺はa型である。内部に木質が付着している。

鐔　B　平面形は倒卵形を呈し，長径6.6㎝，短径5.7㎝を測る。断面形は鐔Aと同じく長台形を呈している。中心孔は長径2.6㎝，短径2.0㎝の楕円形である。鐔裏には鎺の着装痕が残っている。

鐔　C　平面形は，長径7.7㎝，短径6.1㎝を測る倒卵形である。断面形はやはり長台形である。最大厚4㎜である。中心孔は，長径2.9㎝，短径1.7㎝の倒卵形である。平に台形状の窓が6個穿たれている。2号C刀に装された鐔と推定される。

鐔　D　平面形は，長径7.8㎝，短径6.4㎝の倒卵形である。断面形は長方形を呈し，厚さ4㎜である。中心孔は，長径3.2㎝，短径1.9㎝を測り，刃方が尖っている。棟方の左右の平に，直径3㎜の孔が2個穿たれている。3号C刀に装された鐔であろう。

鞘尻金具　長さ4.5㎝の筒状を呈し，尻の端部は平である。断面形は，長径2.9㎝，短径1.4㎝を測る楕円形である。内部には木質が残っている。



第 23 図　白河観音山横穴群出土　鐔と鞘尻金具実測図

白河市郭内横穴群から出土した鉄刀

白河市字郭内 177 番地

1980 年 10 月に発見され，同年 11 月から 12 月にかけて緊急調査が行われた。10 基の横穴が検出され，刀・馬具・装身具・鉄鏃・須恵器などが出土している。

4 号横穴出土刀（挿図 24・26）

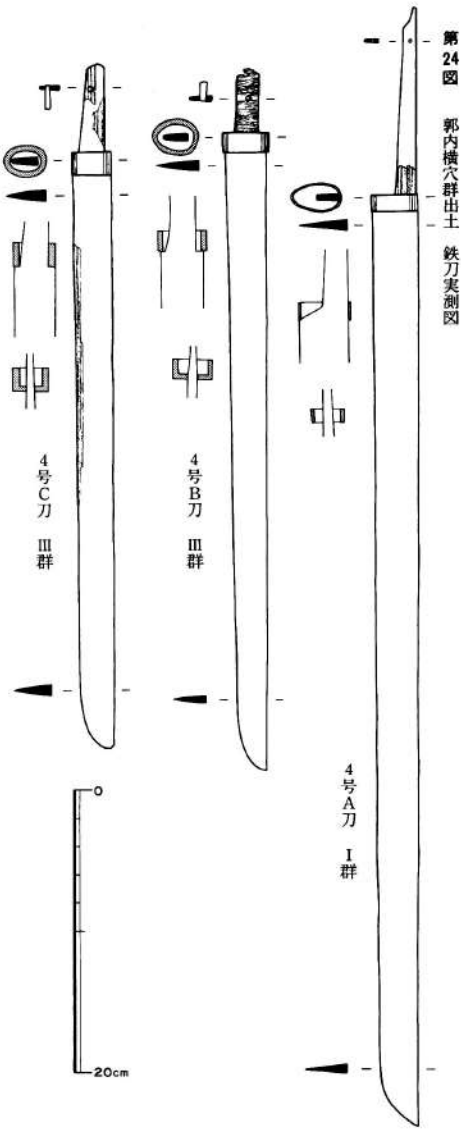
郭内 4 号横穴では合計 3 振の刀が玄室から出土した。中央部の左寄りに切先を入口方向にむけてA刀，奥壁にそって切先を左壁に向けてB刀，右壁にそって切先を入口側に向

けてC刀が出土した。いずれも佩表を下にしていた。

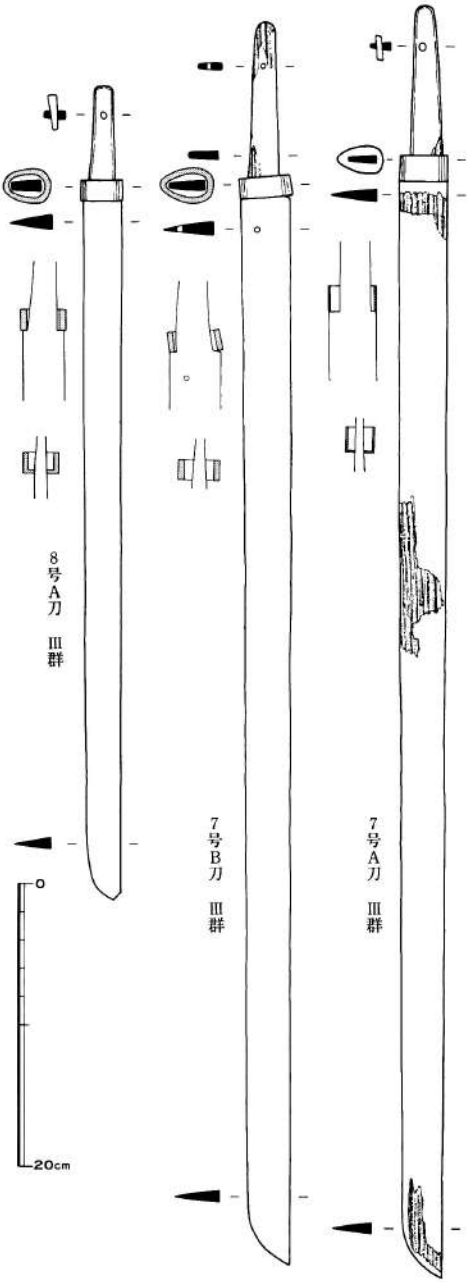
4号A刀　平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区は刃区のみの片区である。刃から大きく斜めに落されている。茎は棟方に偏り，平の幅は著しく狭い。茎尻は刃方が内弯し，棟方が鋭く突び出している。

鎺は鉄製鍛造のａ型である。断面形は楕円形を呈し，長径3.2㎝，短径2.0㎝を測る。鐔は鉄製鍛造の板鐔である。平面形は円形を呈し，平に長方形と隅丸台形の窓を6個穿っている。中心孔は楕円形を呈している。断面形は，端が厚く中心孔側が薄い長台形を呈し，端の厚さは7㎜である。

4号B刀　平棟平造り，フクラ付きの直刀である。平にはやや肉が付く。区は直に落した両区である。茎は偏りがなく，棟方刃方ともやや絞り気味に延びている。茎尻は薄くなり，目釘孔の一部は欠損している。このために，新たな目釘孔を茎尻から2㎝はなれた平の中央に設



第24図　郭内横穴群出土　鉄刀実測図



第25図　郭内横穴群出土　鉄刀実測図

けている。この目釘孔には，佩裏から打ち込まれた目釘が折れて刺さっている。また茎には有機質の繊維が巻き付けられている。鍔は，厚みのある鉄製鍛造のｂ型である。鐔は用いられていない。

4号C刀　平棟平造り，フクラ切先の直刀である。平にやや肉が付いている。区は直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方は平の幅を狭めて斜めに延びる。茎尻は丸く終る。目釘孔は茎尻から1.7㎝のところに位置し，佩表から打たれた目釘が刺さっている。鍔は鉄製鍛造のｂ型である。

7号横穴出土刀

（挿図25・26）

刀の他に，刀子・馬具・銅釧・勾玉・小玉などが出土している。A刀は玄室の左側，B刀は右側から，いずれも床面に接して副葬時の状態を保って出土した。

７号Ａ刀　把頭の飾り金具と鞘口金具を欠いているが，他はほぼ完存している。目釘以外の刀装具は，すべて金銅製である。刀身は，平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区は直に落した両区であり，刃区の方をやや大きく落している。茎はまっすぐ延びているが，やや棟方へ寄っている。茎尻は丸く終る。目釘孔は茎尻から３㎝のところに位置し，平の中央からやや刃方へ寄る。目釘は佩表から打ち込まれ，佩裏側は先端が折れている。

鍔はｂ型である。断面形は倒卵形を呈し，長径3.2㎝，短径2.0㎝である。鍔の内部には，茎を包むようにして二枚の把木が残存している。鐔は倒卵形を呈し，長径8.2㎝，短径6.4㎝，厚さ３㎜を測る。端には幅５㎜の覆輪が施されている。平には台形状の窓が６個設けられている。中心孔は倒卵形を呈し，この部分は表から裏へ斜めに削られている。

鞘尻金具は長さ15.3㎝を測り，先端は尻上がりに丸く納めている。断面形は長径3.2㎝，短径2.0㎝の倒卵形を呈している。二枚の鞘木を合わせ，元を責金で約している。

鞘木には黒漆が塗られていたと推定され，部分的に遺存している。また刀身の平には区から８㎜のところで直線的に途切れた鞘木の痕が残っている。

７号Ｂ刀　平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区から2.4㎝のところに，直径４㎜のいわゆる刃区孔がある。区は直に落した両区である。棟区の方がやや大きく落されている。茎は棟方が区からまっすぐ延び，刃方がやや絞られて平の幅を減じ，茎尻は丸く終る。茎尻から3.2㎝のところで，平の中央に目釘孔がある。

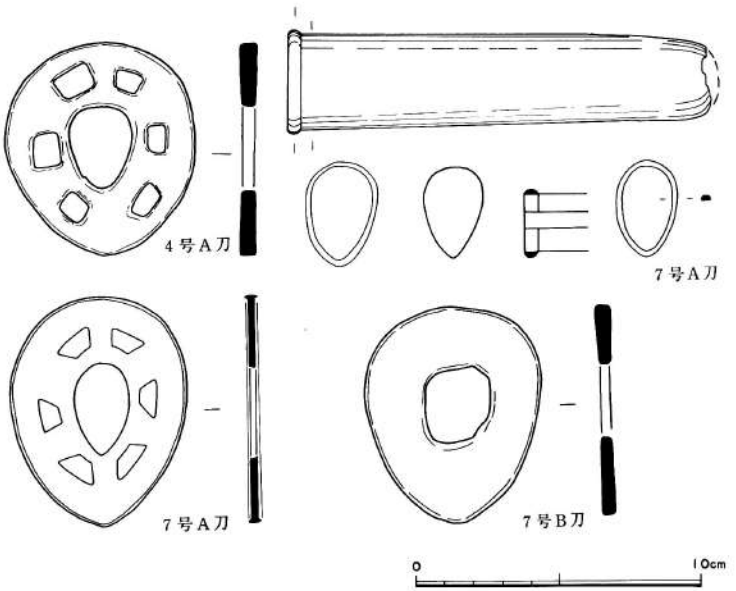
鍔は鉄製鍛造のａ型である。断面形は倒卵形を呈し，長径3.5㎝，短径2.6㎝である。鐔は鉄製鍛造の板鐔である。倒卵形を呈し，長径7.6㎝，短径6.1㎝である。断面形は，中心孔側が狭い長台形を呈する。中心孔は，長径2.9㎝，短径2.3㎝の楕円形を呈する。

８号横穴出土刀（挿図25）

屍床の縁にたてかけて出土した。刀の他に両頭金具，刀子，鎌などが出土している。

８号Ａ刀　平棟平造り，フクラ切先の直刀である。重ね幅が広く，平にもやや肉が付いている。区は直に落した両区である。茎は棟方がまっすぐに延び，刃方はやや絞り気味に延びている。茎尻は角丸に納めている。茎尻から1.8㎝のところで，平の中央に目釘孔がある。佩裏から長さ2.5㎝の目釘が打ち込まれている。

鍔は鉄製鍛造のｂ型である。断面形は楕円形を呈し，長径3.1㎝，短径2.5㎝，長さ1.6㎝を測る。厚さは４㎜とかなり厚い。茎には，佩裏側に植物質の紐が葛螺きに巻いた



第 26 図　郭内横穴群出土　刀装具実測図

ものが遺存している。

また，直刀とは遊離して鉄製鍛造の円形把頭金具が出土している。

笊内古墳群から出土した鉄刀

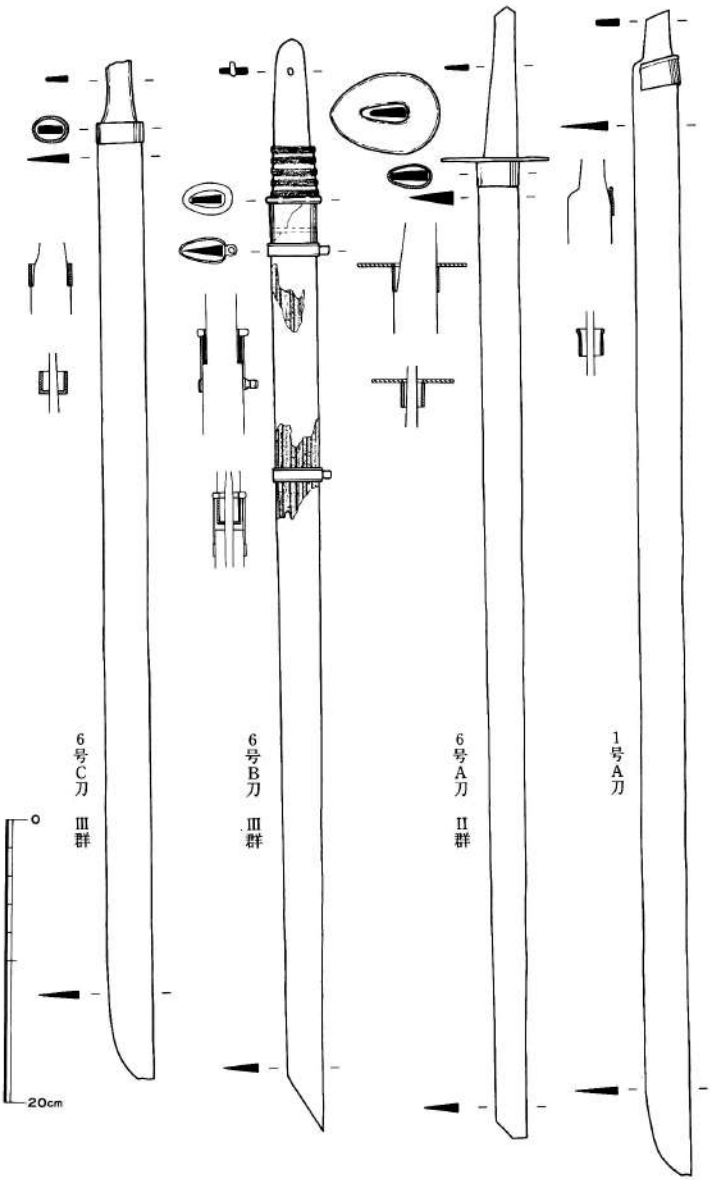
西白河郡東村大字上野出島字笊内

社川の支流矢武川を臨む丘陵の南斜面に立地している。54基の横穴，4基の高塚古墳，1基の箱式石棺で構成された古墳群である。1978年，福島県文化センター遺跡調査課によって全面にわたる発掘調査が実施され，1979年に概要報告書が出版されている。7基の横穴から合計9振の刀が出土した。このうち形状の明らかな7振を実測した。

1 号横穴出土刀（挿図 27）

1 号 A 刀　玄室内から，佩表を下にして，横穴の主軸と直交して出土した。茎の大半

第27図　笊内古墳群出土　鉄刀実測図



は失われ，刀身も４つに折れていた。平棟平造り，フクラ切先の直刀である。棟区は，刀の棟からやや斜めに下って茎となり明確な区を形成しない。刃区は，刃から大きく弯曲して茎へ続いている。茎はまっすぐに延びていたと推定される。断面形は棟方が厚い長台形である。区に接して刀身側に，鉄製鍛造の筒状金具が付着している。この金具の区側は丸く折り曲げられ，付着位置からみると鞘口金具と鏃との区別はつき難い。

６号横穴出土刀（挿図27）

玄室内から重なってＡ刀とＢ刀が出土し，玄門付近からＣ刀が出土した。

６号Ａ刀　茎尻が欠損している以外はほぼ完存している。平棟平造り，カマス切先の直刀である。棟区はなく，刃区は小さく直に落した片区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方は棟方に向って直線的に絞られている。目釘孔は確認できなかった。

区に接して鉄製鍛造のａ型鏃が装されている。断面形は偏平な楕円形を呈し，長径3.1㎝，短径1.6㎝を測る。長さは1.8㎝，厚さは２㎜である。鐔は棟方に偏って倒卵形を呈し，鉄製鍛造の無窓板鐔である。計測値は，長径7.7㎝，短径5.8㎝，厚さ２㎜である。中心孔は鏃と相似形となり，ひとまわり小さく造られている。

６号Ｂ刀　切先の一部を欠いているが，その他はほぼ完存している。刀身は平棟平造り，カマス切先の直刀である。区は小さく直に落した両区である。茎は偏りなくまっすぐに延び，茎尻は少し突き出して丸く終る。茎尻から２㎝のところに目釘孔がある。目釘は佩表から打ち込まれていたが，表側は欠損している。

鏃は銅製のｂ型である。断面形は倒卵形を呈している。鐔は断面形がカマボコ状を呈する喰み出し鐔である。鉄地に銀箔を被せている。中心孔は，鏃と同じく楕円形を呈している。したがって把木は鐔を突き抜けて鏃まで挿入されている。

把木は，茎を包み込んで二枚の板を合わせ，目釘と鐔で固定させていた。把間には，有機質の紐を片手巻きに５回巻いたものを一単位として，15単位ほど巻き付け，その上に漆が塗られている。把の断面形を残存する漆から求めると，長径3.2㎝，短径８㎜の偏平な楕円形となる。

鞘には，鞘口金具，足金物が装されていた。鞘口金具は銅製である。鞘口から2.2㎝までは鞘木がなく，鏃を納める鏃室となっている。足金物は銅地に銀箔を貼り付けたものである。身は棟方がやや広く刃方が狭い楕円形を呈し，紐通し孔はほぼ円形である。足間は

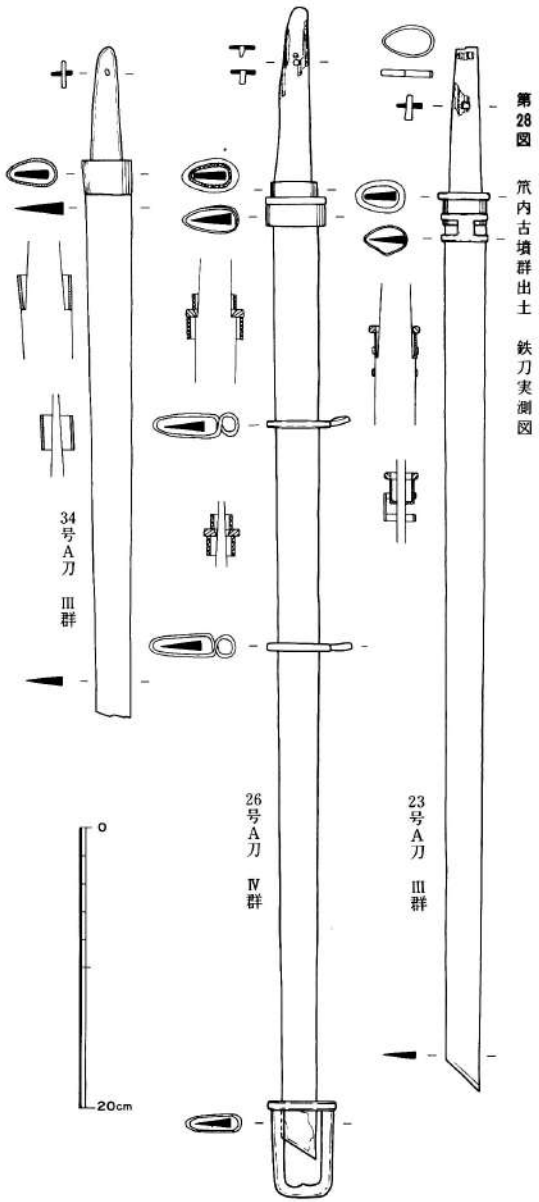
16.0㎝である。

6号C刀　茎が大きく損なわれ，切先も先端を欠いている。刀身は平棟平造り，フクラ切先の直刀である。区は小さく落した両区である。茎は，まっすぐに延びるものと推定される。茎の断面形は棟方の広い長台形を呈している。鎺は鉄製鍛造のb型である。

23号横穴出土刀

（挿図28）

23号A刀　玄室内の床面から，佩裏を上にして出土した。残存状態は良好である。刀身は平棟平造り，カマス切先の直刀である。切先には，かすかに小鎬状の変換線が認められる。区は小さく直に落した両区である。茎は偏りなくまっすぐに延び，茎尻は直角に断ち落としている。茎の



第28図　笊内古墳群出土　鉄刀実測図

断面形は，棟方の方がやや広い長台形を呈している。茎尻から4.1㎝のところに目釘孔が穿たれ，角頭の目釘が佩表から打たれている。また茎の平や棟には部分的に木質が付着している。

鍔は鉄製鍛造のｂ型である。断面形は倒卵形を呈している。鐔は鉄地に銀箔を貼り付けた喰み出し鐔である。外形は楕円形を呈し，中心孔も同様である。断面形は隅丸方形を呈している。また茎尻近くには，銅地に銀箔を貼り，内側をケサゲ仕上を施した責金具が付着している。鞘には，鍔の一部を呑み込んで鞘口金具が残っている。形状は，倒卵形の足金物に佩表で橋をわたした双脚金物である。また橋の部分では外側にふくらみをもたせている。

26号横穴出土刀（挿図28）

26号A刀　刀身と刀装具はほぼ残っていた。刀身は平棟平造り，カマス切先の直刀である。区は小さく直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐ延びているが，刃方はやや内弯して軽く絞られている。茎尻は，はね上げ気味に丸く納めている。茎尻から3.3㎝と3.5㎝のところで，平の中央に目釘孔が設けられている。いずれも目釘が打ち込まれているが，両方とも折れている。

区には鍔は装されず，鉄製鍛造の喰み出し鐔が直接用いられている。この鐔の中心孔は，茎を挿入するための空間しかなく，把木は鐔の平を堰としている。鐔表には鉄製鍛造の把縁金具が装着されている。偏平な楕円形の筒状を呈し，鍔に代って把木を約する金具と考えられる。

刀身には，鐔に接して鉄製鍛造の鞘口金具が付着している。断面形は偏平な楕円形を呈している。地鉄の上に布を覆せ，さらに漆が塗られている。鞘木にも同様な痕跡がみられることから，鞘全体を布で包み，漆を用いて固めたものと考えられる。鞘口から15.5㎝と31.5㎝のところに足金物が付着している。鉄製の細板を「8」字状に折り曲げた簡単な造りである。紐通し孔は円形を呈し，割合大きなものである。身は，棟方がやや角ばり，刃方は丸く納めている。身の最大幅は1.7㎝を測り，かなり薄い鞘が想定される。鞘尻には鉄製鍛造の鞘尻金具が装されている。内行花先形の覆輪状を呈し，元を責金具で約されている。覆輪には表面に面取りが行われ，断面形は偏平な八角形を呈している。また輪の内部にも漆が残っている。

34号横穴出土刀（挿図28）

34号A刀　切先が欠損し，全長は不明である。刀身は平棟平造りの直刀である。区は小さく直に落した両区である。茎は偏りなく延び，先端は丸く納めている。茎尻近くの平の中央に目釘孔が設けられ，目釘が刺さっている。区に接して，鉄製鍛造のａ型鍔が装されている。鍔の断面形は楕円形を呈しているが，佩表側は丸みに欠ける。

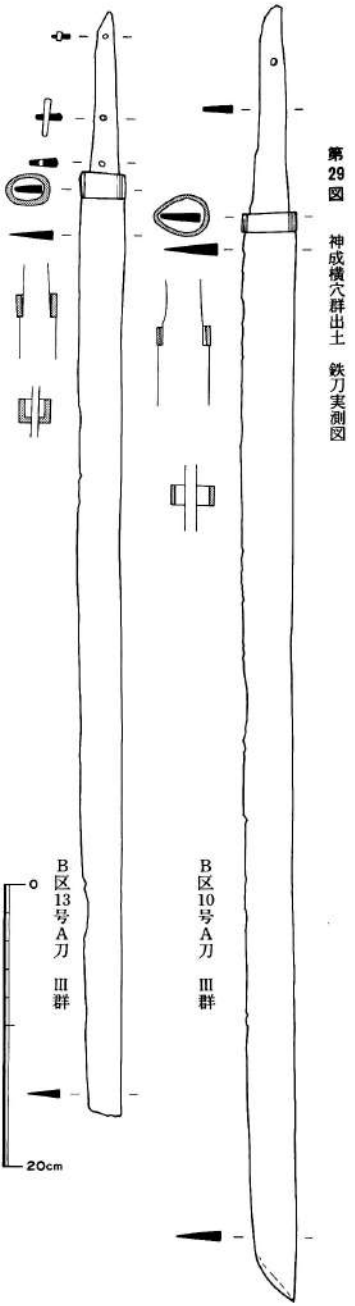
神成横穴群から出土した鉄刀

須賀川市仁井田館ケ岡字四十壇

福島県史・第6巻の図版657に載せられた4振の大刀のうち，上段の2振を阿武隈考古博物館で実測した。残りの2振については，錆化が著しいということで実測はできなかった。出土状況は不明である。

B区10号横穴出土刀（挿図29）

10号A刀　茎尻が錆ぶくれによって損なわれている以外は，ほぼ完全に残っている。刀身は平棟平造り，フクラ切先の直刀である。元幅は3.8㎝とやや広く重厚な刀である。区は小さく直に落した両区である。茎のうち鍔受けの部分は，平行して平の幅がやや広く造られている。茎の棟方はほぼまっすぐに延び，刃方はやや絞り気味に延びて，尻は弯曲してはね上り丸く納めている。茎の断面形は，棟方がやや広い長



第29図　神成横穴群出土　鉄刀実測図

台形を呈している。目釘孔は茎尻から4㎝のところに1個のみ穿たれている。

鍔は鉄製鍛造のa型である。断面形は倒卵形を呈し，長径3.8㎝，短径3.0㎝である。また長さは1.4㎝，厚さは4㎜を測る。

B区13号横穴出土刀（挿図29）

13号A刀　切先が欠損している以外は良く残っている。刀身は平棟平造りの直刀である。区は小さく直に落した両区である。茎の棟方はまっすぐに延び，刃方はやや絞られて延びている。茎尻は刃方から棟方へ直線的にはね上がり，端部は丸く突き出している。茎の断面形は，棟方のやや広い長台形を呈している。茎尻から1.6㎝，7.7㎝，10.5㎝のところに，それぞれ目釘孔が穿たれている。真中の目釘孔には佩裏から打ち込まれた目釘が刺さっている。長さは2.5㎝である。

鍔は鉄製鍛造のb型である。断面形は楕円形を呈し，長径3.0㎝，短径2.2㎝を測る。また長さは1.9㎝，厚さは5㎜である。

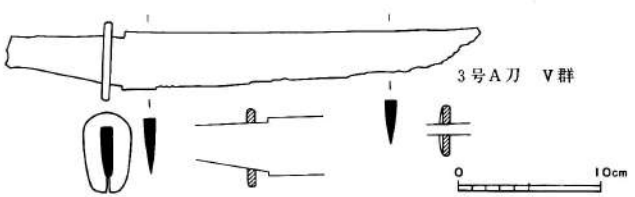
泉崎村観音山北横穴群から出土した鉄刀

西白河郡泉崎村大字踏瀬字観音山

3号横穴出土刀（挿図30）

3号A刀　横穴の玄門部に，主軸と直交して置かれ，佩表を下にして床面から出土した。この刀以外にこの横穴から出土した遺物はない。出土当時はほぼ完存していたが，現状では茎尻を欠損している。

刀身は平棟平造りの直刀である。元幅と先幅の差は1.6㎝とかなり大きい。切先は直線に近くフクラが枯れてカマスに近い形状である。区は小さく直に落した両区である。茎



第30図　泉崎観音山北横穴群出土　鉄刀実測図

の棟方はまっすぐに延び，刃方は強く絞られている。茎尻は，いわゆる蕨手状になる。茎の断面形は隅丸長方形を呈している。目釘孔はない。

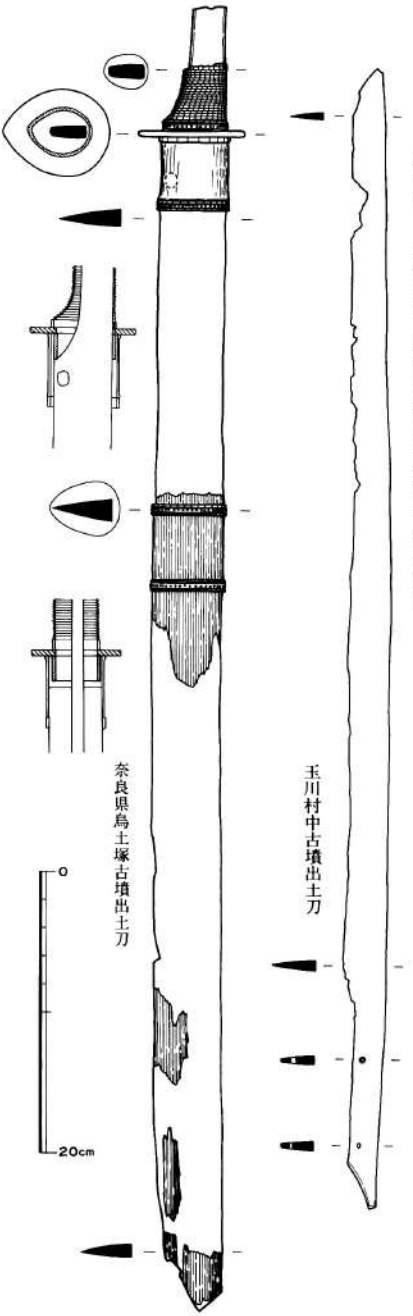
区から1㎝のところで，茎に直接楕円形の板鐔が装されている。長径5.7㎝，短径3.2㎝である。鎺は用いられず，茎と中心孔との間に隙間はない。

参考資料1

中古墳出土鉄刀（挿図31）

石川郡玉川村泉郷字中

県文化センターに，伝中古墳出土刀として保管されている刀である。錆化が著しく進行し，刀身は大きく板状に割れている。平棟平造りの直刀であるが，茎がやや内反り気味に延びている。切先はフクラ付きである。区は，刃区のみの片区である。刃と茎との境は不明瞭である。茎の刃方には区の近くで，長方形の小さな抉りがみられる。茎尻は刃方が小さく内弯してはね上がり，大きく突き出している。茎の断面形は，棟方がや



第31図　参考資料1　中古墳・烏土塚古墳出土　鉄刀実測図

や厚い隅丸長台形を呈している。

烏土塚古墳出土鉄刀（挿図31）

奈良県生駒郡平群町大字西宮

烏土塚古墳は，平群谷の代表的な前方後円墳である。内部には巨石を使用した大型の横穴式石室が築かれていた。石室内からは多くの土器とともに，鏡・武器・馬具・工具などが出土している。出土した須恵器はTK 43型式に相当し，古墳の築造年代は6世紀後半と考えられる。

図示した大刀は，玄室の側壁に接して床面から出土した。把頭と切先の一部を欠いているが，その他の残存状態は良好である。

刀身は，平棟平造り，フクラ切先の直刀である。重ねと平幅が大きく重厚な刀である。切先は，刃の弯曲からみて，いわゆる茅葉切先に近い形態であろう。刃区の近くには，刃区孔が穿たれ，その周囲には連弧状の象嵌が施されている。区は刀装具にかくれてみえないが，刃区の大きく発達した片区であろう。茎は棟方がまっすぐに延び，刃方はやや内弯気味に絞られている。茎の断面形は隅丸長方形を呈している。破損部には，平の中央に目釘孔が認められる。

レントゲンを用いた調査によって，区に接してa型鎺が確認されている。材質は錆ぶくれがみられないことから，地金には銅もしくは銀が用いられていると推定される。鐔は金銅製の板鐔である。平面形は，刃方が小さく突き出した楕円形を呈している。把縁金具には金製の帯を用いている。帯状の有機物に紋様を刻んで，金箔で包んだ造りである。同様な金具を，鞘口と鞘の中央で責具として用いている。把には三角形の断面形を呈する銀線が葛巻きに巻かれている。棟方は茎と同じくまっすぐであるが，刃方では鐔表から大きく内弯して絞られている。把の断面形は楕円形を呈し，茎の棟方は銀線と接している。したがって，把は茎全体を把木で包まず，棟方に把木が被さらない構造である。

鞘は，二枚の板を鞘口金具と責金で固定する造りである。鞘口金具は銀で造られ，鎺を呑み込み，断面形は楕円形を呈している。口縁の端は外側へ丸く折り返されている。またこの金具と接して責金具が装されている。鞘の中ほどに鞘木を約した責金が2個装されている。断面形は倒卵形を呈し，長径5.0㎝，短径4.0㎝である。

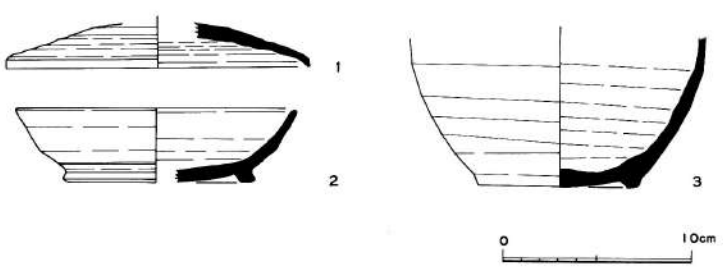
参考資料2（挿図32）

鉄刀の年代を決定するさいに参考となる土器のうち，実測図の未発表の資料を載せた。

32図1は，東村笊内古墳群26号横穴の玄室と玄門の床面から出土した須恵器の坏蓋である。小破片となり，つまみを失っている。口縁部は小さく突出し，内面にかえりはない。天井部外面のつまみ近くには回転ヘラケズリが施されているが，それ以外の部分は内外面とも回転ナデが施されている。色調は灰白色を呈し，やや軟質である。胎土は砂粒を含んでいる。

32図2は，1と同じ笊内古墳群26号横穴の玄室から出土した須恵器の坏身である。復元口径14.8㎝，器高4㎝である。底部は丸みをもち，体部から口縁部にかけてはやや内弯気味に外傾する。体部と底部の境には，小さく外へ踏んばる貼り付け高台がついている。体部下端から底部にかけての外面には，回転ヘラケズリののちナデもしくは回転ナデが施されている。その他の部分は，すべて回転ナデが施されている。色調は灰褐色を呈し，焼成はやや軟質である。胎土は細砂粒を含んでいる。

32図3は，泉崎観音山北横穴群4号横穴の玄室から出土した須恵器の壺である。やや丸みのある底部から，内弯気味に立ち上がる。底部と体部の境には，断面形が逆台形を呈する貼り付け高台がある。体部下端の外面は，回転ヘラケズリののち丁寧なナデが施されている。内面は強い回転ナデにより軽いロクロメが生じている。底部外面はナデが施されている。色調は青灰色を呈し，焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含んでいる。



第32図　参考資料2　県南地方の横穴出土　須恵器実測図

2　鉄刀の各構成要素

ここでは，前述の鉄刀について，各部分の特徴をまとめておく。

刀身について

刀の長さは，刀身の長さが44～50㎝，茎の長さが5～10㎝の間に納まるものと，刀身の長さが60～85㎝，茎の長さが10～15㎝と長いものに大別される。

刀身の形態は，棟がまっすぐに伸びて，反りや内反りのない直刀である。断面形は，二等辺三角形を呈する平棟平造りの刀が大半を占め，五角形に近い形状の平棟切刃造りの刀は，七軒横穴群1号B刀のみである。元幅は，大半が2.4～2.7㎝の間に納まる。しかし白河観音山横穴群2号C刀などでは，例外的に4㎝に近い大刀もある。

切先は，刃が外弯するフクラ切先と，直線的なカマス切先に大別される。数量的にはフクラ切先が14振と多数を占めている。主として鉄製刀装具が用いられた刀にみられる。カマス切先は，金銅製や銀製の刀装具が用いられた飾り大刀に多くみられる。

区近くには，いわゆる刃区孔の穿たれた刀が2例ある。用途については，釘を刺して鐔を止めたり，鞘走りを防ぐための孔とされている。しかし，前者では鐔から離れすぎており，後者では奈良県烏土塚古墳出土刀のごとく，刃区孔を塞いで金属製の鞘口金具が装されるなど無理があろう。むしろこの孔の周囲に象嵌などが施されている例がみられることから，飾り紐などを垂らすような装飾的要素のために穿たれた孔ではなかろうか。

茎について

茎は，刃方が区の部分から全体に棟方へ偏り，平幅の狭い形態と，あまり偏りはみられず，平幅の広い形態とに大別される。偏りのある茎では，刀身の棟方からそのまま茎の棟方へ続いて棟区がなく，刃区の大きく発達している片区の刀と，棟方を小さく直に落した両区の刀がある。片区刀は6例ある。郭内横穴群4号A刀や白河市観音山横穴群3号B刀では，区と刃が明瞭に分かれ，この部分に鍔が装されているが，笊内横穴群1号A刀と白河市観音山横穴群2号B刀では，刃から茎へ曲線を描いて移行して，区と刃の境が不明瞭な刀である。この2刀には金属製の鍔は用いられていない。白河観音山横穴群2号B刀では，茎に付着する木質の木目が，区の近くとその他の部分では異なることから，この

部分に木製刀装具が用いられたことを示している。

茎が棟方に偏り，両区の刀は，2例である。白河観音山横穴群2号A刀では，刃区の一段目を小さく直に落し，二段目は大きく内弯して茎へ続いている。郭内横穴群7号A刀では，大きく直に落した刃区である。

茎に大きな偏りのない刀は16振である。棟方と刃方の区は，小さく直に落されている。このうち，笊内横穴群23号A刀や郭内横穴群8号A刀などのように，棟方と刃方がほぼ平行してあまり平の幅に変化のない刀が10振と主流となる。次いで七軒横穴群1号A刀など，刃方が刃区から棟方へ斜めに上がり，平の幅をやや狭めている刀が4例ある。また泉崎観音山北横穴群3号A刀では，茎の全体的な形状はいわゆる蕨手状を呈している。

茎尻の形態については，丸く納めるもの(笊内横穴群6号B刀など)，いわゆる角丸状に納めるもの(郭内横穴群8号A刀など)，直に切るもの(笊内横穴群23号A刀)，刃方から尻上がりに丸く納めるもの(神成横穴群B区13号A刀など)，刃方から棟方へ直線的に尻上がるもの(七軒横穴群1号A刀)などがある。これらは形態的な差異ではあろうが，把の構造という点からはどのような意味を示しているのか不明である。しかし蕨手状を呈する泉崎観音山北横穴群3号A刀では把木は用いられず，茎がそのまま把として使用されて茎尻は露出している。また郭内横穴群4号A刀の茎尻は，刃方が内弯して棟方が鋭く突出している。この形態はいわゆる木装大刀の一部にみられ，把頭飾りと何らかの関係が想定される。

目釘孔は，茎と把木を固定するときに，目釘を通すための孔である。今回対象とした刀では，1個のみの例が14振と最も多く，次いで2個の例が4例，3個の例が1例である。2個の例のうち，笊内横穴群26号A刀では，目釘どうしが近接しているために，機能的には1個の例と同じである。また郭内横穴群4号B刀では，茎尻の目釘孔が欠損して用をなさなくなったあとに造られていることから同様に1個の例と同じである。

目釘孔が1個のみの刀では，茎尻もしくはそれよりやや内側に目釘孔が位置し，区近くに穿たれた例はない。また茎尻に穿たれた刀では，郭内横穴群3号A刀のように鵐目状を呈する例がある。2個の刀では，茎尻と区からやや内側に寄っている刀と，茎の中央部と茎尻に穿たれている刀がある。3個の例では，茎尻と鐔近くに穿たれ，さらに中央部にも穿たれている。

木装刀では，金属製鋲が用いられないために，茎と把木を固定するには2個の目釘孔

が必要となるが，金属製鍔が用いられると把元がこれによって固定されるので，1個の目釘孔で足るようになる。

把とその付属部品について

集成した刀に装された鍔は，内部に把木と茎を包む造りであり，いわゆる後の日本刀とは構造が異なっている。したがって，呼称も把縁金具，把鍔などといわれる場合もあるが，この研究ノートでは着装位置と用途から鍔とする。鍔は区と鐔の間に装されて把を固定し，鞘口に呑み込まれて鞘走りを防ぐ役をする金具である。

対象とした鍔は，形態から2種類に分けることができた。a型は，鉄板を折り曲げて筒状にしたものである。断面形は，棟方がやや広い倒卵形を呈するものや楕円形，さらに偏平な楕円形を呈するものがある。この種の鍔は片区のみの大刀に多く用いられる。両区の例では神成横穴群B区10号A刀と郭内横穴群7号B刀などがある。

b型は，区に接する縁を内側に折り曲げて，把木の堰板としている。材質は鉄地のもの，鉄地に銀貼りを行ったもの，金銅製のものがある。鉄地はすべて鍛造である。銅地の鍔の成形法は不明である。この型の鍔は両区の刀にのみ装されている。

鐔は，形態から板鐔と喰み出し鐔に分かれる。板鐔は，すべて鍔に接して装され，中心孔には茎と把木が貫通している。形態は，棟方が大きく丸みを有し，刃方がやや突き出た倒卵形を呈している。中心孔は，鍔とほぼ相似形を呈しひと回り小さくなっている。断面形は，長方形を呈するもの(笊内横穴群6号A刀)や，縁のやや広い長台形を呈するもの(郭内横穴群7号B刀)などがある。この他に郭内横穴群7号A刀では，中心孔の部分を表から鍔側へ斜めに削っている。装飾的要素としては，平に台形の窓を6個あるいは8個開けた例や，縁を覆輪状に高まりをもたせた例(郭内横穴群7号A刀)がある。また白河観音山横穴群からは，鐔の棟方にいわゆる手貫紐を通す孔を左右に穿った例がある。これらの板鐔は，郭内横穴群7号A刀が金銅製である以外はすべて鉄製鍛造である。

喰み出し鐔は，平の幅が狭く把からわずかに突出した造りである。構造からみると，中心孔が広く茎との間に把木が挿入されて鍔まで到っているものと，中心孔が小さく茎に直接装されているものがある。前者の形状は，棟方に広い倒卵形もしくは楕円形を呈したリング状である。材質には，銅地に銀を貼ったもの，金銅製，鉄地に銀を貼り付けたものなどがある。飾り大刀にb型鍔とともに多く用いられている。後者は楕円形を呈し，鉄製

鍛造である。

把頭飾りには，圭頭状を呈する金銅製の金具を用いた白河観音山横穴群3号A刀，七軒横穴群1号A刀と，円形を呈する鉄製鍛造の郭内横穴群8号A刀がある。白河観音山横穴群3号A刀では，把木の平に金箔を貼り，その上に漆が塗られ，さらに金製の飾り板が装されている。郭内横穴群8号A刀の把頭飾りには平を貫いて鉄釘が残っている。

把に用いられた責金には，楕円形を呈するリング状の笊内横穴群23号A刀，白河観音山横穴出土と，偏平な筒状を呈する笊内横穴群26号A刀がある。笊内横穴群23号A刀では，把頭近くの茎に付着して残り，位置から推定して茎と把木を固定したと考えられる。白河観音山横穴出土例では鐔表に錆着していた。笊内横穴群26号A刀では，鐔が把木の堰となっているために，この金具を用いて把木と茎を固定している。

把間の拵については，白河観音山横穴群3号D刀に刻み目を入れた山形の銀線が巻かれていたのと，笊内横穴群6号B刀では5巻き一組の紐を巻き，その上に漆を塗った例がある。この他の刀については不明である。

把木は，朽ちて錆の浸みた木質となり完全に残る例はなかったが，区と茎の形状から2つの形態が想定される。区は小さく直に落した両区で茎に大きな偏りのない刀では，把木は二枚合わせである。白河観音山横穴群3号A刀では，把木のうち把頭部分が残っていた。それによると把木の内側は茎が納まるように溝を刳られている。また七軒横穴群1号A刀では，鋒の内部に二枚合わせの把木が残っている。把間の形状は，笊内横穴群6号B刀では把の上に塗られた漆から，棟方と刃方が平行する形態であったことがわかる。

棟区がなく刃区が大きく発達し，茎が棟方に偏った刀では，a型鋒が用いられている。このために棟方と鋒とが接し，茎の棟方は把木から露出する。また把も全体的に棟方に偏り，刃方は内弯する形態が想定される。この場合には後述するように栃木県七廻り鏡塚古墳などから出土した大刀の伝統を受けて，把木は棟方に茎を納める溝を刳った一本造りであろう。把の断面形は，鐔の中心孔の形状や，責金，目釘の長さから推定すると，円形に近い形態から，倒卵形，偏平な楕円形を呈するものなどが想定される。

この他に，泉崎観音山北横穴群3号A刀では，茎に把木を装する目釘孔がみられないことから把木を用いずに茎をそのまま把とした刀である。いわゆる蕨手刀と呼ばれ，奈良時代から平安時代にかけて東国に偏在する刀である。

鞘とその付属部品について

責金は，白河観音山横穴群３号Ａ刀と七軒横穴群１号Ａ刀に装されたと推定される２個が残っている。いずれも銅地に金メッキが施されている。形態は，棟方が広く刃方がやや突き出した倒卵形を呈し，断面形はカマボコ形である。白河観音山横穴群３号Ａ刀では，平の一方が外側に突出している。このような責金具は鞘口金具と近接して用いられ，垂下用のリング状金具を伴うことが多いが，この例では垂下用金具もなく，これを装するための切り込みも鞘口金具にはみられない。

足金物の装された刀は３振である。白河観音山横穴群３号Ｄ刀では，楕円形を呈するリング状の身部の頂点に円形の小さな紐通しを付けている。身部の断面形はカマボコ状を呈している。材質は銅地金に銀箔を貼り付けたものである。一の足金物は鞘口近くに位置し，二の足金物とは10.5㎝離れている。また足間には漆が塗られている。

笊内横穴群６号Ｂ刀では，銅板を用いて倒卵形の身部を作り，頂部に小さな紐通しを付けている。材質は銅地に銀箔を貼り付けたものである。一の足金物は鞘口金具に接して装され，二の足金物とは15.0㎝離れている。

笊内横穴群26号Ａ刀では，鉄製の針金を「８」字状に折り曲げて足金物としている。偏平な身部と較べて紐通しはやや大きい。一の足金物は鞘口金具から離れて装され，足間の長さは15.5㎝である。

鞘口金具は５振の大刀に装されていた。銅地に金メッキを施された白河観音山横穴群３号Ａ刀など３例は，すべてｂ型鯉を呑み込んで鐔と合わさっている。つまり鞘木の端を締め固め，鞘口の下は鯉室となっている。笊内横穴群26号Ａ刀では，鯉は用いられずに偏平な鉄製の鞘口金具と鐔がそのまま接している。鞘木は，鞘口金具の内側全体に及んでいたと推定される。笊内横穴群23号Ａ刀では，リング状を呈する金具を佩表で「H」状に連結させ，その連結部分を外側へ突出させている。材質は銅地に銀箔を貼り付けたものである。突出部の内側に紐を通して垂下したと考えられる。同様な金具は，群馬県八幡観音塚古墳から出土している。

県南地方から出土した鞘尻金具のうち図示したものは３例である。郭内横穴群７号Ａ刀では，長い筒状を呈し，内部に鞘木が挿入され，元を責金具で約している。尻は丸い。白河観音山横穴群から出土した例では，同じく筒状を呈するが，尻は平たく，長さも短か

い。材質は鉄製である。同様の金具は笊内横穴群44号横穴からも出土している。ただしこの例では尻から釘が打ち込まれていた。笊内横穴群26号A刀では，鉄材を折り曲げて覆輪状にし，元を責金具で約している。

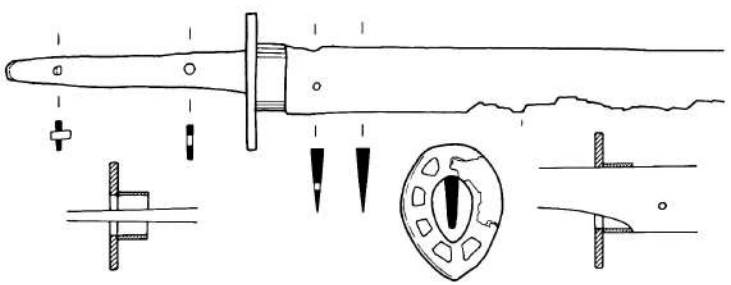
鞘木は，刀身に付着して部分的に残っていたが，完全な状態で残った例はなかった。部分的な構造の明らかな例では，郭内横穴群7号A刀がある。鞘尻金具の内部からは二枚合わせの鞘木が出土している。他の刀の鞘木もこのような二枚合わせであろう。断面形は，鎺や足金物などの付属部品から推定すると，楕円形や倒卵形を基調としていた。厚さは，付属部品の装されない鞘ほど厚く，鞘口金具や鞘尻金具などの揃っている鞘ほど薄く作られていた。笊内横穴群26号A刀は，鞘口金具や足金物，鞘尻金具に加えて，鞘木を布で包み，さらに漆を用いて固めた極めて薄い造りである。

3　鉄刀の分類と群設定

鉄刀は，前節で述べた各構成要素を組み合わせて，一振の刀となる。しかしここでは，この研究ノートの視点とした把の構造という点から分類を行いたい。

I　群　刀（挿図33）

把には鉄製の鐔と鎺が用いられている。茎は棟方に偏って延び，平は狭い。区は刃区が大きく発達している。したがって把木は，棟方に茎を納める溝を刳った一本造りが想定さ



第33図　I群刀概念図

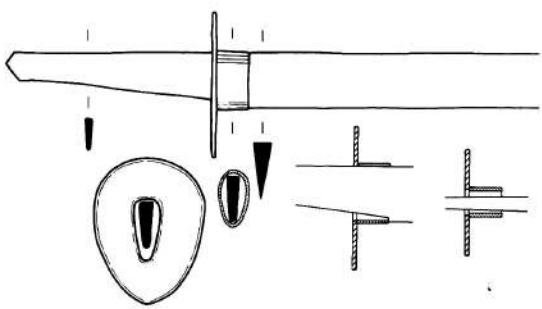
れる。把木の元を，鐔の中心孔を通して鏃下まで挿入させ，目釘を用いて茎と固定させた構造である。

把間の形態は，茎の偏りとあわせて刃方が絞られて内弯し，断面形は目釘の長さや鏃の形状から円形に近い形を呈していたと推定される。

把以外の特徴では，刀身が平棟平造り，フクラ切先であること，足金物や責金具などが用いられないという共通点をもっている。

Ⅱ　群　刀（挿図34）

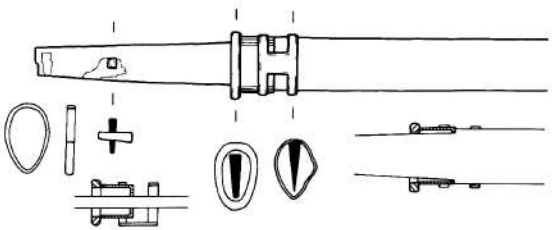
区は，刃区のみを小さく直に落した片区である。茎の形状は，区側の平が広く，茎尻に向って軽い直線的な絞りがみられる。把元には，鉄製の板鐔と鏃が用いられている。鐔の中心孔は偏平な楕円形を呈し，それに伴って鏃も同様な断面形となる。この場合茎との間には極めて狭い空間しか残らない。したがって把木は二枚合わせが想定され，一本造りでは無理が生じる。また棟方に区がないために，茎の棟方は把木から露出することになる。目釘孔は，茎尻近くに想定されよう。



第 34 図　Ⅱ群刀概念図

Ⅲ　群　刀（挿図35）

区の形態は，小さく直に落した両区となり，鏃は安定して区と接する。茎の偏りはあまりみられず，全体に平が広くなる。したがって，把木は平の内側に茎を納める溝を刳った二枚合わせが想定される。つまり茎を左右の把木で包み，元を鏃で約し，目釘を用いて

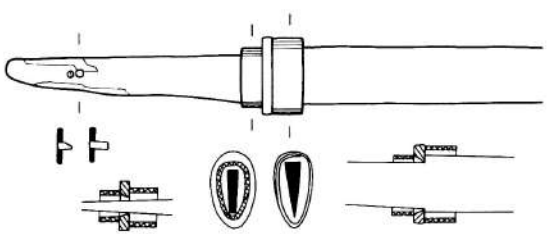


第 35 図　Ⅲ群刀概念図

固定した構造である。形態的には，把間の絞りがみられなくなる。断面形は偏平な楕円形となる。

Ⅳ　群　刀（挿図 36）

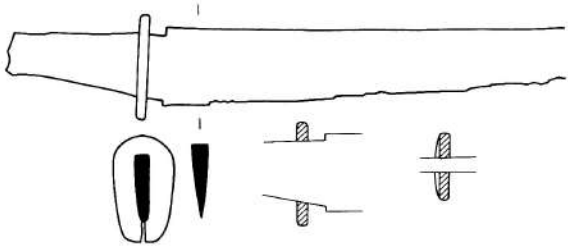
Ⅲ群刀と同じく，小さく直に落した両区と，平の広い偏りのない茎である。しかし鎺を装さず，代って把縁金具が用いられる。また鐔は直接に区と茎に接して装される。把は，茎を納める溝を平に刳った把木を左右から合わせて茎を包み，筒状の把縁金具で約し，目釘で固定した構造となる。断面形は偏平な楕円形となる。



第 36 図　Ⅳ群刀概念図

Ⅴ　群　刀（挿図 37）

茎に接して鐔が装されているが，目釘孔はなく，把木は用いられない。したがって茎をそのまま把とした刀である。泉崎観音山北横穴群 3 号A刀のみである。



第 37 図　V 群刀概念図

4　古墳時代鉄刀の概観

古墳時代の鉄刀には，その刀装具から木装刀，鹿角装刀，いわゆる金属装刀と呼ばれる刀がある。木装刀と鹿角装刀は，形態から日本的な刀とされている。金属装刀はさらに把に環を装した外来的な環刀と，今回取り上げた鉄刀のごとく主要な刀装具に金属を用いた刀がある。この節では，木装刀・鹿角装刀・環刀について概観し，この研究ノートの対象とした鉄刀と比較したい。

木装刀・鹿角装刀について

木装刀は，基本的な刀装具の材質に「木」を用いたものをさし，古墳時代前期にはすでに広く出現していた。しかし刀装具自体の残存する例が少なく，したがって研究もあまり進んでいない。古墳時代前期の例では，栃木県大桝塚古墳(前沢：1977)と熊本県向野田古墳(宇土市：1978)から出土した大刀が旧状をよく伝え，しかも共通した特徴を示している。刀身は，いずれも平棟平造り，フクラ切先である。区の形状は不明であるが，この部分に平らな木製の鐔状刀装具がある。それに接して棟側に茎を納める溝を刳った一本造りの把木を装し，その上を布で平巻きに巻いている。把は全体に棟方へ偏っているが把間に絞りはみられない。

中期に属する例では，京都府産土山古墳(梅原：1955)から出土した大刀があげられよう。この刀では，把木が鐔・把間・把頭の3個の部分に分割して造られている。把木の本体は，前期の例と同じく棟に溝を刳った一本造りである。把頭は大きな槌状を呈し，黒漆が塗ら

れている。鋼状刀装具は二枚合わせで造られ，鞘に呑み込まれている。鞘木は，二枚合わせの本体に，鞘口と鞘尻とを別の木で造り，柄を作って組み合わせた構造である。

後期に属する例では，栃木県七廻り鏡塚(大和久：1974)から良好な資料が2振出土している。形状は産土山古墳から出土した刀とほぼ同じであるが，把は一本造り，鞘は二枚合わせて作られ，把頭・鞘口・鞘尻は分割組み合わせではない。2振の刀には，把と鞘口の接し方に差異が認められ，舟形木棺から出土した大刀の鞘口は合せ口であるが，組み合わせ木棺の大刀は鋼状の刀装具を用いた呑み口式である。

数少ない例ではあるが，茎が棟方に偏る木装の刀では古墳時代を通して把木は背に茎を納める溝を刳る一本造りである。茎もこれに合わせて棟方に偏り，目釘孔は2個を基本としている。また，区はそれほど丁寧には作られていない。

鹿角装刀は，木製の把木，鞘木に，鹿角で作った刀装具を組み合わせた刀である。鹿角で作られた部分は，把頭，把縁，鞘口，鞘尻と，産土山古墳の木装刀において別に作った部分とほぼ同じである。鹿角装刀については，梅原末治(梅原：1920)，末永雅雄(末永：1941)などにより研究が進められ，近年小林行雄(小林：1976)により，鹿角装具の着装部位が確定された。この結果，主として把縁の棟方に突出部の有無から，有るものを第一類とし，認められないものを第二類とした。さらに第二類の特徴として，剣よりも刀に多くみられること，把間の棟方が直線であるが，刃方を絞って内弯し，把頭に向かって太く作られ，この部分に太い緒で纏き固めることなどをあげ，第二類の方が時間的に新しくなる可能性を指摘している。

鹿角装具は構造という点からみると，把木や鞘木に丈夫な鹿角と組み合わせてより強固な造りとする部品である。産土山古墳から出土した木装刀と基本構造に大きな差異は認められない。

また従来，九州地方の横穴や石棺に彫刻された刀の図をもって鹿角装刀を表わしたものとされていたが，この刀は，七廻り鏡塚から出土した木装刀と把・鞘の形状がほぼ同じ特徴を示している。さらに東国における埴輪の中に把頭を著しく大きくした大刀埴輪を数多くみかける。このことは，七廻り鏡塚古墳から出土した形と構造の把頭が，古墳時代後期の九州から東国まで広く分布していたことを推定させる。

福島県においても，参考図に示した玉川村中古墳の鉄刀と，七廻り鏡塚古墳出土刀の鉄

刀がほぼ同じ特徴を有することから同様な木装の刀装具が装された刀が想定されよう。

環刀について

環刀は，把頭がトーラス状を呈する刀をいう。環の内部に装飾の施されていない素環刀と，竜や鳳その他の図象による装飾が施された飾り環刀がある。このうち前者は，弥生時代の後期から古墳時代前期にかけて特徴的な刀であり，今回対象とした刀とは直接係りをもたないためにふれないこととする。

飾り環刀は，把頭以外にも，金，銀，銅などを用いた刀装具で覆われ，それぞれに竜や鳳その他の図象が描かれている。近年，町田章(町田：1976)によって佩用のしかたから6世紀型と7世紀型に分けられ，さらに6世紀型は環の構造的差異によって2種に分けている。この分類をふまえて，図象の変遷から編年と意義付けが行われている。

また新谷武夫(新谷：1977)，穴沢咏光・馬目順一(穴沢・馬目：1978)，新野泉(新野：1982)などによっても研究が進められているが，いずれも主たる観点は図象の様式的変遷におかれていた。

ここでは町田の分類にしたがい，把の構造的特徴を簡単にまとめておきたい。6世紀型Ⅰ式刀は鉄地貼金の環と茎とが一体に作られている。把端には，交竜紋様を打ち出した責金具を装している。区に接して鍔を用いて把木を覆い，その部分は鞘口金具に呑み込まれている。把間には針金を葛纏きに巻き，形態的には，棟方と刃方が平行して偏りはみられない。把木は，茎を左右から挟む二枚合わせであろう。鞘には，垂下用に釣手が設けられている。

6世紀型Ⅱ式刀は，外見からは，把端の責金具が環にまでおよばないことと，責金具に浮彫りふうの紋様が施されない刀が出現することによってⅠ式刀と分けられる。構造的には，環が銅製の鋳造品となり，茎から分離する。この結果茎は短かくなり，小さく直に落した両区と，茎端に穿った目釘孔が1個のみの刀となる。把木は鍔と目釘で固定した二枚合わせである。環は舌を把木の端から挿入し，把木と舌をつらねて目釘で固定され，茎から完全に分離する。

7世紀型環刀の把の基本構造は，6世紀型Ⅱ式と同じである。しかし形態的には，図象の抽象化が著しく，また必要以上に長大化し脆弱化する。さらに把には喰み出し鐔が用いられ，鞘には横位に佩用するための足金物と，断面形がカマボコ形を呈する責金具が

用いられる。

飾り環刀と日本的な木装・鹿角装刀との把の構造的な違いは，前者が金属製の鎺を用い把木が二枚合わせであるのに対して，後者は把木の棟方に茎を納める溝を刳り込んだ一本造りであることである。形態的にも，飾り環刀の把間は絞りはなく，したがって茎に偏りがないのに対して，木装・鹿角装刀では，刃方に絞りがみられ，茎も棟方に大きく偏っている。この他，刀装具・装飾図象・刀身の長さ・平の幅などにも著しい相異がみられる。

古墳時代前期から後期の刀には，このように日本的な刀と外来的な刀が併存していたといえるであろう。

5　鉄刀の意義と年代

Ⅰ群刀の意義と年代

県南地方の横穴から出土した刀を特徴づける構造は，金属製の鎺と鐔が着装されることである。鐔は，日本的な刀において，重要な構成要素とされている。すでに述べたように古墳時代の前期・中期では，木や鹿角によって鐔と類似する刀装具が用いられていた。しかし材質的に鐔としては不安が残る。これが鉄製の鐔に取って代ったことは，日本刀の発達の中で重要なことと言えよう。鉄製鎺は，この鉄製鐔を着装するために，従来から外来的な刀において，把を固定していた鎺を新たに取り入れて用いたと推定される。

Ⅰ群刀の刀身は，従来の木装刀の形態を受け継いでいる。とくに茎は全体に棟方へ偏って刃区が大きく発達しているが，区は鎺を受ける形状をなさない刀が多い。刀身の大きさもⅢ群刀などと較べて，ひとまわり大きく造られている。また刀装具は鎺と鐔のみに鉄が使用され，把頭や把間，鞘などには金属製の刀装具は用いられていない。したがって刀の形状は，鐔以外は外見的に木装刀とあまり変化はなかったと推定される。

鉄製鐔の初現について，関東地方では漠然と6世紀の後半頃という年代(杉山：1983)が与えられ，詳しい研究は進んでいない。近畿地方でも同様であるが，ここでは須恵器編年の最も進んでいる近畿地方を中心に鉄製板鐔の定型化について少しふれてみる。

近畿地方では，兵庫県宮山古墳(松本他：1973)から初期須恵器とともに金属製鐔の装された環刀が出土している。しかし鐔の形態は，トーラス状を呈して鎺も伴わず系譜的にも

後の時代へは続いていない。次に，大阪府陶器千塚13号墳や，土山古墳（森：1956）からは，森編年Ⅱ型式（MT15式併行）の須恵器とともに鉄製鐔を装した大刀が出土している。また岡山県中宮古墳群15号墳（近藤：1954）からは，鏃状金具を把に装した大刀も出土している。しかし一般にこの時期の古墳から鉄製刀装具を装した日本的な刀の出土は少ない。たとえば奈良県石光山古墳群（白石：1976）では，古墳群を構成する約半数の50基の発掘調査が行われ，刀は森編年Ⅱ型式を中心とする時期に8振出土している。しかしいずれも木装もしくは鹿角装であった。奈良県新沢千塚古墳群（末永：1981）においても，Ⅰ群刀はTK10型式に併行する122号墳まで出現していない。

近畿地方において，定型化したⅠ群刀の出土例が増すのは，6世紀後半のTK10型式からTK43型式にかけてである。参考資料の烏土塚古墳（伊達：1972）から出土した大刀は，この時期を代表する刀であろう。把頭が失われているがほぼその全容をうかがうことができる。この時期では，大阪府山畑古墳群（水野：1975）でみられるように，従来からの木装刀とⅠ群刀が混在した状況を呈している。

県南地方の横穴から出土したⅠ群刀は，木装刀とはあまり伴わず，むしろⅢ群刀と伴うことが多い。したがって年代的には，近畿地方より若干新しいものと考えられよう。

Ⅲ群刀の意義と年代

Ⅲ群刀の区は，棟区，刃区ともに小さく落した両区となり，鏃は安定する。また茎の偏りもなくなり，把間の絞りはほとんどみられなくなる。この結果Ⅲ群刀では古墳時代前期から続いた日本的な把の構造が失われ，基本的な構造は7世紀型環刀に統合される。これとともに喰み出し鐔，足金物，責金，鞘尻金具などを装した刀が出現し，装飾・佩用の点からも新たな刀が出現する。

今回対象とした鉄刀のなかで，Ⅲ群刀は18例ともっとも多数を占めている。構造的にみると，神成横穴群B区13号A刀や七軒横穴群1号B刀・C刀などは，目釘の数と位置から木装刀の要素を残す刀である。これにたいして，目釘が茎尻近くに1個のみ設けられた刀は，定型化したⅢ群刀といえることができよう。この定型化にしたがって刀装具も変化するが，鏃の断面形や鐔の中心孔などが薄くなることに示されるように，把や鞘もスマートになる。Ⅱ群刀はこの過程と前型式の伝統のなかで生み出された刀と考えられる。

郭内横穴群7号A刀には，金銅製刀装具が用いられているが把頭は失われている。板鐔

や鞘尻金具の形状からみると，圭頭大刀か頭椎大刀と推定される。この刀を構造的にみると，茎の形状は刃区は大きく茎も全体に棟方に偏り，また目釘も小さく茎尻からはなれて平の中程に打たれている。したがって頭椎大刀であった可能性が高い。

白河観音山横穴群3号A刀は，圭頭大刀のなかでも把頭が覆輪状の刀である。この時期の飾り大刀は，頭椎大刀や7世紀型環刀のように過飾的になり実用に耐えないものが多い。この圭頭大刀は華美ではあるが丈夫な造りの刀である。笊内横穴群6号B刀と同23号A刀はそれをさらに実用的に進めた刀である。つまり茎の平が広くなり目釘も機能的な位置に定まる。鞘にも鞘口金具や足金物を用いることにより，断面の厚さは以前の刀と較べて薄くなる。これにしたがって把や鍔も偏平な楕円形となる。

全長が50㎝に満たない刀は，県南地方ではⅢ群刀のほかにV群とした蕨手刀のみであり，それ以前のⅠ群刀ではあまり出土していない。

Ⅲ群刀と同様な構造を有する刀を近畿地方から求めると，このころを前後して近畿地方の群集墳の造営が衰退する時期にあたり，良好な資料はきわめて少ない。わずかに，京都府桃谷古墳(樋口：1961)や同湯舟板2号墳(奥村：1982)などから，TK209型式ないしTK217型式の須恵器とともに圭頭大刀が出土した例や，大阪府高槻市塚脇古墳群12号墳(西谷：1965)から白河市観音山横穴群3号D刀と類似する刀が出土した例がある。また笊内横穴群23号B刀と近似する刀は，7世紀後半に比定される和歌山県岩内山古墳から出土している。したがってⅢ群刀の初現は7世紀前半から中葉にかけてと推定される。

Ⅳ群刀の意義と年代

Ⅳ群刀の外形は，笊内横穴群6号B刀と近似しているが，把と鞘の構造は大きく異なっている。把では，鐔が直接区と茎に接して装され，鍔が用いられなくなる。この結果把木を固定するために鐔表に筒状の把縁金具が用いられている。この変化は鞘の構造的変化に求められよう。つまりⅢ群刀から続く鞘を薄く作る傾向が，鞘口金具・足金物・鞘尻金具の定型化とともに，鞘木自体を布で包みそれに漆を塗ることによって高められた。そのため極めて薄い鞘が出来上がり，もはや鍔を納める空間が失われたためと考えられる。

Ⅳ群刀における鞘の構造は，正倉院のいわゆる黒作刀にみられ，ここでは布の代りに馬皮が用いられている。また鞘尻金具の形状にⅣ群刀と同様な刀がみられる。しかし正倉院刀では，把の基本構造はⅢ群刀を発展させたものが主流を占めている。つまり区と鐔の間

には偏平な金属製鋺が装され把木の削り出しは著しく少なくなるが，依然として鋺下まで把木が至る刀が主流となっている。

Ⅳ群刀の年代は，32図に示した須恵器の年代と正倉院刀との共通点から８世紀代と推定される。Ⅴ群刀は，Ⅳ群刀をさらに改良して茎をそのまま把とする刀であり，年代的にはⅣ群刀と併行ないしやや遅れると推定される。

８世紀代におけるⅣ群刀・Ⅴ群刀と正倉院刀との基本構造の差は，中央の国家の刀と地方の有力者層の刀という差異を考慮しなくてはならない。しかし，Ⅴ群刀つまり蕨手刀の分布が東国に偏在するという傾向から当時における刀の地域差とも考えられる。

この県南地方も含めた東国においても刀の製造が行われ，それが独自の構造を産み出すまでに社会的発展があったことを推定されよう。

6　県南地方の横穴における鉄刀

これまでに行った分析に基づいて，各群の刀が県南地方の横穴のなかでどのようなあり方で出土したかをまとめ，あわせて各横穴の造営期間について述べる。

白河市観音山横穴群では，４基の横穴が発掘され８振の刀が出土した。このうち５例までがⅠ群とそれに準ずる刀であった。県南地方でⅠ群刀が多数を占める唯一の横穴群である。残りの３振はすべてⅢ群に属する刀である。このうち２振はいわゆる飾り刀であった。刀の他には馬具類，鉄鏃，装身具などが出土し，土器類ではＴＫ217型式に併行する須恵器が３号横穴の前庭部から出土している。

郭内横穴群では，10基の横穴が発掘され，このうち３基から６振の刀が出土している。Ⅲ群刀が５振を占め，残る１振はⅠ群刀であった。刀が出土した横穴は，この横穴群のなかでは比較的古い時期に属し，大きさもひと回り大きな整った横穴であった。これらの刀とともに馬具，装身具なども出土している。土器類では，破片となって閉塞石に混じって，前庭部に供献された状態で，ＴＫ209型式～ＴＫ217型式に併行する土器が出土している。しかし新しい時期に属すると推定される退化した構造の小さな横穴からは，遺物はほとんど出土しなかった。

笊内横穴群では，群を構成するすべての横穴が発掘され，７基の横穴から９振の刀が出土

した。このうちⅢ群刀は6振と多数を占め，Ⅱ群刀，Ⅳ群刀，その他，各1振である。刀が出土した横穴は，この横穴群が造営を開始された直後からその盛期にかけて造られた時期のものである。刀の他には，玄室からは馬具，装身具が出土し，前庭部からは土器類が出土している。土器類は栗囲式の新しい時期に併行するものから，国分寺下層式に併行する時期にかけてのものが大半を占めている。刀など玄室から出土した遺物と明確な供伴とはいえないが，全体的な遺物の様相からほぼこの時期に比定される。この中で26号横穴の玄室からは，破片ではあるが国分寺下層式に併行する須恵器とⅣ群刀が出土しており，この刀の年代を示すものと理解したい。笊内横穴群でも，郭内横穴群と同じく，時期が新しくなるに従って，横穴から遺物があまり出土しなくなる傾向がみられた。

泉崎・七軒横穴群では，9基の横穴から合わせて8振の刀が出土している。このうち7振がⅢ群刀である。残り1振は写真からみるとⅠ群刀の可能性が高い。この他には，刀子，鉄鏃，装身具などが出土している。土器類では，TK43型式に併行する須恵器と，栗囲式～国分寺下層式に併行する土師器が出土している。しかしその出土状態は不明である。

神成横穴群では，20基近い横穴が発掘され，4振の大刀が出土している。すべてⅢ群に属する刀である。この他には，刀子，鉄鏃，装身具が若干出土している。土器類は，栗囲式と併行する時期の須恵器と土師器が出土している。

泉崎観音山北横穴群では，7基の横穴が発掘され，3号横穴からはⅤ群刀が出土している。この他には刀子と須恵器片が出土しているにすぎない。須恵器片は4号横穴から出土し，国分寺下層式に併行する時期である。またこの横穴の形態は3号横穴とほぼ同じで，3号横穴から出土した刀は，国分寺下層式に併行する年代を推定される。観音山北横穴群は，南に隣接する観音山横穴群の支群である。その中でも新しい時期の横穴が集中して造られたと推定され，かなり退化した横穴で構成されていた。

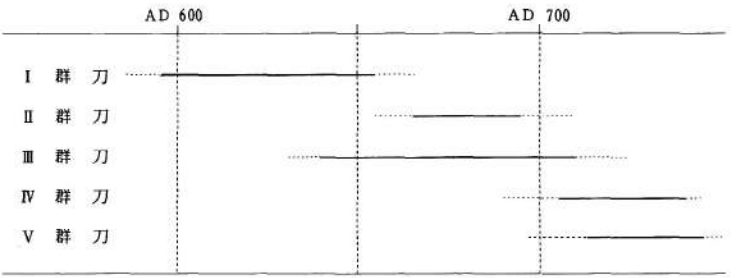
以上から，県南地方の横穴では，刀は馬具や装身具などとともに玄室内に副葬された状態で出土する。また各群の中では，Ⅲ群刀が最も多く出土し，この刀が横穴盛行時に用いられた刀であることを示している。概ね，栗囲式と併行する7世紀後半を中心とする年代である。このなかでⅠ群刀の割合が高い白河市観音山横穴群は，横穴の造営開始時期がやや古い特徴を示している。また郭内横穴群も出土した須恵器から7世紀前半以降に比定される。Ⅳ群刀を含む笊内横穴群は出土した土器からやや新しい特徴を示し，7世紀末葉か

ら8世紀中葉に近い年代が推定される。

つまり県南地域の各横穴群から出土した各群の刀の割合は横穴群の造営開始時期の差をあらわすと考えられる。そのなかでも，関和久遺跡を中心とした白河市や泉崎村近辺の横穴群が他と比べて相対的にやや古い傾向がある。また造営の終末は，いずれの横穴も国分寺下層式に併行する時期を著しくくだることはない。

7 結　　語

前節までの作業から，茎の形態と把の構造には密接な関係があり，把の構造や形態の変化を反映して茎の形態も変化することを明らかにした。この結果，県南地方の横穴出土鉄刀をⅠ群からⅤ群に分類し，7世紀前半から8世紀中ごろにかけての年代を想定した。



つまり，県南地方で横穴が造られた150年の間に，刀の構造は三回の大きな変化を経て，新しい構造へ発展してゆく。第一段階は，Ⅰ群刀に始まる**鉄製板鐔と鉄製鎺**の出現である。キリスト教暦の600年前後の年代が想定される。第二段階は，両区を有し偏りのない茎に二枚合わせの把木が用いられるⅢ群刀の出現である。7世紀の中頃近くである。

第三段階は，8世紀の前半頃に出現するⅣ群刀・Ⅴ群刀である。これらの刀では金属製鎺が再び装されなくなり，鐔が区と茎に直接装され，また把木も次第に用いられなくなる。このような把は，後の毛抜刀などに採用された把の基本構造の先がけとなっている。

7世紀代は，律令国家の成立という時代背景のなかでさまざまな文物が大きく発展した時期である。この研究ノートで対象とした鉄刀の変遷もそのなかで生じたひとつである。

その結果鉄刀は，基本構造ばかりでなく形態や装飾，佩用などにわたって大きく変化し，旧来の伝統をぬぐい去って唐風の律令官人が佩くにふさわしい大刀となった。

表　2．県南地方の横穴から出土した鉄刀の一覧表

	刀身					茎						鍔	縁	分類
	長さ	重ね	平幅	造り	切先	長さ	重ね	平幅	目釘孔	区	備り			
七軒横穴群														
1号A刀	62.1	0.7	3.0	平造り	カマス？	14.1	0.5	1.2	1	両		b	喰み出し	Ⅲ
1号B刀	68	0.8	2.8	切　刃	フクラ	15.1	0.6	1.4	2	両		a	板	Ⅲ
1号C刀	(48)	0.7	2.6	平造り		(11)	0.5	1.5	(2)	両		b	板	Ⅲ
1号D刀	(40.5)	0.8	2.7	平造り	フクラ？	7.1	0.3	1.2	1	両		b		Ⅲ
白河観音山横穴群														
1号A刀	(60.8)	0.8	2.7	平造り	フクラ	9.2	0.3	1.7	1	両				Ⅲ
2号A刀	72.9	0.7	3.5	平造り	フクラ	14.5	0.3	1.6	2	両	有	b	板	Ⅰ
2号B刀	58.7	0.7	2.9	平造り	フクラ	(9.1)	0.3	1.7	(1)	片	有			
2号C刀	(80.3)	0.7	3.7	平造り		(7.9)			(1)	片	有			Ⅰ
3号A刀	〈66.4〉	〈0.8〉	〈2.8〉	平造り	カマス	〈14.4〉	0.5	1.8	1	〈両〉		〈b〉	喰み出し	Ⅲ
3号B刀	82.2	0.7	3.5	平造り	フクラ	(8.9)	0.4	1.5	(1)	片	有	a		Ⅰ
3号C刀	70.5	0.8	3.2	平造り	フクラ	15.3	0.5	1.2	2	〈両〉	有	〈a〉		Ⅰ
3号D刀	(35.5)	0.8	2.7	平造り		(8.5)	0.4	1.5	(1)	〈両〉	有	b	喰み出し	Ⅲ
郭内横穴群														
4号A刀	65	0.8	3.2	平造り	フクラ	14.5	0.3	1.3	1	片	有	a	板	Ⅰ
4号B刀	44	0.8	3.0	平造り	フクラ	5.9	0.4	1.7	1	両		b		Ⅲ
4号C刀	41.2	0.8	2.8	平造り	フクラ	7.8	0.3	1.5	1	両	有	b		Ⅲ
7号A刀	78	0.9	3.2	平造り	フクラ	12.4	0.6	1.6	1	両	有	b	板	Ⅲ
7号B刀	75.8	0.9	3.4	平造り	フクラ	12.5	0.6	1.7	1	両		a	板	Ⅲ
8号A刀	49.6	1.0	2.8	平造り	フクラ	8.3	0.6	1.5	1	両		b		Ⅲ
笊内古墳群														
1号A刀	78.8	0.6	3.1	平造り	フクラ	(3.3)	0.5	1.5		片	有			
6号A刀	(68.1)	0.9	2.9	平造り	カマス	(12.8)	0.4	1.7		片	有	a	板	Ⅱ
6号B刀	63.6	0.8	3.0	平造り	カマス	13.2	0.5	2.1	1	両		b	喰み出し	Ⅲ
6号C刀	66.8	0.7	2.9	平造り	フクラ	(6.0)	0.4	1.6		両		b		Ⅲ
23号A刀	61.2	0.6	2.8	平造り	カマス	12.8	0.5	1.8	1	両		b	喰み出し	Ⅲ
26号A刀	67.5	0.8	3.0	平造り	カマス	14.1	0.4	1.9	2	両			喰み出し	Ⅳ
34号A刀	(37.2)	0.9	3.2	平造り		10.5	0.3	1.7	1	両		a		Ⅲ
神成横穴群														
10号A刀	76	0.9	3.6	平造り	フクラ	15.9	0.6	2.0	1	両		a		Ⅲ
13号A刀	(65)	0.7	3.0	平造り		13.1	0.5	1.8	3	両		b		Ⅲ
泉崎観音山北横穴群														
3号A刀	25.8	0.9	4.1	平造り	フクラ	(7.1)	0.9	2.5	0	両	有	無	喰み出し	Ⅴ

単位：cm　　（）：現存　　〈 〉：推定

参考文献目録

穴沢咊光 馬目順一　1978　「東北地方出土の環刀大刀の諸問題」『福島考古』第19号　福島

穴沢咊光 馬目順一　1979　「郡山市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』第20号　福島

穴沢咊光 馬目順一　1980　「蟹目釘付鞘尾装具をもつ飾大刀とその系統について」『福島考古』第21号 福島

岩越二郎　1936　「西白河郡烏峠附近の遺跡遺物に就いて」『岩磐史談』第1巻7～9　福島

上田三平　1934　「泉崎横穴」『考古学雑誌』24巻6　東京

宇土市　1978　「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集　熊本

梅原末治　1920　「鹿角製刀装具」『大正六年度古蹟調査報告』 朝鮮総督府　ソウル

梅原末治　1955　「竹野郡竹野産土山古墳の調査」『京都府文化財調査報告』第21冊　京都

梅宮　茂　1973　『白河観音山横穴古墳群』 白河市教育委員会　福島

大和久震平　1974　『七廻り鏡塚古墳』 第一法規　東京

奥村清一郎　1982　「湯舟坂2号墳」『京都府久美浜町文化財調査報告』第6集　久美浜町教育委員会　京都

木本元治　1975　「観音山北横穴群」『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県教育委員会　日本道路公団　福島

桐原　健　1969　「頭椎大刀佩用者の性格」『古代学研究』56　古代学研究会　京都

神林淳雄　1936　「雙脚足金物に就いて」『考古学雑誌』26巻の7　東京

神林淳雄　1938　「古墳時代の鐶付足金物に就いて」『考古学雑誌』28巻の7　東京

神林淳雄　1938　「原史時代剣装弛」『考古学雑誌』28巻の9　東京

神林淳雄　1939　「金銅装大刀と金銅製柄頭」『考古学雑誌』29巻の4　東京

神林淳雄　1940　「銀装大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』30巻の3　東京

小池一之　1965　「阿武隈川中流域の地形」『地理学評論』第38巻8号　日本地理学会　東京

小滝利意　1975　「観音山横穴群」『東北自動車道遺跡調査報告』 福島県教育委員会　日本道路公団　福島

後藤守一　1936　「頭椎大刀について(一)」『考古学雑誌』26巻の6　東京

後藤守一　1936　「頭椎大刀について(二)」『考古学雑誌』26巻の12　東京

後藤守一　1939　「上古時代鉄鏃の年代的研究」『人類学雑誌』第54巻　第4号　東京

小林行雄　1964　『装飾古墳』 平凡社　東京

小林行雄　1976　「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』 平凡社　東京

近藤義郎　1954　「蒜山原」『人類学考古学研究業績』第2冊　岡山大学医学部　岡山

斎藤　忠　1965　「古墳壁画」『日本原始美術』 講談社　東京

斎藤　忠　1973　『日本装飾古墳の研究』 講談社　東京

正倉院事務所　1974　『正倉院の刀剣』 日本経済新聞社　東京

正倉院事務所　1977　『正倉院の大刀外装』 小学館　東京

白石太一郎　1976　「葛城・石光山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊

奈良県立橿原考古学研究所　奈良
新谷武夫　1977　「環状柄頭研究序説」『考古論集』　広島
末永雅雄　1941　『日本上代の武器』　弘文堂　東京
末永雅雄　1981　「新沢千塚古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊　奈良県立橿原考古学研究所　奈良
杉山晋作　1983　「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　国立歴史民俗博物館　千葉
鈴木敬治　1968　「第四紀福島シンポジウム特集」『第四紀総合研究会誌』　第四紀研究会　東京
高橋信一　1980　「治部池横穴墓群」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』　福島県教育委員会　日本国有鉄道　福島
高橋洋子　1976　「装飾古墳における文様の基礎的研究」『福島考古』第17号　福島
伊達宗泰　1972　「烏土塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第27冊　奈良県教育委員会　奈良
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園　京都
玉川一郎　1979　「笊内古墳群」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』　福島県教育委員会　福島県文化センター　福島
俵　国一　1953　『日本刀の科学的研究』　日立評論社　東京
寺島文隆
根本信孝　1981　『郭内横穴墓群』　白河市教育委員会　福島
永山倉造　1975　「梅田横穴群」『東北自動車道遺跡調査報告』　福島県教育委員会　日本道路公団　福島
新野　泉　1982　「京都府下出土の装飾付大刀」『京都考古』第26号　京都
西谷　正　1965　「塚脇古墳群」『高槻市文化財調査報告書』第1冊　高槻市教育委員会　大阪
浜田耕作
梅原末治　1923　「近江国高島郡水尾村鴨の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第8冊　京都大学考古学研究室　京都
樋口隆康　1961　「峰山桃谷古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊　京都
福島県　1964　『福島県史』第6巻　福島
前沢輝政　1977　『山王寺大桝塚古墳』　早稲田大学出版部　東京
増田清一　1980　「金属工芸の展開」『日本古代史講座』4　東京
町田　章　1976　「環刀の系譜」『奈良国立文化財研究所研究論集Ⅲ』　奈良国立文化財研究所　奈良
松本正信
加藤史郎　1973　『宮山古墳第2次発掘調査概報』　姫路市教育委員会　兵庫
水野正好　1975　「山畑古墳群Ⅰ」『東大阪市文化財調査報告』第1冊　東大阪市教育委員会　大阪
森　浩一　1956　「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報9』　日本考古学協会　東京
向坂鋼二　1971　『掛川市宇洞ヶ谷横穴発掘調査報告』　静岡県教育委員会　静岡
矢吹町　1981　『矢吹町史』資料編　矢吹町教育委員会　福島
矢吹町　1981　『矢吹町史』通史編　矢吹町教育委員会　福島
渡辺一雄　1974　『羽山装飾横穴発掘調査概報』　原町市教育委員会　福島

SHICHIKEN FELSGRÄBER

AUSGRABUNGSBERICHT

INHALTSVERZEICHNIS

I. Einleitung 1
1. Lage und Umgebung der Shichiken Felsgräber 1
2. Die Shichiken Felsgräber im historischen Kontext 3

II. Ausgrabungsverlauf 10
1. Verlauf und Organization bis zum Ausgrabungsbeginn 10
2. Ausgrabung und Dokumentation 11

III. Funde und Strukturen der Shichiken Felsgräber 12
1. Die geographische Lage der Gräber 12
2. Felsengrab I 15
3. Felsengrab II 21
4. Zusammenfassung 25

Ergänzung

I. Izumizaki Felsgräber und ihre Funde 28
II. Eisenschwerter aus den Felsgräbern im südlichen Fukushima 43

Abbildungsverzeichnis

Farbtafel	Rückwand und maßstabgetreue Zeichnung des Izumizaki Felsengrabs IV (von Jiro Iwagoe)
Abb. 1	Izumizaki und Shichiken Felsgräber (Luftaufnahme)
	Shichiken Felsgräber
Abb. 2	(1) Blick auf die Shichiken Felsgräber (Fernsicht von Süden)
	(2) Blick auf die Shichiken Felsgräber (Nahsicht von Osten)
Abb. 3	(1) Gräber II und I (von Süden gesehen)
	(2) Gräber II und I (von Südosten gesehen)
Abb. 4	(1) Grab I (von Osten gesehen)
	(2) Grab I (von Norden gesehen)
Abb. 5	(1) Fassade von Grab I (von Osten gesehen)
	(2) Entwässerungsgraben am Eingang von Grab I (von Osten gesehen)
	(3) Totenlager von Grab I (von Süden gesehen)
Abb. 6	(1) Grabkammer von Grab II (vom Eingang gesehen)
	(2) Fassade von Grab II (von oben gesehen)
Abb. 7	Eisenschwerter aus Grab I
Abb. 8	(1) Griff von Schwert A aus Grab I
	(2) Griff von Schwert B aus Grab I
	(3) Griff von Schwert C aus Grab I
	(4) Griff von Schwert D aus Grab I
Abb. 9	(1) Messer und Schwertschmuck aus Grab I
	(2) Keramik aus Grab I
Abb. 10	Gegenstände aus Eisen aus Grab I
	Izumizaki Felsgräber
Abb. 11	(1) Fernsicht auf die Shiroishi-yama Hügelgruppe (von Süden)
	(2) Ansicht der Shiroishi-yama Hügelgruppe von der Jinba Hügelgruppe aus
Abb. 12	(1) Eingänge von Grab III und Grab IV hat Wandmalereien
	(2) Die Eingangskuppel von Grab IV
Abb. 13	(1) Grabkammer von Grab IV. Malerei von Rückwand und Decke
	(2) Grabkammer von Grab IV. Malerei von der Rückwand
Abb. 14	(1) Grabkammer von Grab IV. Malerei von der nördlichen Wand
	(2) Grabkammer von Grab IV. Nalerei von der südlichen Wand
Abb. 15	(1) Funde aus den Izumizaki Felsgräbern
	(2) Ausgräber
Abb. 16	Grabkammer von Grab IV
Abb. 17	(1) Gegenstände aus Eisen (Izumizaki Felsgräber)
	(2) Keramik aus Grab II (Sueki und Hajiki)
Abb. 18	Eisenschwerter (Shirakawa-Kannonyama Felsgräber)

Zusammenfassung

I Einleitung

Der Nordosten Japans wurde füher Mutsu-no-kuni genannt,das bedeutete "das Ende des Wegs" -vom Zentrum aus gesehen.

In diesem Landesteil liegt die Provinz Fukushima an der südlichen Grenze, und der Bezirk wiederum, wo die Shichiken-Kammergräber sind, liegt am Eingang von Mutsu-no-kuni.

Der Bezirk umfaßt den Oberlauf des Abukumagawa ; im Westen, Süden und Osten ist er von Gebirgen umschlossen, öffnet sich nur nach Norden. Im Inneren finden wir eine Hügellandschaft mit Höhenlagen von ca : 300m über dem Meer.

Mehrere kleinere Flüsse haben swischen den Hügeln kleine eingeschnittene Täler und Ebenen gebildet.

Das Klima ist von der geographischen Lage beeinflußt, wir finden also ein Inlandsklima mit großen Temperaturunterschieden und geringen Niederschlagsmengen.

Die Flora ist in ihrer Erscheinung durch Laubgehölze geprägt.

Historisch gesehen gehörte Mutsu-no-kuni entsprechend seiner geographischen Lage zu den entlegenen Gegenden. Aber in den Wechselfällen der japanischen Geschichte wurde es immer wieder vom Zentrum unterworfen und in den Strom der allgemeinen Entwicklung mitgerissen.

Das könnte bedeuten, daß es an sich eine Möglichkeit hatte, ein politisch unabhängiges Land zu bilden.

Der Zeitraum, in dem die Felsgräber gebaut wurden, über die wir im folgenden berichten. erstreckt sich vermutlich über 150 Jahre zwischen dem 6. und 8. Jhd., Das enspricht der Zeit, als der japanische Staat des Altertums sich zu seinem letzten Krieg um die innere Einheit rüstete.

Für das Vorkommen der Felsgräber dieser Zeit in Mutsu-no-kuni ist charakteristisch, daß es im nördlichen Gebiet, außerhalb des heutigen Provinz Miyagi, keine solchen Anlagen gibt. Die Verbreitung der Felsgräber entspricht also den Amtsbereichen der vom Zentrum eingesetzten Vögte.

"Felsengrab" ist hier zu verstehen als eine Grabanlage, die waagerecht in den Felsen getrieben wurde. Der Typus entstand im 5. Jahrhundert in Kyushu und hatte sich vermutlich Ende des 6. Jahrhunderts bis nach Nordostjapan ausgebreitet.

Ein Felsengrab besteht aus der Grabkammer für die Leiche, einem offenen Vorraum und der Fassade. Es gibt auch einen Typ, der zwischen Grabkammer und Fassade einen langen Gang aufweist. Die Beigaben bestehen hauptsächlich aus Waffen wie Eisenschwertern, Pfeilspitzen aus Eisen, Pferdetrensen und Schmuck wie Magatama, Armbändern aus Kupfer, goldenen Ringen. Sie wurden mit den Leichen in die Grabkammern gelegt. Werkzeuge und Keramik sind in den Grabkammern nur ganz wenig gefunden worden. Dagegen gibt es häufige Keramikfunde bei der Fassade oder in dem offenen Vorraum, in dem Zustand, wie sie damals geopfert wurde.

II Verlauf der Untersuchung der Shichiken Felsgräber

Diese Gruppe ist zufällig bei einer Rodung entdeckt worden. Daraufhin ließ die

Kultusbehörde von Yabuki-cho die Gräber 1981 untersuchen. Die Untersuchung wurde unter der Leitung von Yoshiaki Meguro durchgeführt; für den Bericht ist Masayoshi Fukushima verantwortlich.

III Struktur der Shichiken-Felsgräber und Funde.

Diese Gräber wurden am Abhang eines Taleinschnitts angelegt, den der Izumigawa gebildet hate. Etwa 80m westlich von dieser Gruppe ist das berühmte Izumizaki-Felsengrab. Das deutet an, daß hier vielleicht einmal eine größere Gruppe von Gräbern existierte. Bei unserer Untersuchung wurden zwei Gräber festgestellt.
Grab I wurde bei der Rodung gefunden, und seine Decke und der offene Vorraum sind vollkommen zerstört. Es ist 3,94m lang. Die Achse ist um 35° nach Nordosten ausgerichtet und öffnet sich nach Südwesten. Der Grundriß der Grabkammer war vermutlich viereckig mit abgerundeten Ecken. Bei der Rodung wurden ein vergoldetes Schwert, drei Eisenschwerter und eine Sueki-Keramik gefunden. Grab II befindet sich westlich von Grab I. Der Eingang und ein Teil der Grabkammer sind verloren, aber die Grabkammer war vorher nie geöffnet worden. Das Grab ist 2,63m lang, die Achse ist um 10° nach Nordosten ausgerichtet und öffnet sich nach Süden.
Im nordwestlichen Teil der Grabkammer sind 14 Pfeilspitzen aus Eisen, ein Messer und eine Pinzette gefunden worden. Als Bauzeit sind für Grab I die Mitte des 7. Jhd. und für Grab II die erste Hälfte des 8. Jhd. zu vermuten.

Beigaben
I Die Izumizaki Felsgräber und ihre Funde

Am Anfang unserer Kenntnisse über diese Gruppe steht die Entdeckung von zwei Gräbern im Jahre 1917. 1935 wurden fünf weitere Gräber beim Straßenbau entdeckt und von Giro Iwagoe u.a. untersucht. Dabei ergeben sich die folgenden Strukturen : Drei haben Grabkammern mit viereckigem Grundriß und deutliche Fassaden. Weitere drei haben eine schmale Grabkammer und nicht deutlich ausgebildete Fassaden.
Bei einem Grab ist die Struktur unklar.
Die Funde summieren sich zu drei Eisenschwertern, drei eisernen Ohrringen, zwei Messern, einer Sueki-Keramik und zwei Hajiki-Keramiken.
In der Grabkammer von Grab IV finden sich Malereien in roter Farbe. An der Rückwand ist folgende Szene dargestellt : In der Mitte haben sich vier Personen an den Händen gefaßt ; ihre Beine sind weit gespreizt ; sie tanzen. Links von dieser Gruppe sind zwei mit Röcken bekleidete Personen, die Opfergaben emporheben, bis zur Höhe ihrer Gesichter. Sie wenden sich zur Mitte. Rechts von der Vierergruppe zielt eine Reiterfigur auf ein fliehendes Tier.
Malereien auf der nördlichen Wand zeigen eine große Spirale, eine Reiterfigur mit erhobenen Händen, einen Reitknecht, ein gesatteltes Pferd und zwei weitere Pferde. Sie sind dem Eingang zugewandt.
An der südlichen Wand gegen die Rückwand hin finden sich Punkte und ein Pferd. An der Decke sind Spiralen verschiedener Größe.
Hauptsächlich in der Provinz Fukushima gibt es noch andere Beispiele von bemalten

Felsgräbern. Es gibt viele Beispiele mit Darstellungen von Spiralen, Pferden, Hirschen und Personen. Es wird vermutet, daß diese Darstellungen Elemente einer damaligen Mythologie in jeweils verschiedenen Kombinationen zeigen.

II Eisenschwerter aus den Felsgräbern im südlichen Fukushima

Ein Schwert besteht aus Klinge, Griff und Scheide. Die wissenschaftliche Beschäftigung mit Schwertern müßte also davon ausgehen, diese Grundstruktur zu klären. Aber die bisherigen Arbeiten über antike Schwerter haben das Hauptgewicht auf die Schmuckformen gelegt : Untersuchungen vom Standpunkt der Konstruktion aus fehlen bisher. In dem vorliegenden Bericht werden die Schwerter vorgestellt, die im südlichen Fukushima ausgegraben worden sind. Die Analyse legt das Schwergewicht auf die konstruktive Seite, besonders auf die Struktur der Schwertgriffe. Die Griffe der vorliegenden Eisenschwerter werden nach fünf verschiedenen Gruppen klassifiziert und mit Material aus Gräbern in Westjapan und dem Material aus dem 8. Jhd. im Shosoin in Nara verglichen.

Als Ergebnis wird vermutet, daß sie hauptsächlich im 7. Jhd. produziert worden sind. Daraus folgt, daß der Höhepunkt der Felsgräberkultur im südlichen Fukushima ins 7. Jhd. fällt, also 100 Jahre später stattfindet als im westlichen Japan.

図　　版

Abb. 1

七軒・泉崎横穴群の航空写真

Abb. 2

1　七軒・泉崎横穴群の遠景(南から)

2　七軒横穴群の近景(東から)

1　2号横穴と1号横穴（南から）

2　2号横穴と1号横穴(東南から)

1　1号横穴　（東から）

2　1号横穴　（北から）

Abb. 5

図版第五　七軒横穴群

1　1号横穴の玄門部(東から)

2　玄室入口側の排水溝(東から)

3　1号横穴の屍床(南から)

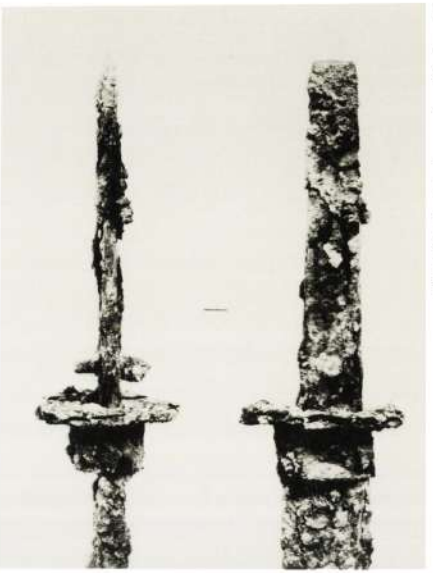
1　2号横穴の玄室(入口から)

2　2号横穴の玄門部(上から)

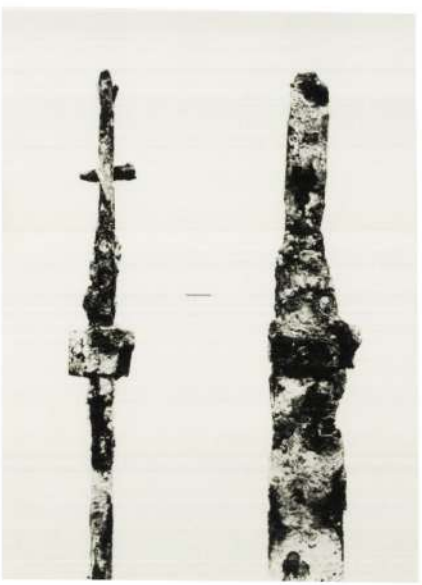
Abb. 7

1号横穴から出土した鉄刀

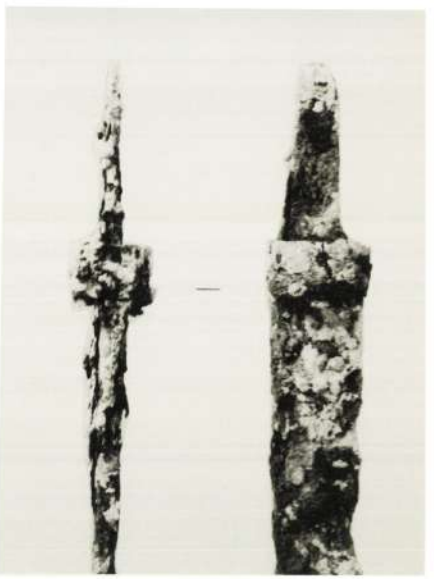
1　1号A刀の把部



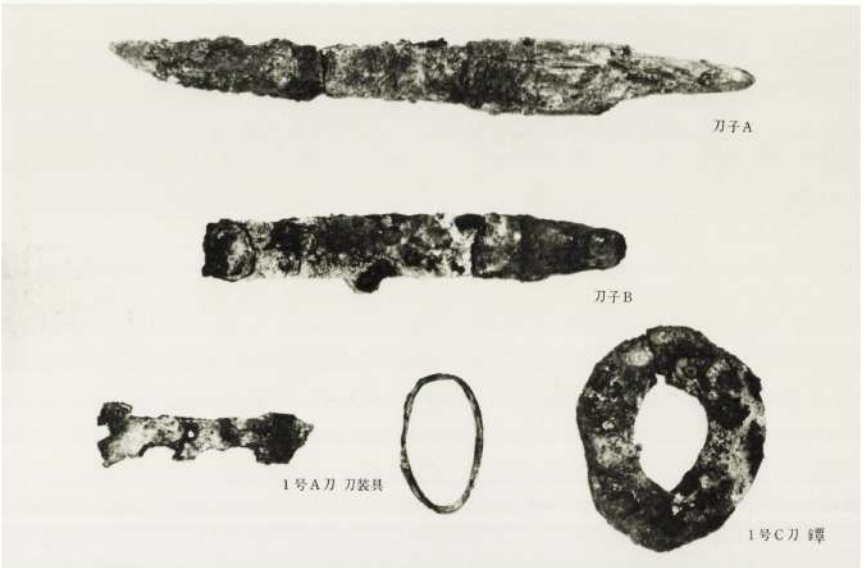
2　1号B刀の把部



3　1号C刀の把部

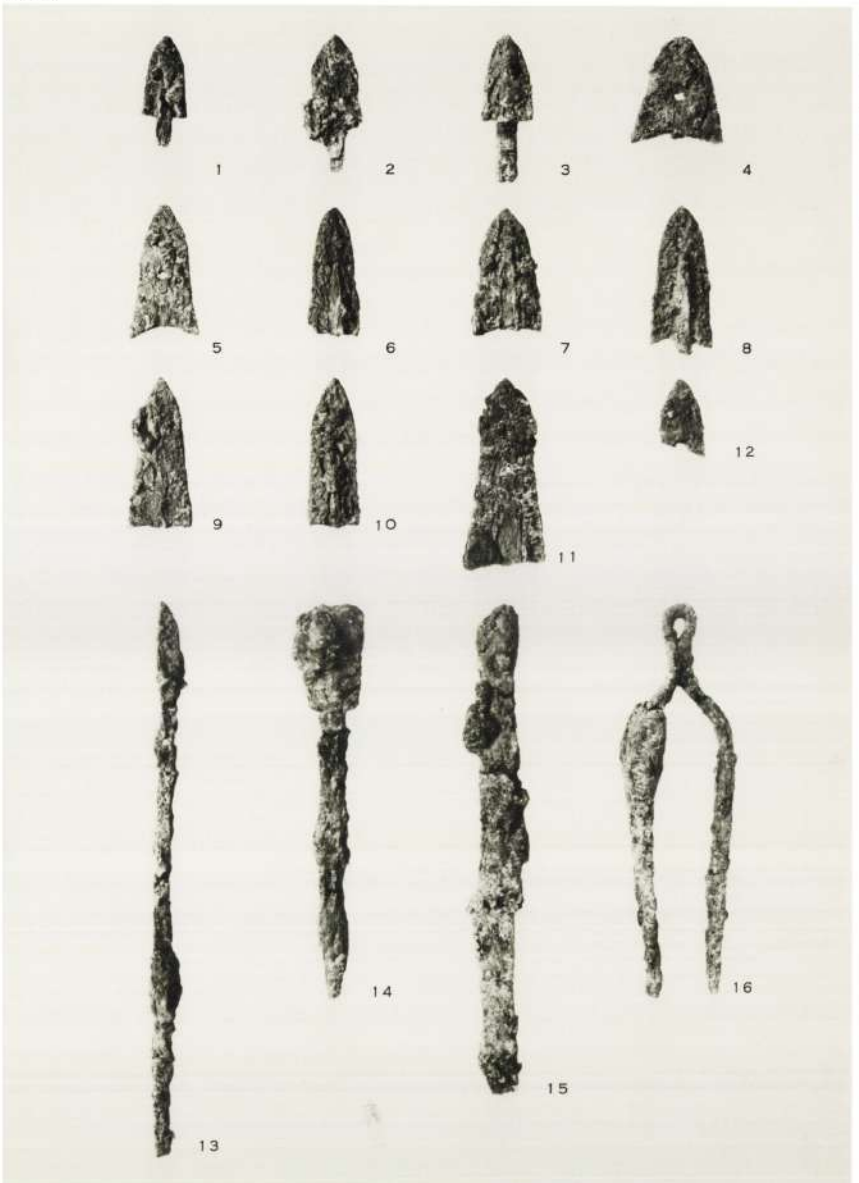


4　1号D刀の把部



1　1号横穴から出土した刀子と刀装具

2　1号横穴から出土した須恵器



2号横穴から出土した鉄製品

1　白石山支群遠景（南から）

2　陣場支群（1・2号横穴）から白石山支群を望む

1　3号横穴と4号横穴の玄門（右側4号に壁画）

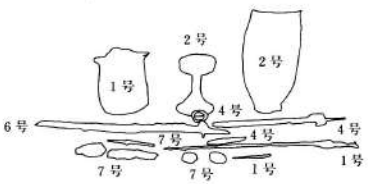
2　4号横穴の入口を覆うドーム

1　4号横穴玄室　奥壁および天井部の壁画

2　4号横穴玄室　奥壁の壁画

1　4号横穴玄室　北壁の壁画

2　4号横穴玄室　南壁の壁画


2号
2号
1号
4号
4号
6号
7号
4号
7号
7号
1号
1号

佐久間忠助
佐久間留男
根本 儀一
上田 三平
赤沼龍二
工事監督
須金 善勝
堀江繁太郎
岩越 二郎
三村 文吾

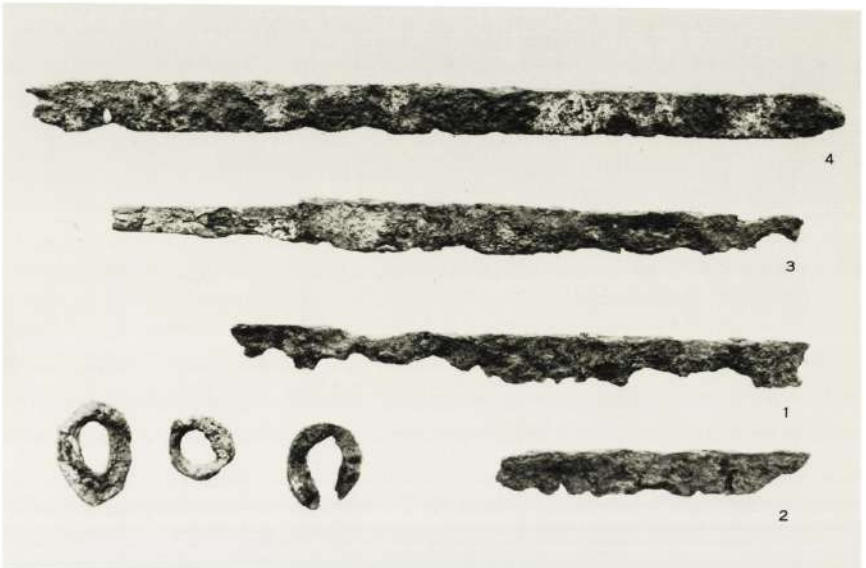
1　泉崎横穴群から出土した遺物

2　昭和8年泉崎横穴群発掘関係者記念撮影

Abb. 16

泉崎壁画横穴（4号）の玄室

図版第一六　泉崎横穴群



1　泉崎横穴群から出土した鉄製品

2　2号横穴から出土した須恵器と土師器

Abb. 18

図版第一八　白河観音山横穴群

白河観音山横穴群から出土した鉄刀

七軒横穴群

矢吹町文化財調査報告第6集

昭和58年3月31日

発行　矢吹町教育委員会
(〒969-02) 福島県西白河郡矢吹町一本木101

印刷　㈲平電子印刷所
(〒970) 福島県いわき市平北白土字西ノ内13